342
483
342-483
12005014008 09

83

改訂 肥後藩國事史料

巻四

342-483-1

改訂 肥後藩國事史料 卷四

目次

文久三癸亥年七月十三日本藩老臣長岡監物小笠原備前相會して國是を議す……一
七月十三日本藩政府は江戸藩邸事務省略の訓令を發す……一
七月十四日姉小路兒變取調掛我藩宮部鼎藏轟木武兵衛は水戸藩梶清次右衛門等と連署して薩藩士禁門内往來の禁を解かれたることにつき意見書を提出す……二
七月十五日幕府長藩に小倉侵入の兵を撤退すべきを命す……四
七月十五日長州下關砲臺守備の壯士等攘夷監察使正親町公董につきて小倉征伐の請願書を上る……五
七月十六日今夜朝議を開き島津久光召命のことを中止せらる……七
七月十六日幕府使番牧野左近村上求馬中根市之丞に九州派遣を命す……七
七月十八日我藩は九州各藩連衡して力を公武合体に盡さんとの議を決す……八
七月十八日杵築藩使者を熊本に遣し海岸防備及ひ長倉交渉の事に關して意見を徵し且つ臨時助力を乞はんと欲するの意を陳ふ……一〇
七月十九日朝廷再ひ御用の外薩人の禁門通行を禁せらる……一二
七月十九日我藩庄村助右衛門增田八十六に砲器火藥研究の爲め長崎出張を命す……一三
七月廿日我藩兵を增遣して三條氏の邸を警固するに決す……一三
七月廿二日我藩外七藩建春門内の警衛を命せらる……一四

七月廿二日中川宮家用人伊丹藏人山田勘解由町奉行所に預けらる……一六
七月廿三日幕吏牧野左近村上求馬中根市之丞豐前田浦に至る尋て長人に拘留せらる……一六
七月廿四日朝廷攘夷監察使を紀州加田播州明石等に差遣して其勵行を檢せしめ若し朝旨に悖り傍觀長縮の輩あらば嚴譴に處すへき旨を列藩に達せらる……一七
七月廿五日在京本藩重臣沼田勘解由は京都警衛拜辭困難の事情を藩政府に報し且つ長岡護美の上京を促す……一八
七月廿五日越前藩の副使酒井十之丞熊本に來着す……二〇
七月廿五日本藩外交掛寺尾太門大里八左衛門小篠熊雄等小倉に赴き長倉二藩の狀況を視察して之を藩政府に申報す……二〇
七月廿六日我藩神谷矢柄を肥前に遣し公武合躰周旋のことを談合せしむ……二三
七月廿六日本藩政府は攘夷に關し朝旨幕議の阻隔を憂ひ公武に對する藩主建白書の案文を草して之を京師に送る……二五
七月廿六日越前藩の使者岡部豐後熊本に來着す……二八
七月廿六日筑前藩の使者白水白熊本に來り共藩世子の上京を報す……二九
七月廿六日夜松平春嶽の旅館に充つへき京都東山高臺寺に火を放つ者あり……二九
七月廿七日小倉藩の使者熊本に來り攘夷決行に關し苦慮する所の內情を陳へて我藩の斡旋を乞ふ……二九
七月廿八日筑前藩の使者公武合躰周旋談合の使命を帶ひて熊本に來る……三一
七月廿九日遣薩慰問使長谷川仁右衛門等歸藩復命す……三三
七月廿九日本藩住江甚兵衛國老小笠原備前に見え兵端を開かすして攘夷の實を擧げ以て人心を治むへきを說き此意味を以て己親しく出京して公武合躰關東委任の周旋に當らんことを請ふ……三九

七月下旬本藩宮部鼎藏山田十郎は土藩土方楠右衛門と共に時局に關する建白書を朝廷に上る……四〇
七月晦日幕府は屢々海陸防備及ひ士氣振興の命を下すと雖も猶未た其實の見るへきものなきを以て特に專任者を置きて之を督勵せしむべき旨を各藩に通達す……四三
七月晦日越藩の使者我藩主に謁して越藩主父子の書を呈す……四四
七月晦日我藩は杵築藩の使者に答書を授く……四五
七月某日本藩余田三右衛門は京攝間の探索に係る幕府の人材缺乏と薩州を襲擊せし英艦處分の失策及ひ京都に於ける諸藩攘夷論の眞相等を報告す……四七
八月朔日我藩使者神谷矢柄肥前より歸る……四八
八月二日朝廷本藩士林藤次及ひ永島三平を召さる……四八
八月二日久留米藩使者を熊本に遣して豐前大里海防應援の命を受けたることを報し且つ列藩一和公武合躰して攘夷の功を奏せんことを議る……四九
八月二日在京本藩重臣沼田勘解由は京都の事情を藩政府に報し建白中止、藩兵東上、自己西下等の件を通議す……五〇
八月四日朝廷松平容保に破約攘夷の布告を促さる……五一
八月四日松平阿波守は攘夷監察使の命達にもとつき幕船を始めすべて異國形の船舶通航の節は豫報を得たき旨を幕府に申達す……五一
八月四日米澤藩は姉小路暗殺嫌疑の囚人逃亡の者探索に關する我藩の配慮を謝し且つ彼藩主に對し責任解除の朝命ありし旨を報す……五二
八月五日日華門前に於て會津因州阿波米澤等諸藩兵の分列式を行ふ……五三
八月五日我藩老臣小笠原備前越藩の副使に會見す……五四

八月五日佐賀藩使者を熊本に遣して時局に關する我藩の交渉に答ふ……五四
八月六日越藩使節岡部豐後三岡八郎熊本を辭して薩摩に向ふ……五五
八月七日朝廷本藩の献納米を免し和筒献上を命せらる……五五
八月七日幕府軍艦旗の制を定む……五六
八月七日藩主慶順及ひ長岡護美答書を松平春嶽父子に贈る……五七
八月七日在京長岡内膳は公武に對する我藩主の上書案を閲して朝旨に副はさるものと認め沼田勘解由に附して
　意見書を送り藩主の復考を希望す……五八
八月七日柳河藩使者を熊本に遣して時局に對する打合をゐす……五八
八月八日我藩の在京探索生薩藩の堂上諸家出入の狀況を報す……五九
八月八日大村丹後守長崎總奉行に任せらる……六〇
八月十日將軍家茂親しく幕吏を引見して近々鎖港談判開始の旨を告く……六〇
八月十日我藩は筑前の使者に答書を授け交渉の趣旨贊同の意を表す……六一
八月十日我藩老臣小笠原備前西肥の使者中野數馬を引見して彼藩國議のある所を聞く……六三
八月十一日本藩山川龜三郎森尾龍彦等に砲器製造係等を命す……六五
八月十一日在京本藩奉行鏑田軍之助は藩政府に對し此際愈に公武合躰を主張するは禍を招くの恐あり若し之を
　遂行せんと欲せは兵力を擁するの必要あらんと報告す……六五
八月十一日横井平四郎越前福井を發して熊本に歸る……六六
八月十二日我藩答書を佐賀藩の使者に授け公武周旋に關し爲さんと欲する所を告く……六八
八月十三日傳奏野宮定功等は攘夷祈願の爲め大和に行幸あり尋て親征の軍議を開き且つ神宮にも參拜あるべき
　旨の勅諚を傳ふ尋て因州備前阿波米澤の四藩親征猶豫の請願をゐす……六九
八月十三日幕府は實名俗名共に今上の御諱字を憚るへき旨を達す……七二
八月十三日薩藩の内使藤井良藏等熊本に來る……七二
八月十四日朝廷大和行幸外夷親征準備の爲め諸藩の志士を擇み之れに出仕を命せらる……七二
八月十四日幕府は天草に異船渡來の節警衛として我藩の兵を出すべき旨を命達す……七三
八月十四日在京本藩奉行鏑田軍之助書を藩政府に贈り藩兵上京の急務ゐる所以をのへ且つ藩主若くは連枝の親
　しく上京して公武一和の爲めに斡旋の勞をとらんことを請ふ……七四
八月十四日本藩井上加左衛門長谷川仁右衛門薩藩の使者に會して共口演書を受く……七五
八月十四日侍從中山忠光池内藏太藤本津之助吉村寅太郎等に擁せられて大和天之川に一揆を起す……七六
八月十五日幕府は京都江戸大坂及ひ諸國海岸防禦に關し諸藩の意見を諸問す……七七
八月十五日藩主慶順親しく弟長岡護久に上京を命す……七八
八月十五日藩主慶順書を松平春嶽父子に贈り爰に共協商に答へたりと雖も爾後時勢の轉變は姑く自己の上京を
　許さゝる事情あるを以て弟護久を代理として上京せしむへき旨を通告す……七八
八月十五日我藩老臣書を越藩老臣に贈り彼藩特使派遣の禮に酬ゆること能はさる所以をのぶ……七九
八月十五日宮部鼎藏眞木和泉山田又助久坂義助桂小五郎等學習院に於て大舉の鹵簿等のことを議す三條實美萬
　里小路博房烏丸光德東久世通禧之に臨む……八〇
八月某日我藩久留米筑前兩藩に使者を遣し長岡護久藩主に代り上京すへき旨を報す……八〇
八月十六日朝廷親征の用途十萬金の調達を我藩及ひ加州長州薩州久留米土州等に命せらる……八〇
八月十六日關白應司輔熙三條實美と共に島津久光召登の議を阻止す……八三

八月十六日幕府閣老板倉勝靜に海陸御備向御用を命す……八三
八月十七日天忠組大和五條の代官鈴木源内等を掩殺す……八四
八月十八日朝廷の形勢一變し薩會力を合せて長の勢力を驅逐す尋て三條實美等七卿長州に下る……八六
八月十八日勅使長藩邸に臨み其禁衛を解き退京を命す尋て長藩三條實美の復職を請願す……一三〇
八月十八日本藩各所警備の概況を幕府に申告す……一三一
八月十八日本藩政府は越前使者の行動を在京重役に通報す……一三二
八月十八日本藩政府は本月二日附沼田勘解由よりの情報及ひ自己西下の通議に答ふ……一三三
八月十八日在京本藩奉行鎌田軍之助は時局の急變に關し藩政府に通報す……一三五
八月十八日本藩政府は時局切迫につき長岡護久藩主に代り上京すへきの命を受たる旨を達し且つ之を京師に報す……一三六
八月十八日本藩政府は坂崎忠左衛門組上京に關する出發日限及び人數割を定め在京の奉行に通牒す……一三七
八月十八日京都の變に當り西岡鄕士澁谷時太郎等十餘人馳せて本藩親兵宿所淨華院に來り藩兵と共に忠節を盡さんことを請ふ……一三九
八月十九日朝廷更に長岡護美召喚の勅諚を下さる……一四〇
八月十九日朝廷攘夷の勵行を幕府に促さる……一四〇
八月十九日立花飛驒守は書を我藩主慶順に贈り相互協商國事に盡す所あらんと欲する意を陳ふ尋て慶順同意の旨を答ふ……一四〇
八月十九日在府本藩田中彦右衛門は三港拒絶に對する幕議の内情を報告す……一四一
八月廿日在京本藩奉行鎌田軍之助は行事延期の勅諚及ひ三條實美等の動止等を藩政府に報告す……一四四
八月廿日本藩重臣郡夷則公武一和に對する藩主周旋の心悟を在府の藩士に達す……一四五
八月廿日在京越藩士牧野主殿助靑山小三郎天授庵ふる我藩詰所に來り時局に關し懇談する所あり……一四六
八月廿一日勅して三條實美等七名の歸京を長藩に促さしめらる……一四七
八月廿一日本藩家老上京の有無に關し野宮傳奏雜掌の照會に答ふ……一四八
八月廿一日鎌田軍之助京地の事態報告の爲めに歸國の途に就く……一四九
八月廿一日松平容保に天誅を加ふへしとの落書をふす者あり……一四九
八月廿二日京都町奉行より天忠組暴擧につき和州十津川鄕鑓役等に心得方を達す……一四九
八月廿二日三條實美西下の途次書を宮部鼎藏に授けて阿波に使せしむ鼎藏翌日德島に到り尋て其書を國老蜂須賀駿河に渡す……一五〇
八月廿二日會藩平野次郎を捕へんとして之を逸す……一五一
八月廿三日本藩轟木武兵衛山田十郎に歸國を命す……一五二
八月廿三日米澤因幡備前阿波の四藩主連署して長州寛典三條實美等召還の建白書を朝廷に上る……一五五
八月廿四日傳奏野宮定功は三條實美等の參内を停め官位を褫ひ長藩の禁門警衛を止められたる旨の示達書を因州藩に交附し之を列藩に廻達せしむ……一五五
八月廿四日幕府は豊後日田及ひ其附近幕領の警備を本藩に命す……一五七
八月廿四日幕府京都事變鎭靜に對する會津藩主の功を賞す……一五八
八月廿四日我藩は薩藩使節に覺書を授け來月中旬藩主代として長岡護久を上京せしむへき旨を告く……一五八
八月某日幕府英國に對し琉球は正に本邦の屬領たることを回答す……一五九
八月廿五日朝廷諸藩に幕命を待たす速に攘夷を決行すべき旨を達せらる……一六〇

八月廿五日朝廷廣幡大納言忠禮外八名に免職又は差控を命じたる旨を達せらる……一六一
八月廿五日本藩武相兩國に於ける預所鄕村を幕府代官木村董平に引渡を了す……一六一
八月廿五日横井平四郎熊本に歸着す時に同行の越藩使臣榊原幸八等其藩主父子の我藩主及ひ長岡護美に贈る所の書を齎す……一六二
八月廿五日本藩内藤泰吉書を嘉悅市之進安場一平に贈り京都に於ける浪士の追捕勤王家の處置及ひ變後の經綸につき越藩等より長岡護美の出京を期待せる狀況等を報す……一六五
八月廿五日薩土二藩士傳奏に上書して親兵解除の議を唱ふ……一六七
八月廿六日左大臣二條齊敬去ル十八日以後の勅諚は眞の叡旨に出つるものとの旨を傳宣す……一六八
八月廿六日我藩外廿八藩去月十八日の變に於ける禁闕守衛の勞を賞せらる……一七〇
八月廿六日本藩長岡護美上京のことを決す……一七一
八月廿六日在京留守居青地源右衛門は寺町門警衛心得に關する傳奏野宮家雜掌の通牒を得て之を監察長鹽庄兵衛に報告す……一七一
八月廿六日本藩京都留守居は宮部鼎藏が三條實美に隨て長州に赴きたる旨を傳奏野宮定功に具申す……一七一
八月廿六日本藩備頭坂崎忠左衛門等の一隊熊本を發して上京の途に就く……一七三
八月廿六日本藩末家細川大和守佃島警衛を命せらる……一七三
八月廿六日本藩選出親兵某十八日以後の事情を在藩の同志者に通報す……一七三
八月廿六日長藩老臣根來下總歎願書を携へて上坂す朝廷之が入京を許されす……一八二
八月廿六日和州五條屯集の浪士高取城に迫る守兵擊て之を走らす……一八四
八月廿七日本藩政府は長岡護久同護美を上京せしむるを以て近習次組脇三池尉右衛門使番石寺甚助同佐方長左衛門同速水市之允に命し各鹿兒岡福岡久留米竹田佐賀に使せしむ……一八六
八月廿七日三條實美等防州三田尻に到る……一八八
八月廿七日宮部鼎藏書を德島藩老臣蜂須賀駿河に贈り三條實美等西下の意を陳へて藩主に勤王を勸めしむ……一八九
八月廿八日幕府は大和五條の擧に鑒み本藩警備に屬する日田陣屋の警戒を嚴にすべき旨を示達す……一九一
八月廿八日幕府は海岸砲臺並に各地警衛及ひ京師變動の殘黨取締につき各藩に示達す……一九二
八月廿八日本藩老臣有吉市左衛門は長岡護久同護美に從ひ備頭沼田勘解由は家老代役として共に上京を命せらる……一九三
八月廿八日天忠組また高取城に迫る城兵擊て之を退く……一九四
八月廿八日薩藩重野孝之丞吉井忠助一橋邸に至り内治を先にし鎖港を後にすべきの意見を進め且つ慶喜の上京を懇願す……一九五
八月廿九日將軍再上洛のことを發令す……一九六
八月廿九日藩主慶順書を鍋島閑叟に贈り親ら進て上京すること能はさる事情あるを告く……一九六
八月廿九日島原藩の使者熊本に來り攘夷の期限に至らは特に我藩に倚頼すとの意を通す……一九七
八月廿九日本藩田中彦右衛門鎖港問題に關し一橋板倉兩家の間に斡旋して意見の調和を圖る……一九八
八月晦日朝廷松平美濃守に長崎に於ける浪士鎭撫を命せらる……二〇一
九月朔日朝廷諸藩士の堂上諸家に出入することを制限せらる……二〇二
九月朔日幕府佛英米蘭字五國公使に對し曩に小笠原長行の與へたる鎖港に關する書翰の返戻を要求す……二〇二
九月朔日本藩三池尉右衛門を鹿兒島に遣し長岡護久同護美上京のことを告けしむ……二〇三
九月朔日嘉木武兵衛山田十郎長州に下る……二〇四

九月朔日岡藩の內使仲島瀧右衛門熊本に來着す……一〇四
九月朔日本藩留守居中山左次右衛門は將軍上洛及ひ鎖港前後の問題に關する幕府閣老の意見を探り之を報告す…一〇五
九月朔日三條家諸大夫丹波出雲守は我藩青木彦兵衛と共に三田尻を發して熊本及ひ久留米に向ふ……一〇七
九月朔日宮部鼎藏蜂須賀齊祐の三條實美に與ふる口上書の交附を受く……一〇八
九月二日幕府洋書調所を開成所と改稱する旨を達す……一〇八
九月二日幕府江戸城並に郭內外の警衛を嚴にす……一〇九
九月二日閣老板倉勝靜將軍上洛、横濱鎖港の問題に關し獨斷を以て酒井忠績に通牒せし件につき閣老間に意思
　の疏通を缺きたるを以て自ら出仕せす……一〇九
九月二日本藩は前月十八日寺町門を警備せし人員調書を松平慶德に提供す……一一三
九月二日松平春嶽書を我藩主慶順に贈り今や京畿の情況急迫にして皇國の爲め臣子の最も力を盡すべき時なり
　と雖も未た逼塞免除の朝命に接せさるを以て已むことを得す上京を中止して先約に反するを陳謝す……一一四
九月二日會藩安部井政次は我藩田中彦右衛門に京師の近況を語り將軍上洛の肝要なる所以を告く……一一五
九月二日佛國士官一名武州保土谷暮暗坂に於て殺害せらる……一一六
九月三日監察使正親町公董三田尻を發して肥筑に向ふ……一一七
九月三日佐賀藩使者を熊本に遣し公武合躰の周旋に關し薩筑二藩の交渉に對する我藩の意向を問ふ……一一八
九月三日我藩老臣長岡監物小笠原備前書を裁して越藩岡部豐後か長崎よりの書信に酬い併せて長岡護久同護美
　兄弟相伴ひ來十一日を以て出發上京すべき旨を告く……一一九
九月四日朝廷我藩外廿三藩に京都市內の警固を命せらる……一二〇
九月四日所司代稻葉正邦は大和一揆追討の奉書を各藩に廻達す……一二一
九月四日松平出羽守は所司代より交附せし三條實美等七名及ひ中山忠光追捕の令を廻達す……一二三
九月四日我藩使者佐方長右衛門岡藩より歸る……一二三
九月四日宮部鼎藏德島を退き長州に向ふ……一二四
九月四日丹羽出雲守青木彦兵衛と共に熊本に着す尋て三條實美の藩主慶順及ひ長岡護美に贈る所の書を出し時
　局挽回の義擧を慫慂す……一二五
九月五日所司代稻葉正邦は有栖川熾仁親王攘夷の勅使として東下あるへき旨を通達す……一二七
九月五日監察使正親町公董筑前黑崎に着す……一二八
九月五日藩主慶順松平春嶽父子の書に答へ横井の處分は書意を諒すと雖も從來の法典は之を無視すべからさる
　旨を陳ふ……一二八
九月六日我藩は佐賀藩の使者に答書を授く……一二九
九月六日我藩使者速水市之尤佐賀藩より歸る……一三〇
九月七日親兵を解散せらる……一三一
九月七日本藩は長岡護美の三條實美に答ふる書を丹羽出雲守に授く……一三一
九月七日我藩使者石寺甚助福岡に到る……一三三
九月七日內藤泰吉書を嘉悅市之進安場一平に贈り朝政多く中川宮近衛忠熙父子松平容保等の手に出つること、
　越藩の內情、和州一揆の狀況大久保勝の登用、列藩の對長態度、及ひ親兵解散等のことを報す……一三四
九月八日本藩は新町頭の警備に關し疑義の點を朝廷に稟申す……一三七
九月八日鼎木武兵衛山田十郎周防富海に着し直に三田尻に赴きて三條實美等に謁し眞木和泉に會して長州の國
　情を知る次て實美等の謀議に參す……一三八

九月八日因州藩主松平相模守は大和一揆に關する津藩主藤堂大學頭の申報書を回達す……二四一
九月十日本藩長岡護久同護美をして上京警衛の任に當らしむへき旨を傳奏並に所司代に上申す……二四三
九月十日唐津藩使者を熊本に遣して外夷掃攘長崎警衛に關し豫め應援を求む……二四四
九月十日本藩士小坂小平太三田尻より書を在京の小坂大八等に與へ八月十八日の變及ひ長岡護久等の上京に關する意見をのべ且在長志士の間に會薩擊攘の議あることを報す……二四五
九月十日京極能登守長崎奉行に任せらる……二四七
九月十日幕吏外人殺害事件に關し横濱に於て佛人と應接す……二四七
九月十一日所司代稻葉正邦禁闕守護の選士歸國に關する御沙汰を傳ふ……二四七
九月十一日幕府府下警戒の令を發す……二四八
九月十一日長岡護久同護美上京の途に就く有吉市左衛門等之に隨ふ……二四八
九月十一日舊親兵小坂小次郎高木元右衛門加屋四郎は八月十八日前の勅意を奉承すへしとの決心を以て京師を發し長州に走る……二六〇
九月十一日在府本藩士牛島五一郎書を熊本の社中に贈り本藩國是の確立を喜ひなほ之を實行せんか爲めに有爲の士を出府せしめんことに盡力すべきを望み且つ幕府對外交渉の非議すべきもの多きを嘆じ外交に關する文書數葉を附す……二六四
九月十二日本藩は傳奏飛鳥井雅典に備頭坂崎忠左衛門の上京を申告し且つ長岡内膳の賜暇を上請す……二六七
九月十二日夜傳奏飛鳥井雅典は長人多く金剛山に籠り和州一揆と呼應せんとすとの風聞あるを以て我藩に河州邊警備の内意を傳ふ……二六七
九月十二日本藩選出の親兵を歸藩せしむへき旨を朝廷に申告す……二六九
九月十二日秋月藩使者を熊本に遣す……二七〇
九月十二日我藩唐津藩の使者に答書を授く……二七〇
九月十二日越藩使臣平瀨儀作横井平四郎宥恕のことを以て我藩老臣小笠原備前に會見す……二七一
九月十二日島津久光鹿兒島を發して上京の途に就く……二七一
九月十四日傳奏飛鳥井雅典は和銃献上に關する八月七日の傳達は全く朝旨にあらざるを以て献上に及ばざる旨を我藩に達す……二七二
九月十四日本藩留守居は傳奏飛鳥井雅典に就きて逮捕浪士等の一言に據り禁門守衛の兵を動す可らざる所以を縷陳して河州警備の内命を辭す……二七三
九月十四日閑老板倉勝靜等米蘭兩國全權と築地軍艦操練所に會し横濱鎖港の談判を開く……二七四
九月十四日我藩使臣三池尉右衛門薩藩より歸る……二八六
九月十四日本藩小坂大八以下舊親兵に歸國を命す……二八七
九月十六日我藩使臣石寺甚助筑前、小倉、久留米の三藩より歸る……二八八
九月十六日毛利慶親使者を廣島に遣して出坂延期を歎願す……二九二
九月十七日有栖川宮家より熾仁親王東下につき我藩選出の舊親兵を陪從警衛せしめられたき旨の賴談あり……二九二
九月十七日長岡内膳時局に鑑みる所あり下國延期の内意を傳奏飛鳥井雅典に上申す……二九三
九月十七日宮部鼎藏防州富海に着す……二九四
九月十七日三條實美等宮部鼎藏藤木武兵衛山田十郎等に三田尻會議所詰を命す……二九四
九月十八日朝廷長岡内膳の内願を嘉納し河州邊警固に及はさる旨を達せらる……二九五
九月十八日因州藩留守居は先月十八日の變に際し御所警衛の勞に對する下賜金分配決定の旨を通報す……二九五

九月十八日本藩小坂大八以下舊親兵三十四名明日京都出發歸藩を命せらる……一九六
九月十八日佐賀藩使者を熊本に遣し公武合躰周旋の爲め藩主代として末家を上京せしむへき旨を報す……二九七
九月十九日幕府再ひ英佛兩國公使と鎖港の談判を開かんと欲す彼遂に應せす……二九九
九月十九日本藩日田天草に出兵の議を決す……二九九
九月十九日島津久光上京の途次熊本を通過す……二九九
九月廿日本藩幕府の示達により一隊の兵に日田天草出張を命す……三〇〇
九月廿日侍從六條有義は長藩家老根來上總其主慶親歎願の旨を含みて上坂し勸修寺家に依りて上書せし由を我藩留守居に內告す……三〇一
九月廿一日越後長岡藩主牧野忠恭老中に任せらる……三〇三
九月廿二日本藩留守居中山左次右衛門は生麥事件に關し薩人英と直接談判を欲すること及ひ因備二藩會津を退けんとすとの疑心を懷く者あることを報告す……三〇三
九月廿三日親兵御用懸姉小路駿河守畑肥前守は親兵に對し賜金の御汰沙を傳へ且つ解放の旨を達す……三〇四
九月廿三日幕府令して益々府下の警戒を嚴にせしむ……三〇五
九月廿三日本藩政府山田十郎の消息を探らしむ是日日出藩の使者熊本に來る……三〇六
九月廿五日我藩使者を西國郡代屋代增之助に送り不日藩兵を日田及ひ天草に出すべき旨を回答す……三〇六
九月廿五日在京本藩奉行道家角左衛門は本藩と中川宮との間を阻隔せんとする者あることを在藩の同僚に報す……三〇八
九月廿五日松平慶倫等六名連署して薩長の和睦を計り且つ長藩主父子上京の允許あらんことを朝廷に建白す……三〇九
九月廿六日朝廷長人の私に上京潛伏の聞あるを以て長藩に命し藩邸吏數人の外滯京を禁し從僕に至るまで氏名を開申せしめらる……三一〇
九月廿六日所司代稻葉正邦は松平定雲州松江藩主安の留守居を召喚して十津川鄉士懷柔に關する奉書を下付し各藩に回達せしむ……三一一
九月廿六日幕府は英國代理公使に對し武州金澤に於ける邦人を射擊せし者の糺斷を要求す……三一一
九月廿六日岡藩の使者仲島瀧右衛門熊本に來る……三一二
九月廿七日兩傳奏雜掌は書を本藩留守居に致して都下警衛主管の變更を通告す……三一三
九月廿七日幕府は海外貿易の開始以來諸色拂底して物價騰貴せしにつき諸商人の注意を促す……三一五
九月廿七日我藩日田警衛の兵を出す……三一六
九月廿七日和州激徒退散し中山忠光等脫して大坂の長藩邸に入る……三一七
九月廿七日本藩青木彥兵衛は曩に正親町公董に隨從して長州に下向せしが是日三條實美壬生基修の內書を携へて上京す……三一九
九月廿八日朝廷我藩の新町頭警衛を免せらる……三二一
九月廿八日本藩天草警衛の兵を出す……三二一
九月廿八日長岡護久同護美京師に至り西本願寺の旅館に入る……三二一
九月廿八日薩藩英國と橫濱に於て生麥事件及ひ薩州砲擊事件に關する談判を開く……三二三
九月廿九日朝廷在京諸侯の參內順番を定めらる……三二〇
九月廿九日本藩長岡內膳の下國を朝廷に請願す……三二一
九月廿九日本藩京都留守居は當時在京の諸侯及ひ其旅館を調査して之を上局に報告す……三二三
九月廿九日本藩上田久兵衛葉室慎助に警衛に關する要務を帶ひ天草出張を命す……三二三
九月某日豐州英彥山の僧徒遙に長州と聲息と通す……三二五

九月某日小倉藩使を熊本に遣し京師變動につき攘夷に關する我藩の對策を問ふ……三三五
十月朔日藝藩世子松平淡路守は長岡護美より着京の挨拶をなしたるに答ふ……三三八
十月二日長岡護美本日勤番に當りて參内す……三三九
十月某日長岡護久同護美京都守護職松平容保に將軍上洛の事を談す……三四〇
十月二日朝廷長岡内膳に歸國の暇を賜ふ……三四〇
十月二日我藩日出藩の使者に答ふ……三四〇
十月三日錦小路頼德轟木武兵衛を從へて三田尻より山口に至り澤宣嘉の失踪を三條實美に告く……三四二
十月三日元親兵本藩西島龜太郎萱野嘉右衛門は一同解除の命を受け相携へて歸藩の途次讃岐より奔て長州に赴く……三四二
十月四日我藩は京都に於て薩藩と使价を通じ肥薩會土力をあはせ時局の解決に當らんことを謀る……三四三
十月四日在京の我藩吏は京極家と交渉の結果桂川を以て本藩の警備地と決せし旨を藩地に報す……三四五
十月四日薩英談判を繼續し翌日之を終了す……三四五
十月五日朝廷諸浪士取押につき猥に宮門跡方地内に進入すへからすとの旨を達せらる……三六一
十月六日松平春嶽勅免を蒙り尋て上京を命せらる……三六二
十月六日朝廷春來堂上に入說せし諸藩浪士の取調を各藩に嚴命す……三六三
十月六日本藩吉田少右衛門に砲器製造懸を命す……
十月七日朝廷先月十四日より横濱に於て鎖港談判開始につき攘夷別勅使有栖川伯宮の關東下向を暫く延期せらる……三六三
十月七日正親町公董差控を命せられ渡邊相模守東辻圖書權助十津川鄕鎭撫として派遣を命せらる……三六四
十月七日紀伊茂承京都を發して大坂に下る……三六四
十月八日幕府は紀伊茂承の大坂城守衛並に攝海防禦の命を受けたる旨を各藩に通達す……三六五
十月八日所司代稻葉正邦は取締上必要あるを以て寺院町家等に滯在せる諸藩士の姓名を申告せしむ……三六五
十月九日在防州宮部鼎藏は八月十八日の政變に關し其起因及ひ當時の實況自己の心事等を熊本なる姻戚中尾平馬に報す……三六六
十月十日會藩使者を我京都の本陣に遣して共に將軍上洛の周旋に當らんことを勸む……三六八
十月十日本藩在京重役は去八月十八日禁裡守衛として出張せし兵士に對し朝廷より賜金の御沙汰ありし旨を傳ふ……三六九
十月十日本藩桑坂熊四郎京都より書を家鄕の社中に贈り松平春嶽に上洛の朝命ありし事薩藩より因州藩主の歸國を阻止せし事及ひ兵庫海軍所落成の事等を報す……三六九
十月十一日將軍家茂に上洛すべしとの勅命あり……三七一
十月十一日武州川越藩主松平直克政事總裁職に任せらる……三七一
十月十一日松平紀伊守は當番割の通り參朝して天機を奉伺すべく以後宿直は之を免せらるべき由を列藩に傳達す……三七二
十月十一日在京の門生等書を在熊の師横井平四郎に贈り島津久光參内遲延の事情會薩關係の内情及ひ松平春嶽上洛の朝命を受けしことを報す……三七二
十月十一日澤主水正宣嘉平野次郎等に擁せられて是日但馬に入り銀山に據りて檄を四方に飛し且つ生野に滯留の旨を出石藩に通告す……三七五
十月十二日在京本藩重役は藩政府に通牒して藩臣浮浪の徒取調に關する意見をのふ……三八二

十月十二日松平下總守武州忍藩主は加藤越中守江州水口藩主及ひ長岡護美に明日參内勤番に當るべき旨を報す……三八四
十月十三日松平下總守は回章を以て參朝當番割を列藩に報す……三八五
十月十三日園老酒井忠績海陸警備事務分擔を命せらる……三八七
十月十三日本藩安場一平會薩連合等の事につき在府同志者と應酬する所あり……三八七
十月某日幕吏阿部越前守外人の援助を借りて長州を征すべしと幕府に建白す……三八九
十月十四日所司代稲葉正邦は將軍上洛中といへとも横濱鎖港の談判を經續すへしとの勅諚を守護職より通報せしを以て共旨を各藩に廻達す……三八九
十月十四日幕府は米國公使に對し下關に於ける米船ペムブローク號砲撃の償金を仕拂ふへき旨を通告す……三九〇
十月十四日幕府は江戸城諸門警衛の事を各藩に示達す……三九三
十月十五日幕府は諸藩士及ひ浪士の調査に關する件を更に江戸に於て各藩に通達す……三九五
十月十五日因州米澤外二藩の留守居は傳奏の示達を受け八月十八日各處警衛に參加せし諸藩老臣以下陪臣等にも亦賜金の恩命降下ありし旨を通報す……三九五
十月十七日本藩田中彦右衛門は鎖港問題に對する在横濱内外人士の意向を我在府當局に報告す……三九七
十月十七日元親兵木原彦四郎等八月十八日の變につき本藩政府の尋問に答ふ……三九七
十月十八日我藩は將軍上洛周旋の爲め道家角左衛門を江戸に派遣す……三九八
十月十八日岡藩主中川久昭は時局の變に際し其臣小河彌右衛門等を處罰せんと欲すれとも其曾て叡感を蒙りし者なるを顧慮し書を長岡護美に贈り事情を陳へて其意見を叩く……四〇〇
十月十八日松平春嶽上京す……四〇一
十月十九日長岡内膳熊本に歸着す……四〇一
十月廿一日元田八右衛門國老小笠原備前に見にて都築横井等處罰の寛典ならんことを請ふ……四〇二
十月廿二日本藩は本日より廿五日にかけ元親兵木原彦四郎長沼英之助小橋武雄澤村復四郎住江庄太郎岩間廣之助同次郎助佐々淳次郎野尻武右衛門財津熊之助小坂大八同小半太等に各外出他人面會文通等を禁す……四〇一
十月廿二日長岡護久同護美答書を松平春嶽に贈り將軍速に上洛し有力の諸侯と一致戮力して天下の爲めに盡されんことを希ふとの意をのふ……四〇五
十月廿三日三條實美等檄を我藩河上彦齊に授け九州諸藩の士氣を鼓舞せしむ……四〇六
十月廿三日三條實美等三田尻より山口に移る……四〇七
十月廿三日宮部鼎藏京情偵察の爲め長州を發す……四〇七
十月廿五日本藩兵を桂村に出して警備せしむ……四〇七
十月廿五日在京本藩重役は藩政府に對し宮部鼎藏等脱藩士の處分に關し照會する所あり……四〇八
十月廿六日一橋慶喜江戸を發し海路上京の途に就く……四〇九
十月廿七日西國郡代屋代增之助但馬一揆等に鑑み任地警衛の爲め我藩兵の出動を要求す……四〇九
十月廿九日中川宮下立賣御門内御殿に移轉せらる……四一〇
十月廿九日眞木和泉家鄉に致すの書を轟木武兵衛山田十郎の三田尻を辭して熊本に歸るに託す……四一〇
十月晦日傳奏野宮定功は去八月十八日以來連に虚説流言をなす者あるを以て猥に之を信すべからすとの旨を示達す……四一二
十月晦日朝廷更に將軍家茂の上洛を促さる……四一二
十月晦日長岡護久同護美松平春嶽を訪ふ……四一三
十月某日本藩偵吏は藩政府の命により探索せし防長の狀況を報告す……四一三

十月某日本藩偵吏は大和五條事變の視察報告書を提出す……四一五
十月某日幕府去九月廿一日渡來の英船を購入して一番長崎丸と稱する旨を布達す……四一五
十一月朔日幕府生麥遭難者の妻子扶助料を英國に渡し事始めて落着す……四二六
十一月朔日藩主慶順は長岡內膳の京都周旋の功勞を賞す……四二六
十一月朔日飯田熊之助日田陣屋警衛の爲め熊本を發す……四二七
十一月三日幕府大目付大久保豐後守外國奉行池田筑後守同河津三郎太郎目付岩本半太郎に歐洲出張の內意を達す……四二七
十一月五日將軍家茂上洛の事を發表す……四二八
十一月五日閣老板倉勝靜は將軍上洛周旋の爲め滯府中の我藩道家角左衛門を引見し將軍來月を以て上洛すへきに決せし旨を告けなほ本藩の盡力を望む……四三〇
十一月五日在京本藩重役は小篠熊雄宮川小源太草野平藏等を下して在長本藩志士等の動靜を探らしむ……四三一
十一月五日本藩長崎留守居匂坂平右衛門は去年十月より本年十月に至る一ヶ年間長崎出入の外船員數調書を藩政府に提出す……四三三
十一月六日藩主慶順は松平春嶽の先月二日附の書に答ふ……四三四
十一月六日我藩山田十郎轟木武兵衛捕縛の命を出す是日山田等歸國の途次筑後府中驛に於て捕へらる……四三五
十一月七日左大臣一條忠香薨す……四三六
十一月七日本藩長谷川仁右衛門三條實美等の處分に就き松平春嶽の所見を叩く……四三七
十一月七日本藩住江松翁同甚兵衛廣吉半之允に旅人面會他所文通等を禁す……四三七
十一月八日傳奏飛鳥井雅典野宮定功は在京の浪士を嚴に取調へて之を其舊主に復せしめ復歸を許さゝる事情あるものは十萬石以上の諸藩に招致すへき旨を達す……四三八
十一月八日本藩山田轟木護送の爲め鄉士廿人點檢吏十五人を久留米に遣す……四三九
十一月九日我藩は三條實美等歸洛周旋に關する筑藩の交渉に答ふるに暫く時期を待つへき旨を以てす……四三九
十一月九日本藩大砲鑄造及ひ傳習用懸として招聘中の增田八十六に同事業終了につき江戸に歸還を命す……四四〇
十一月九日山田十郎轟木武兵衛米藩人に護送せられ海路より高橋を經て熊本に着す……四四一
十一月十一日本藩茂見龜之助に飯田熊之助代として日田出張を命す……四四一
十一月十四日本藩奉行道家角左衛門江戸より京都に還る……四四一
十一月十五日江戸城火を失し本丸二ノ丸共に炎上す……四四二
十一月十六日本藩は京都守護職の通牒により寺町門の警衛を一層嚴ならしむ……四四三
十一月十七日江戸城炎上につき將軍家茂清水邸に移る……四四三
十一月十七日薩人村上下總中川宮に謁し我藩に命して横井平四郎の幽囚を解かしめられんことを請願す……四四三
十一月十九日幕府は浪士徘徊不穩の擧動あるを以て府下戒嚴の命を出す……四四四
十一月十九日松平春嶽伊達宗城島津久光等江戸城炎上によりて將軍上洛の延期せられんことを慮り京都守護職松平容保の邸に會して京都町奉行永井主水正を東下周旋せしむることを議決す……四四四
十一月廿日閣老松平宗秀大坂を發して江戸に向ふ……四四五
十一月廿日京都町奉行永井主水正將軍上洛周旋の爲め京都を發し關東に下る……四四五
十一月廿日在京本藩重役は久留米藩邸に於て探知せし山田轟木就縛の顚末を江戸重役に通報す……四四七
十一月廿日在京本藩重役は我藩亡命の志士洛中に出沒するの風聞あるを以て之が追捕を命す……四四八
十一月廿一日我藩士長谷川仁右衛門將軍上洛周旋の爲め越前宇和島鹿兒島の諸藩士と共に京師を發して江戸に

向ふ……四四九
十一月廿一日西國郡代屋代增之助は天草に於て反幕の氣勢を煽る者ある由を我藩に内報す……四五二
十一月廿一日大坂火あり翌々曉に至りて漸く鎭まる……四五三
十一月廿三日在京本藩重役は元親兵山田轟木宮部等同志者の處置に對する藩政府の通議に答へ且つ京地の事情を報す……四五四
十一月廿六日將軍家茂田安邸に移る……四五五
十一月廿六日一橋慶喜着京す……四五五
十一月廿七日幕府來月下旬を以て將軍の上洛すべき旨を發表す……四五六
十一月廿七日松平容保答書を長岡護久同護美に贈り明日訪問すべき旨を報じ且つ江城炎上につき將軍上洛少しく遲延すべきの報を得たることを告く……四五六
十一月廿八日本藩長谷川仁右衛門將軍上洛周旋の爲め江戸に着す……四五七
十一月廿九日薩藩の使者京都の我藩旅館に來り生麥事件の償金を英國に與へしことを辯明す……四五八
十一月廿九日本藩小篠熊雄宮川小源太等藝州探索より歸る……四五八
十一月某日長岡護美方今の事務に關する意見書を藩政府に提出す……四五九
十一月某日紀州水戸兩藩士建白書を尾張慶恕に提出し國家の爲めに共奮起を望む……四六四
十二月朔日本藩監察藪作右衛門時局に對する國議を携へて着京す……四六六
十二月三日幕府窪田治部右衛門に西國郡代として日田在勤を命す……四六八
十二月三日本藩八木又助奥田庄左衛門に出田十郎兵衛等と交代の爲め天草出張を命す……四六九
十二月五日越藩使節平瀨儀作小笠原備前を訪ひ横井等罪案の評議を延期せんことを乞うて去る……四六九
十二月五日幕府は將軍上洛に關し諸關門及ひ府下警戒の條規を示達す……四七〇
十二月六日中川宮近衛德大寺一橋以下二條關白の邸に會し將軍上洛の事を議す長岡護久同護美亦之に列す……四七三
十二月七日長岡護久同護美は一橋慶喜外七名と共に連署して中川宮に關する浮說辯疏の封事を奉る……四七四
十二月九日幕府は關門通過の證に供する印鑑提出を諸藩に命す……四七五
十二月十日長岡護久同護美は松平春嶽松平容保等と連署して書を閣老に贈り將軍の上洛を促す……四七六
十二月十日長岡護久同護美松平春嶽を訪ふ……四七七
十二月十一日勸修寺家雜掌三宅某等伏見に至り長藩老臣井原主計の携ふる所の其主毛利慶親の奉勅始末書を受領し歸りて之を朝廷に上る……四七七
十二月十二日傳奏野宮定功は主用なき藩士の滯京禁止亡命激徒の取締及ひ脫藩人招聘等に關する御沙汰書を列藩に回達す……四八三
十二月十二日幕府は浪士處分に關する令を發す……四八四
十二月十二日本藩は將軍上洛の際と雖も警衛に關する急用に限り東海道宿驛人馬使用の特許あらんことを道中奉行一色山城守に申請す……四八五
十二月十三日幕府普國と和親條約締結を了す……四八六
十二月十四日所司代稻葉正邦市中狼籍者取締の令を發す……四八六
十二月十四日長岡護久同護美は松平春嶽松平容保稻葉正邦伊達宗城黑田慶賛と一橋慶喜の旅館に會し長州處分の事を議す薩藩大久保一藏其主の意を承けて其席に陪す……四八七
十二月十五日羽州庄内藩主酒井左衛門尉府内取締の功により拾七万石の格となる……四八七
十二月十六日本藩横井平四郎都築四郎等を罰す……四八七

十二月十六日在京本藩重役は將軍上洛に關する狀況及ひ土因水諸藩國議の歸着する所を藩政府に報告す……四八九
十二月十七日一橋慶喜長岡護久同護美の旅館を訪ひ交歡を盡す……四九一
十二月十七日遣外使節の迎船佛國より横濱に來着す……四九一
十二月十八日中川宮及ひ越前宇和島二藩主の間に長岡護久同護美官位叙任の評議あり……四九二
十二月十九日幕府は府下警戒の爲め柵門番所建設に關する令を發す……四九二
十二月十九日松平春嶽長岡護久を本願寺の旅館に訪ふ……四九三
十二月廿日塙次郎江戸三番丁に於て暗殺せらる……四九四
十二月廿一日幕府は將軍上洛不在中府下の狀況に應し臨時出兵せしむることあるべき旨を各藩に令達す……四九四
十二月廿一日長岡護美明日を期して松平春嶽伊達宗城島津久光を招待す……四九五
十二月廿三日關白鷹司輔熙の辭職を聽許せらる……四九六
十二月廿三日幕府は關八州村々將軍上洛中は特に謹愼を加へ不取締の儀なき樣心懸くへき旨を達す……四九六
十二月廿三日幕府更に府下柵門建設に關する令を發す……四九七
十二月廿四日幕府來廿七日を以て將軍發途上洛すべき旨を達す……四九八
十二月廿四日幕府は將軍上洛留守中府下往復の農商僧侶社人山伏等關門通過の件に關する心得を示達す……四九八
十二月廿四日幕府は市ヶ谷加賀屋敷に硝石會所を設け硝石製造賣買の取締をなす……四九九
十二月廿四日長人下關に於て薩の借用汽船を外國船と誤認して之を砲擊燒失せしむ……五〇〇
十二月廿五日一橋慶喜松平春嶽松平容保黑田慶賛長岡護美二條城に會し諸侯及ひ其臣僚を朝議に參與せしむる件を議す……五〇五
十二月廿六日細川大和守は曩に非常の節は兵を田安門外に出すべきの命を受けしと雖も募兵にして不備の點多かるべき旨を豫め幕府に申告す……五〇六
十二月某日幕府は將軍上洛不在中川筋通船取締の令を發す……五〇七
十二月廿七日朝廷議奏を任命せらる……五〇七
十二月廿七日將軍家茂海路上京の途に就く……五〇八
十二月廿七日遣外使節池田長發河津祐邦等横濱を發し歐洲に向ふ……五〇八
十二月廿九日幕府瑞西との通商條約に調印す……五一〇
十二月廿九日我藩主慶順書を松平春嶽に贈り横井平四郎處分の事を報す……五一〇
十二月晦日朝廷一橋慶喜松平春嶽松平容保伊達宗城に朝政參與を命せらる……五一一
十二月晦日在神奈川英國領事は輸入税輕減に關する閣老板倉勝靜同井上正直の書翰を英國商民に公示す……五一三
十二月某日幕府は浪士徘徊長人潛伏の風聞あるを以て京師警固の諸藩に令し更に取締を嚴ならしむ……五一四
十二月某日肥後國飽田郡小島村（今飽託郡小島町）正泉寺の僧佐田介石（當時本願寺學僧）長藩處置に關する意見書を一橋慶喜松平春嶽に提出す……五一四
元治元甲子年正月二日閣老水野忠精は長岡護久同護美と會見して參豫の諸侯日々二條城に登り幕議に預るへきことを語る……五一七
正月八日將軍家茂上洛の途次大坂に着す……五一八
正月十日因州藩主池田慶德上疏して開國の不可を論し長州寛典の必要を陳ふ……五二〇
正月十一日秋岡縫殿は元勸修寺宮及ひ大原重德の還俗を仰出されたる旨を在京の我藩吏に報す……五二二
正月十二日幕府は辻番組合に令して警戒を嚴ふらしむ……五二二
正月十三日島津久光朝議參豫を命せらる……五二三

正月十四日閣老井上正直諏訪忠誠等英國公使と横濱にて會談す……五四四
正月十四日勝鳳太郎幕府に上書して武備の充實殊に海軍を盛大にすへき所以を陳ふ……五四五
正月十五日將軍家茂上洛二條城に入る……五四七
正月十六日勅使二條城に臨み將軍の上洛を嘉し給ふ……五四八
正月十七日在京本藩重役は長岡護久同護美叙任豫防の事に關し藩政府に通報す……五四九
正月十八日在長州三條實美等は外夷掃攘の微衷を盡さんとして却て嫌疑に觸れ情意の貫徹せさりしを歎し陳情書を上る……五五〇
正月十九日幕府は將軍既に大坂に至りしを以て暫く停止せる東海道筋の通行を許すへき旨を諸藩に通達す……五五一
正月廿日將軍家茂に右大臣の宣下あり翌日家茂參内して公武一和の勅諭を拜す……五五二
正月廿二日西國郡代屋代增之助は關東筋代官に轉し窪田治部右衛門之に代りし由を報す……五五四
正月廿三日長岡護久同護美二條城に登り將軍家茂に謁す……五五四
正月廿八日本藩藤木武兵衛の訊問を開く……五五四
正月下旬對外問題につきては參豫諸侯の間に異論ありしも遂に横濱を鎖し長崎箱館を開くことに決し長州の處分につきては幕閣因循にして決する所ふし……五五六
正月某日在京の我藩人岩崎昌重京都に於ける薩藩活動の狀況を家鄕の兄に報す……五五七
二月朔日長岡護美政事總裁松平春嶽と交渉する所あり……五五九
二月朔日本藩政府は在京重役に對し時務の變轉逆睹すへからさるを以て岡崎新邸の建築は暫く時機を見て之を決行すべき旨を通牒す……五六〇
二月二日松平春嶽我藩重臣沼田勘解由を引見し長岡護美任官の内議あるを告けて其意見を問ふ……五六一
二月三日本藩藤木武兵衛の訊問を繼續す……五六二
二月三日島津久光大隅守と稱す……五六二
二月四日幕府は將軍家茂に神武帝陵修補の功により從一位宣下ありし旨を達す……五六三
二月四日三條實美宮部鼎藏高木元右衛門等を召して東上の事を謀る……五六三
二月某日在京の本藩人京都の形勢將軍の宸翰拜受及ひ遣外使節の出帆等を報するところあり……五六三
二月五日幕府は佛艦下ノ關に來寇せんとするの風聞あるを以て特に軍艦奉行並勝鳳太郎目付野勢金之助に命し長崎に赴きて之か防止に力めしむ……五六四
二月五日藤木武兵衛自殺を企てしも成らす……五六六
二月七日我藩日田警備兵の一部を撤退すへき旨を屋代增之助に通報す……五六六
二月八日參豫閣老等二條關白の邸に會し長州處置につき議決する所あり……五六七
二月十日長岡護美松平春嶽を訪ひ因循の幕習を打破するの要を說く……五六七
二月十日岡藩老臣中川藏人を熊本に遣して去年來我藩の周旋せしことを謝し且つ今度藩主上京留守中のことを依賴す……五六八
二月十一日幕府は征長軍の部署を定め内命を我藩外十數藩に傳へて豫め出師の準備を調へしむ……五六九
二月十一日久留米藩主使者を熊本に遣し勅命によりて上京すべきを報じ且つ我藩主の共に上洛して戮力王事に盡さんことを誘ふ……五七一
二月十一日山田十郎獄中より書を其妻に送りて心事を陳べ幼兒の教育等を委囑す……五七一
二月十二日長岡護美書を島津久光に贈り明日陽明家に候せんことを約し且つ筑藩世子姫路に滯り同藩士内訌を生したることを告く……五七四

二月十四日我藩久留米藩の使者に答ふるに目下長岡護久同護美兄弟上京斡旋中ふるを以て藩主は其勸誘に應し難き旨を以てす……五五五
二月十四日本藩使吏は閣老井上正直英國公使と横濱に會して談判せし要領筆記寫を提出す……五五六
二月十四日宮部鼎藏防州三田尻より書を中尾平馬に致して自己の動止及ひ時勢の概況を告け家族の扶養を依頼す……五六三
二月十四日宮部春藏長州より書を中尾平馬同七藏に贈り昨年來の行動を報す……五六五
二月十五日幕府松平容保を軍事總裁に任じて共京都守護職を罷め松平春嶽をして之に代らしむ……五六六
二月十五日鹿島根本寺内に屯集せる水戸浪士等鹿島神領の標柱の邊に佛像の首を梟し攘夷の血祭をふす……五六七
二月中旬長岡護久同護美時局に對する我在京老臣の意見を徵す……五六八
二月十六日松平淡路守阿州世子書を長岡護美に贈り其應可家往訪の模樣及ひ橋越土諸侯參内に關する消息を聞かしめんことを乞ふ……五七一
二月十六日大和一揆の徒十九名京都の獄に於て處刑せらる……五七一
二月十七日宮部鼎藏書を家庭に送りて自己の進退心事を告け祖先追遠子女教育等を依託し家事經營苦心慘澹の情狀あるべきを慰む……五七三
二月十八日幕府は滯坂を命じ置たる毛利元周押て上京せんとする虞あるを以て我藩に命じ警備地を嚴守せしむ……五七六
二月十八日長岡護久同護美は長州の事は總て朝廷の措置を仰きて適當の處分をふすべきことを幕府に建白す尋て朝廷にも同建白書を上る……五七七
二月十八日宮部春藏書を長州より家鄉の姉妹に贈り兄弟の心事を報す……五八一
二月十九日幕府は京地警衛の爲め陣營胸壁砲臺等の建設地點視察として吏員を出張せしむへき旨を本藩に達す……五八二
二月廿日元治と改元あり……五八二
二月廿一日我藩政廳に於て山田十郎の訊問を開く……五八三
二月廿一日長崎奉行等立山役所に於て英國艦長キングストン等と會し聯合艦隊の長州砲擊延期並に英人傷害事件に關する談判を開く……五八四
二月廿二日一橋慶喜長州處分に關する幕閣の密議を長岡護美に内示す……五八六
二月廿二日長岡護美書を松平春嶽に贈り山科宮家に藩兵派遣のことにつき交渉する所あり……五八七
二月廿二日在京の我藩人參豫の任命、外國聯合艦隊襲來の風聞、京都守護職の交代及ひ征長準備の幕命等中原の形勢を報する者あり……五八八
二月廿三日朝廷重ねて松平容保に參豫拜命すべき旨を達せらる……五八九
二月廿三日軍艦奉行並勝鱗太郎目付能勢金之助等長崎に着す……五九〇
二月廿三日長人木梨某米澤を遊說し次て山形秋田を歷訪す……五九〇
二月廿三日筑藩世子黑田慶賛長州處分に關し幕府に建白す……五九〇
二月廿四日幕府は先月廿七日將軍參内の節賜はりし宸翰の寫及ひ本月十四日將軍の捧呈せし請書の寫を各藩に廻達す……五九一
二月廿四日我藩日田及ひ天草警備兵の一部を撤する旨を西國郡代に通牒す……五九四
二月廿四日沼田勘解由京都より歸藩す……五九五
二月廿五日山内容堂答書を長岡護美に贈り來廿八日を以て歸國すべく明後日來訪あらは面晤を得べき旨を告く……五九六
二月廿六日幕府諸侯を二條城に會し公武一和に關する意見を徵す……五九七
二月廿六日本藩森井惣四郎は幕府の對外交渉、水戸の事情、其他江府の形勢を報す……五九八

二月廿八日關白二條齊敬は長州末家並家老召喚の件に關し一橋慶喜を經て長岡護久同護美の意見を徵す……六〇〇
二月廿八日長岡護久同護美幕府に上書して速に歸藩を許され藩主を助けて幕令の貫徹に努力せんことを請ふ……六〇一
二月廿九日長岡護久同護美は長州末家並家老召喚の件に關する二條關白の諮問に答へ尙其謄本を一橋慶喜に贈る……六〇二
二月廿九日長岡護美賜暇歸國の事につき松平春嶽に照會する所あり……六〇二
二月某日本藩大野鐵兵衛を千葉城の獄に投す……六〇三
二月某日薩藩は方今の急務は攝海の防備を嚴にするに在りとし之に對する藩士の意見を徵すると共に藩の持論は萬古不易の攘夷を行ふに在りとの旨を示達す……六〇四
三月朔日幕府は本年八九月頃迄に人別改帳を提出すべき旨を各藩に令達す……六〇五
三月朔日本藩老臣平野九郎右衛門に上京を命す……六〇五
三月二日長岡護久同護美參內す傳奏より勅諚を傳へて猶滯京すべきを命せらる……六〇五
三月三日藩主慶順先月十一日發征長に關する幕令に對し請書を提出す……六〇六
三月三日長岡護久同護美長州處分寬典を可とするの意見書を一橋慶喜に提出す……六〇六
三月四日在京本藩老臣は中川宮及ひ山階宮に衛士派出に決定せし旨を藩政府に通報す……六〇七
三月四日幕府汽船順動丸を本藩に讓受けの議あり……六〇八
三月四日我藩人長野濬平津留次郎左衛門久留米、福岡、佐賀、柳川四藩の國情軍備等の視察として出發し次で其見聞記を提出す……六〇九
三月四日小倉藩の使者熊本に來り征長準備の幕命ありしことを報し且つこれにつきて我藩の意向を問ふ……六一三
三月五日松平春嶽書を長岡護美に贈り其歸國願の件につき一橋邸に到り會談せむとの意を通す……六一七
三月五日岡藩の使者熊本に來る……六一七
三月六日仙臺藩は閣老板倉勝靜の交附したる横濱鎖港に關する勅書及ひ將軍の奉答書を廻達す……六一八
三月六日長岡護久同護美幕府の諸問に答へ自今一層朝廷を尊崇し天下の人心を一にし專ら武備を整へ防禦を嚴にし以て攘夷の實効を奏すべき事を建白す……六一九
三月七日將軍家茂參內して叙任の恩遇を拜謝す……六二一
三月八日長岡護美中川宮に參候す一橋慶喜松平春嶽亦到る共に慶喜に對して幕政挽回に奮勵すべきを勸告す……六二一
三月八日本藩脫走高木元右衛門小坂小次郎川上彥齊宮部春藏等土方楠右衛門等と事を論して合はす羣て三條實美等眞木水野士方等の諸士と其處置を議す……六二二
三月九日本藩政府は砲器製造入費支辨の爲めに國中に寸志金を募る……六二二
三月十一日藩主慶順襲に三條實美の山田十郎轟木武兵衛に託する所の書を開封す……六二三
三月十一日我藩財を大坂に借るの議あり……六二六
三月十一日本藩人竹崎律次郎長防探索書を郡代中村庄右衛門に送附す此頃藩人增見三八小糸運助等亦長防探索書を提出す……六二六
三月十三日僧介石伊達宗城に謁して興正寺門跡をして長州說得使たらしめられたき旨を進言す……六二九
三月十四日長岡護久同護美は前意を再陳して歸藩を申請す……六三〇
三月十六日本藩警備地數ヶ處に散在して任務盡し難きを以て東山及ひ桂川等の警備を解かれん事を幕府に申請す……六三二
三月十七日朝廷長岡護久同護美の請暇再申に對し今暫く滯京すへきを命せらる……六三三
三月十八日松平春嶽書を長岡護美に贈り種痘をなさんことを勸告す……六三三

三月十八日長岡護美答書を松平春嶽に贈り來月歸國すべきの意を告げ種痘の勸告を謝す……六三三
三月十八日我藩費十萬金を借るに決す……六三三
三月十八日西國郡代窪田治部右衛門支配地巡視の途次熊本に來り實家江口彌左衛門の家に投す……六三四
三月十九日長岡護久同護美は共に久しく外に在るを許さゝる事情あるを以て護美を留めて護久の歸藩を許されん事を申請す……六三四
三月十九日仙臺藩留守居は我藩主參府勤番及ひ京師警衛當番に關する調書を提出すべきの幕命を傳ふ……六三五
三月十九日本藩田中彦右衛門は幕閣の內密及ひ薩會二藩の事情等に關する探索書を提出す……六三七
三月廿日松平備前守は其幕府に提出せる國是意見の草稿を長岡護美に寄贈し一橋慶喜と談合あらんことを望む……六四二
三月廿日本藩脫走の士某長州より京都の情報を得て之を在藩の同志者に傳ふ……六四五
三月廿一日藩主慶順使を窪田治部右衛門の旅館に遣し謝意を表せしむ……六四八
三月廿三日長岡護久參內して歸國の恩命を謝す時に朝廷其警衛の勞を慰し物を賜ふ……六四八
三月廿三日本藩は時勢切迫國財空乏につき求言の命を奉行に示す……六四九
三月廿三日長岡護美松平春嶽を訪ひ其辭職を贊すと雖も其退京を延期せんことをすゝむ……六五〇
三月廿三日本藩庄村助右衛門河瀨典次等勝麟太郎を長崎の旅館に訪ひ横井平四郎託する所の海軍問答書を贈る……六五〇
三月廿四日長岡護久二條城に登る將軍家茂親しく其斡旋の勞を慰諭し劍一口を與ふ……六五一
三月廿五日一橋慶喜後見職を免せられ禁裡御守衛總督及ひ攝海防禦指揮を命せらる……六五一
三月廿五日幕府は軍艦練習所燒失につき假稽古所に於て教授すべき旨を達す……六五二
三月廿五日長岡護久京都を發し歸國の途に就く……六五三
三月廿六日長岡護美は不日發足歸國の途に就くべきを以て氣船二艘借用したき旨を幕府に申請す……六五四
三月廿六日在府本藩奉行副役柏木文右衛門書を在藩奉行に致して長岡護美を會藩主より養子に懇望の由を報す……六五四
三月廿七日長岡護美中川宮に參候して松平春嶽の辭職を聽許あらんことを請ふ……六五五
三月廿八日長岡護美一橋慶喜に謁し松平春嶽の爲めに說く所あり……六五八
三月廿八日本藩新購入の汽船に關する事務擔當者を任命す……六五九
三月廿九日本藩田中彦右衛門は常州鹿島屯集の水戶浪徒に關する消息を傳ふ……六六〇
三月晦日長岡護久歸國の途次陸路播州室津に至り是日乘船豐後佐賀關に向ふ……六六一
三月晦日長岡護美松平春嶽の爲めに正親町實愛に說く所あり……六六一
三月晦日本藩奉行鎌田軍之助を小倉に使せしむ……六六二
三月某日我藩は藩主の參暇及ひ京都警衛割合調書を仙臺藩留守居に送附す……六六二
三月某日本藩人遠山屋兵衛薩藩の近狀を視察報告す……六六三
三月某日本藩藤本九兵衛荒木藤七長筑二藩の關係を探り之を其筋に報告す……六六七
三月某日尾張紀伊龍野大洲等の諸藩國是意見書を朝廷並に幕府に献す……六六八
四月朔日幕府松代藩士佐久間修理に海陸御備向手附雇を命す……六七一
四月二日本藩政府は更に軍備充實の必要上省略並に國益筋の件に關し藩士の意見を徵す……六七二
四月二日長岡護美伊達宗城と共に島津久光を訪ひ請暇のことを談す……六七二
四月三日本藩奉行鎌田軍之助を小倉に遣し出師に關し豫め準備せしめ且つ時局の狀勢を質さしむ……六七四
四月某日防長探索の爲め派遣されたる本藩人本田官右衛門津野田助之允は本藩脫走宮部鼎藏川上彦齊黑瀨市郎助等の消息を報告す……六七五
四月三日本藩は汽船運用に關する要件視察の爲め關八郎助山川龜三郎を肥前久留米等に派遣す……六七七

四月四日筑波山の激徒故水戸齊昭の神位を奉し日光山に詣でんとて野州小栗村に來泊し尋て宇都宮に向ふ……六六八
四月五日長岡護久歸國の途次鶴崎に着す……六八五
四月五日長岡護美尹宮二條家等を歴訪す……六八六
四月某日一橋慶喜は曩に禁裡御守衛總督攝海防禦指揮の任を拜したるを以て麾下を諭して士氣を勵し言路を開く……六八七
四月六日勝麟太郎長崎より歸府の途次熊本に泊す……六八八
四月六日本藩嘉悦市之進京都より書を在藩の社中に贈り幕府專ら威權の維持に力め獨力時局の收拾に當り他の幹旋を厭ふの色あるを以て諸侯多くは退京傍觀せんとする者あるに至りしことを報す……六八九
四月七日内大臣近衛忠房長岡護美に答へて今夕來訪を期待するの意をのふ……六九〇
四月七日松平春嶽京都守護職を免せられ松平容保之に代る……六九一
四月七日在京本藩重役有吉市左衛門は長岡護美の幹旋により尹宮一橋兩家の融合を得たることを藩政府に報す……六九二
四月七日在京本藩奉行右田才助道家角左衛門書を藩政府に贈り守護職任免將軍儉約の模樣等京都の狀況を報す……六九四
四月八日朝廷長岡護美に歸國の暇を賜ふ……六九五
四月八日朝廷伊達宗城松平春嶽島津久光松平茂政に歸國の暇を賜ふ……六九六
四月八日將軍家茂旗下の士に諭して時局に鑑み忠勤の精意貫徹を期せしむ……六九七
四月八日毛利慶親は赤誠を披瀝し三條實美以下西下の心事を陳へて其復職を希ひ父子の内孰れか上京を許されんことを歎願す……六九八
四月九日水戸激徒日光山に會し檄を飛して四方の同志を募り又閑老板倉勝靜に上書して速に姦邪誤國の罪を正し斷然攘夷の令を布かれんことを請ふ……六九九
四月十日御所近火の節諸藩の警衛區域を定めらる……七〇〇
四月十日幕府板倉内膳正其他の諸侯に命じ日光附近を警戒せしむ……七〇三
四月十日長岡護久熊本に歸着す……七〇四
四月十日長岡護美將軍家茂に二條城に謁す將軍親しく慰諭の辭を與へ藩主及ひ護美に各劍一口を與ふ……七〇六
四月十日長岡護美は松平春嶽島津久光伊達宗城等と近衛家に會して離杯を擧け且つ明日參内して長藩主父子の上京及び三條實美等復職の非を陳すへきに決す……七〇七
四月十日正泉寺介石越藩中根靱負を訪ひ防長周旋の目的を告く……七〇八
四月十一日所司代稻葉正邦老中に任じ桑名藩主松平定敬之を襲ぐ……七〇九
四月十一日幕府桑樹を田畑に植付くることを禁す……七一〇
四月十一日長岡護美參内す時に朝廷滯京盡力の勞を慰して物を賜ひ藩主慶順を從四位上に陞叙せらる……七一二
四月十一日本藩久世桂川警衛の兵を撤す……七一三
四月十一日柳河藩の使者熊本に來る……七一三
四月十一日英國公使アルコック閑老牧野忠恭を訪ひ長州に艦隊派遣の必要及び横濱鎖港の不利等を說く……七一四
四月十三日本藩田中彦右衛門は水戸激徒の動靜を報告す……七一五
四月十三日在長崎幕吏三島末太郎は蘭國艦隊長州砲擊の目的を以て一旦江府に集合すべき由を報す……七一八
四月十三日肥後菊池の人東勝右衛門といふ者防州山口城修築奉行となると傳ふる者あり……七一八
四月十四日將軍家茂特に内使服部七五郎を遣して長岡護美國事周旋の勞を慰す……七一九
四月十四日水戸激徒等大平山に據る……七一九

四月十五日長岡護美京都を發して國に歸る是日護美發するに先ち閣老水野忠精の旅館に赴き藩主慶順中將陞任の辭令を受く……七三二
四月十五日本藩演武場に於ける操練に初めて大砲を加へ點火を試む……七三四
四月十六日幕府大番頭に令して水戸激徒の暴行につき豫め隊伍編成に關する意見を徵す……七三四
四月十六日本藩二條邊の警備を免せられ尋て守兵を撤す……七三五
四月十七日藩主慶順從四位上中將陞任の口宣位記等を下附せらる……七三六
四月十七日本藩永屋猪兵衛在鄕兵を引率して大坂詰を命せらる……七三六
四月十七日在府渡邊善右衛門は去ル十二日幕吏英國公使との會見及ひ昨十六日佛國公使との會見の狀況を報告す……七三六
四月十八日本藩力を公武一和に盡すべきを以て諸事を節略し武備を充實すべきの國是を決す……七三七
四月十八日長岡護美大坂を發し海路佐賀關に向ふ……七三〇
四月十八日轟木武兵衛獄中より上疏の草稿と共に書を二子に與へて之を教誨し且つ後事を託す……七三〇
四月十九日松平春嶽京師を發し廿三日國に歸る……七四一
四月廿日長岡護美鶴崎に着す……七四三
四月廿日田中彦右衛門は薩州に於ける西鄕隆盛の起用英佛公使の幕府に對する要請及び幕府に横濱鎖港の議あることを報告す……七四三
四月廿日閣老板倉勝靜の臣川田剛其主の横濱鎖港に決心せし由を金子與三郎田中彦右衛等に漏す……七四四
四月廿日筑藩世子黑田慶賛歸國の途次防州を過り幕長の間を周旋す事遂に成らす……七四五
四月廿一日本藩西本願寺の旅館を撤す……七四七
四月廿四日京都市中取締の令出つ……七四八
四月廿四日長岡護美熊本に歸着し將軍の命と授與の刀とを藩主慶順に傳達す……七四九
四月廿四日本藩は汽船順動丸乘組の幕吏明日熊本止宿につき吏員をして之を接對せしむ（廿七日にも亦此事あり）……七五〇
四月廿五日幕府本藩に帝都守衛陣屋地として壬生村中堂寺村の內畑一萬四千餘坪の地を下附す……七五一
四月廿六日幕府は各藩主の參暇に際しては望に依り軍艦を貸與すへき旨を達す……七五二
四月廿七日長岡護美書を一橋慶喜に贈る……七五三
四月廿八日長岡護美諸老臣を引見して京地の事情を話り憤發一新の秋たる旨を諭示す……七五三
四月廿九日將軍家茂曩に朝廷より委任ありたる横濱鎖港七卿並長州の處置、其他の庶政に關する聖旨に奉答す是日朝廷曩に一橋慶喜等の奏請せる條目十八ヶ條及ひ供御增貢の件に朱批して之を下附せらる……七五三
四月廿九日本藩森井惣四郎は去十七日京地を發して出府せる會津藩士秋月悌次郎の列侯退京に關する談話を報告す……七五八
四月某日幕府は天保度吹立貳朱金の通用停止及ひ其引替のことを布達す……七五九
四月某日幕府松平直克に横濱鎖港事務執扱を命す……七六〇
四月某日因幡對馬大洲新谷の四藩連署して撲夷斷行長州應援の建白書を幕府に提出す……七六〇
五月朔日幕府は武備充實の爲め鋼鐵の器物を廢し砲器に改鑄すべき旨を詰合布衣の吏員に達す……七六二
五月朔日靑地源右衛門藩主慶順叙任の口宣を捧して熊本に着す是日慶順花畑館中虎ノ間に於て之を拜受す……七六三
五月二日將軍家茂參內して東歸の朝允を謝す依て御劍天盃を賜ふ……七六五
五月二日宮部鼎藏三條實美等の使命を帶ひて加州に赴く……七六六
五月二日我藩森井惣四郎は古河藩醫大浦柳濱より大平山激徒の狀況を探り報す……七六六

五月三日幕府新徴組の組織を變更す……七七七
五月三日幕府大和賊徒追討の諸侯を賞す……七七七
五月三日森井惣四郎英艦横濱に來り水兵上陸の由を報す……七八八
五月四日本藩幕府より借受けたる汽船の乘組員を犒ひて物を贈る……七八八
五月四日浪士攝州伊丹の造酒家小西某に迫り攘夷の軍資と稱して金千兩を强請す我藩人を大坂より派して之を糾察せしむ浪士逃逸し僅に一人を捕ふ……七九一
五月五日本藩老臣有吉將監小笠原備前奉行井上加左衛門砲術師範池部啓太等幕船順動丸に乘し長崎出張を命せらる……七九一
五月六日冷泉爲恭の首を京都北大寶寺町に梟する者あり……七九三
五月六日水戸人士中大平山激徒の所業に憤悲し岩船山に據り檄を飛して同志を集め其横行を制せんと欲する者あり……七九三
五月七日將軍家茂京師を發し大坂に下る……七九五
五月七日幕府は神奈川驛人馬使用制限の令を發す……七九六
五月七日田中彦右衛門は京都江戸横濱及ひ大平山等に關する風説聞取書を提出す……七九七
五月八日本藩老臣有吉將監小笠原備前長崎に向ふ……七九八
五月九日毛利慶親は攘夷に關する朝議前後齟齬の點及ひ三條實美矯命といふ事並に討幕の師といふ事等に就き疑議の點を揭けて朝廷に伺書を上る……七九九
五月某日藩に汽船運用に關する要件視察として派遣せられたる我藩關八郎助山川亀三郎肥筑見聞覺書を提出す……八〇一
五月某日備前藩主松平茂政水戸人士の請願を諒し意見を付して朝廷に歎願書を上る……八〇三
五月十日加州世子松平慶寧上京す時に幕府令して京師の警衛に奮勵せしむ……八〇六
五月十日長藩巽船襲來の報を聞き戒嚴令を布く……八〇七
五月十一日將軍家茂攝播海濱を巡視す……八〇八
五月十二日幕府京都に文武稽古所を設くる爲めに書數の素養ある吏員を募る……八一〇
五月十三日傳奏坊城家雜掌は我藩吏員に對し御所附近に於て無禮亂妨を働く者あるを取締るへき旨を達す……八一〇
五月十三日幕府物價調節の令を發す……八一一
五月十三日本藩新に京都守備兵交替の制を定め志水新丞の隊に上京を命し津田三十郎の隊と交代せしむ……八一二
五月十三日本藩森井惣四郎は將軍東歸の報關東に傳はるや之を阻止せんとして監察菊池伊豫守明日上京すへきに決せし旨を報す……八一三
五月十四日將軍家茂明後日を以て大坂出發東歸の旨を達す……八一三
五月十四日勝鱗太郎軍艦奉行に任せらる……八一四
五月十四日本藩田中彦右衛門品川泉岳寺門前に於て暗殺せらる……八一五
五月十五日幕府は閣老稲葉正邦を京都に留めて一橋慶喜等と事務を協議せしむ……八一九
五月十五日幕府は諸侯の京師來去の申告に關し示達する所あり……八一九
五月十六日將軍家茂大坂を發し海路江戸に歸る……八二〇
五月十六日本藩御所警衛心得を關係者に示達す……八二一
五月十六日本藩政府は在京奉行副役藤本常記に命じ横井平四郎救助に關する交渉の件を承諾する旨を越藩に通達せしむ……八二二
五月廿日將軍家茂江戸に歸着す……八二三

五月廿一日幕府は將軍歸着後の府下警戒に關し示達する所あり……八〇三
五月廿二日寺倉秋堤都築四郎を訪ひ薩藩にて英國より昨秋汽船を燒却せし代償として汽船並に鐵炮を受領せし
　こと及ひ佛國留學生派遣の議あることにつき薩人北條右門の横井平四郎にふせる談話の要領を傳ふ……八〇四
五月廿三日閑老水野忠精本藩留守居を召して汽船讓渡不可能の理由を述べ借用願書を提出すへしとの旨を内示
　す……八〇五
五月廿四日京都守護職松平容保已に賜ふ所の官位を移して祖先正之に賜らんことを請ふ……八〇六
五月廿五日朝廷命を長藩に下し勅使大坂派遣を停め吉川監物等上坂を要せさる旨を示さる……八〇七
五月廿五日所司代松平定敬御所九門外晝夜巡邏交迭の旨を達す……八〇八
五月廿六日水戸藩徒抑制に關する命を發す……八〇九
五月廿六日水戸筑前安藝因幡備前等の十一藩楫尾に會して長州應援のことを議す……八〇九
五月廿七日長藩留守居乃美織江は諸事幕府に委任すといふ事の不可ふる所につき朝廷に稟申書を上る……八一〇
五月廿八日將軍家茂布衣以上の吏員を引見して横濱鎖港の爲めに努力すへきを諭し且つ之に對する意見を徵す……八一〇
五月廿八日所司代松平定敬は御所警衛兩番頭の勤務に關し示達する所あり……八一一
五月廿八日幕府更に水戸激徒鎭壓に關する命を發す……八一二
五月廿八日幕府は水藩士朝比奈彌太郎等多數出府につき衝突等無之樣市中廻り松平周防守に達す……八一三
五月廿八日本藩番頭志水新丞京都守衛交代として熊本を發す……八一四
五月廿九日幕府は水戸激徒鎭壓に附帶する關門通過の査察等に關し令達を發す……八一五
五月某日幕府水戸慶篤に横濱鎖港に助力を命す……八一六
六月朔日幕府は物價調節特に生糸綿茶等の價を引下け且つ諸品の製造は舊來の法に據るへきことを達す……八一六
六月朔日幕府は神戸に設置せる海軍操練所を開き旗下の子弟をして其技を練習せしめ且つ四國九州中國邊各藩
　士の入學を許すことを示達す……八一七
六月朔日大平山の浪士復筑波山に移る……八一八
六月二日井伊掃部頭京師警衛九門外晝夜巡邏を命せらる……八一九
六月四日古高俊太郎京都四條に於て捕縛せらる……八一九
六月五日京都守護職松平容保市中に潜伏せる長藩士及ひ諸浪士捜索の令を發す……八二一
六月五日本藩政府は長崎留守居匂坂平右衛門に命じ豫め長崎奉行に就きて異艦襲來に關する幕府の對策等を探
　らしむ……八二一
六月五日長兵五百播州室津に至る……八二三
六月五日水戸激徒等下總結城に至り藩の重臣に面して攘夷の應援を强請す……八二三
六月五日夜會桑諸藩士及ひ新選組の者京都三條の旅館池田屋其他を襲ひ宮部鼎藏松田重助吉田稔麿等肥後及ひ
　長州の志士數名を斃す……八二四
六月六日傳奏雜掌は書を各藩留守居に致して御所九門守衛の警戒を嚴にせしむ……八二四
六月七日長人長門大津郡黄波戸浦に於て米國船を砲擊す……八二五
六月八日幕府は防長脱徒の追捕を命す……八二五
六月八日本藩森井惣四郎は横濱鎖港の事に關し惣裁閑老の間に意見の衝突を生したる事情を報す……八二六
六月九日英國軍艦二隻横濱に入り尋で兵八百を上陸せしむ此頃歐州各國に於ける我鎖港談判の情報佛國より到
　る……八二九
六月十日幕府は長州滯在の諸浪士解放せられ走て野州の激徒に合せんとするの風聞あるを以て諸關門の警備を

嚴にせしむ……八五〇
六月十日幕府は野州大平山屯集の激徒鎭壓追捕の令を發す……八五〇
六月十一日所司代松平定敬は古高俊太郎の口供に驚き其同志者追捕の令を發す……八五一
六月十二日幕府は京師の警衛を嚴にすへき旨を達す……八五二
六月十二日水戸藩鈴木安之進等閣老太田道醇資治の邸に至り面議して其處措の非違ふるを質さんとす……八五四
六月十四日幕府の火藥庫に侵入して火藥を盜む者あり……八五五
六月十四日幕府閣老等其意見衝突の京都に誤解せられんことを慮り會藩留守居井深宅一木作安右衛門をして其主松平容保に通じ辯明の周旋を依頼せしめんとす……八五五
六月十五日將軍家茂米澤藩主上杉齊憲に增兵を命す……八五六
六月十六日幕府山陵修補に關する心得方を傳達す……八五七
六月十六日幕府は大政委任從前の通りたるへしとの勅諚ありし旨を列藩に達す……八五八
六月十六日鳥取藩主松平慶德幕府に上書して異船長州に來らは直に兵を出して之を援くへく幕府も亦隣接の諸藩に應援の命を下されんことを請願す……八五八
六月十六日一橋家用人平岡圓四郎殺害せらる……八五九
六月十七日森井惣四郎は鎭港に關する幕府の內情幕吏の任免等を探り報す……八六一
六月十七日長藩襲に屢々三條實美等並に藩主父子の寃を朝廷に訴へて其入京を允されんことを歎願せしも顧みられさるを憤り兵威を以て其希望を貫徹せんと欲し是日進發の兵を悉く防州上關に會し軍監令を傳へ敢て背くことなからしむ我脫藩士宮部春藏加屋四郎高木元右衛門入江八千兵衛小坂小次郎西島龜太郎酒井庄之助等亦之に加はる……八六一
六月十七日長崎駐在米國領事は去ル八日長州また碇泊の米艦を砲擊せし旨を長崎奉行に報告す……八六四
六月十八日一橋慶喜書を長岡護美に贈り幕吏の因循水戸の內訌等を報じ自己の意見の行はれさるのみならず却て嚴譴を蒙らんとするの狀況を通告す……八六八
六月十八日閣老酒井忠績板倉勝靜等職を免せらる……八六九
六月十八日幕府有司に命し野州邊屯集の浪士追討の應援として旗下の兵を發せしむ……八七一
六月十八日幕府は古高俊太郎同志追捕の令を發したることを布告し且つ更に嚴重の警戒を加へて餘黨の潛居を搜索せしむ……八七二
六月十八日本藩帝都守衛陣屋地として城州葛野郡壬生村中堂寺村畑地一万三千六百餘坪を引渡さる……八七三
六月十八日英船二艘横濱を發して西海に赴く……八七五
六月廿日幕府閣僚の間に意見の衝突あり三奉行大小監察將に職を辭せんとす……八七六
六月廿一日幕議調訂の爲め長岡護美の出京を望む者あり……八七六
六月廿一日在府本藩牛島五一郎書を在國弟山田五二郎武甫に與へ横濱鎭港の事に關し幕府閣僚の間に意見の衝突を生せる由を報す……八七七
六月廿一日本日以後長兵順次大坂に着し羣て伏見に向ふ……八七九
六月廿二日松平直克政事總裁職を免せらる……八八〇
六月廿二日森井惣四郎は毛利慶親の水戸浪士横濱を襲擊せんとするを聞き豫め之に備へんことを因備兩藩主に慫慂したること及ひ浪士も亦援助を兩藩に求むる所ありしことを探り報す……八八〇
六月廿三日幕府は長兵の推して入京せんとするの處あるを以て加賀彥根小田原會津の四藩に警戒を命す……八八一
六月廿三日長兵五百牧方に泊すとの報あり……八八二

六月廿三日英艦長藩士井上聞多伊藤俊輔を乘せて豐後姫島に到り翌日井上等防州富海に上陸し尋て山口に入る……八八三
六月廿四日奥州白川藩主阿部正外老中に任せらる……八八八
六月廿四日閣老稲葉正邦は長人多く上坂し東下せんとすとの聞えあるを以て豫め不慮に備ふべき旨を我藩に達す……八八九
六月廿四日長藩老臣福原越後の率ゐる長兵の一隊伏見に着す……八九一
六月廿四日眞木和泉久坂義助諸隊を率ゐて淀川を遡り山崎に上りて書を關門に致す……九〇一
六月廿五日所司代松平定敬令を諸藩に傳へて伏見到着の長人に備ふる所あらしむ……九〇一
六月廿五日御所附近の警衛を嚴にすべき旨を達せらる……九〇二
六月廿五日幕府本藩の寺町門警衛及ひ長藩邸鎭靜心得を解き更に伏見邊警衛を命す在京の我有司等議して之を辭するに決す……九〇三
六月廿五日常野屯集の浪士に關する消息を傳ふる者あり……九〇五
六月廿六日本藩伏見邊警衛の幕命を辭す……九〇六
六月廿六日長州軍監各隊に陣中心得を達す……九〇八
六月廿六日因州藩京都留守居は長人入江九一等が其主毛利慶親父子及ひ三條實美等の寃を訴る所の陳情書を受けて之を我藩外六藩に廻達す……九〇八
六月廿七日伏見滯在の長兵山崎嵯峨等に移動す……九一四
六月廿七日幕府松山藩に命じ天龍寺附近を警戒せしむ……九一六
六月廿七日長藩兒島百之助河島小太郎の名を以て依頼書に哀願書を添へ勸修寺家に提出す……九一六
六月廿七日今夜流言あり京都騷擾す守護職松平容保武裝の藩兵を率ゐて參內し命じて九門を閉鎖し嚴に出入を

譏察せしむ時に應援出兵に關し我藩在京有司の間に葛藤を生す……九一八
六月廿八日幕府は松平直克退職につき水戸慶篤專ら横濱鎭港の事に與るべき旨を達す……九一〇
六月廿八日本藩森井惣四郎は横濱鎭港に關し幕府當局の間に意見の衝突を來し遂に政事總裁閣老等の異動を生したる事情を報告す……九一二
六月廿八日會藩鈴木多門尹宮家に於て我藩草野平藏に會し長人不穩の擧動につき我藩の出兵に關する意見を質す……九一五
六月廿八日長藩老臣福原越後嵯峨天龍寺に據れる長人の鎭撫として兵を送りし旨を傳奏に申告し同藩留守居乃美織江亦藩中人士の心事を告けて內願する所あり……九一六
六月廿八日諸藩の京都留守居因州邸に會して長人請願の件につき議する所あり……九一八
六月廿九日信州高島藩主諏訪忠誠老中格となる……九一九
六月廿九日本藩探索生は久留米桑名兩藩士の我藩斡旋に倚賴し來りしを以て其要望の點を提出して上司の指揮を仰く……九一九
六月某日外國軍艦襲來の風聞あるを以て本藩豫め之に處する方略を內定すべきの議あり……九二一
六月某日長藩島田喜四郎福原越後に代り鷹司關白邸に上書して鎖國攘夷の決行を歎願す……九二一
七月朔日將軍家茂田安邸より西丸に移る……九二二
七月朔日藩主慶順親しく長岡護久同護美在京中公武周旋の功勞を賞す……九二三
七月朔日長藩主毛利慶親使を筑前因幡備前安藝津和野濱田對州等の諸藩に遣し急速上京の事を通議す……九二四
七月二日幕府は長兵出府の風聞あるを以て沿道各藩に命じ警戒を加へしむ……九二五
七月二日本藩伏見邊の警衛を解かる……九二六

七月三日傳奏野宮定功飛鳥井雅典は長兵嵯峨天龍寺に屯し危機漸く迫り事變測り難きを以て長岡護美に勅諚の旨を傳へて其上京盡力を促す……九二七
七月三日本藩は異船襲來の風聞あるを以て長州の處分決せさる間は異船の下關通過を禁せられんことを幕府に建白す……九四〇
七月三日在京本藩士藤本彌三郎可兒清藏等先月廿三日以後京師騷擾の狀況を藩地に報告す……九四一
七月三日福原越後は山崎天龍寺屯集の長人に鎭撫を加へんと欲すと雖も不得止の至情に出るを以て宜しく入京を許して其願意を聽取せられんことを朝廷に上願す……九四五
七月三日膳所藩の兵太秦に陣して天龍寺の長兵に備ふ……九四六
七月三日長藩井上聞多伊藤俊輔を姫島に遣し三ヶ月の侵擊延期を請はしむ英艦聽かすして東に去る……九四六
七月四日在京本藩大監察藪圖書は先月下旬京師騷擾の狀況及ひ諸藩兵入京の模樣を藩政府に報し且兵員の增遣を請ふ……九四九
七月四日幕府監察永井主水正戸川鉾三郎等伏見奉行所に福原越後を召喚し天龍寺の兵を伏見に撤去せしむへきの勅諚を傳へ入京の不法を詰る……九五一
七月四日小倉藩の使者熊本に來り舊恩を謝し且つ臨機救援を求む……九五四
七月五日丹後宮津藩の兵千餘人京都より橋本に入り長兵に備ふ……九五五
七月六日所司代松平定敬令を傳へて諸侯の警衛人員及ひ相印を屆け出てしむ……九五五
七月六日大和郡山藩の兵山崎を守る者皆向日町に還る……九五六
七月七日朝廷我藩に長人の歸藩說得に盡力すべき旨を命せらる翌日之を辭す……九五六
七月七日我藩警衛人員及ひ相印等を仙臺藩に通報す……九九五
七月七日長藩老臣益田右衛門介兵を率ひ三田尻を發して上京す……九六〇
七月八日朝廷在京各藩士の總員數を調査申告すへきを命せらる……九六〇
七月八日長藩老臣國司信濃大坂に着し兒玉小民部山崎に至る……九六二
七月八日長人淀藩によりて陳情書を上る……九六二
七月九日我藩吏吉田伊兵衛は先月下旬より本月上旬に亘る京都附近に於ける長人の動靜を上司に報告す……九六三
七月九日國司信濃の一隊山崎に到る尋で長兵陸續として東上す……九六六
七月九日長藩京都留守居乃美織江は諭示の旨により先つ粟生光明寺出張の兵を散し次て天龍寺駐屯の兵を移して漸次撤退の運ひに至らしむる樣盡力すべき由を幕府に申告す……九六九
七月十日本藩在京士人の總員數を更に所司代に申報す……九七〇
七月十日因州藩老臣は鳳輦を彥根城に遷さんとするの流言あるを憂慮し上疏して其不可を論す……九七〇
七月十一日幕府は國事上の建白手續を達す……九七一
七月十一日幕府は各藩の在府人員を調査申告すへき旨を達す……九七二
七月十一日因州藩京都留守居は長人朝廷に上る所の陳情書並に閣老に提出せる請願書及び薩摩其他十四藩に對する依頼の書翰を受けて之を我藩外三藩に廻達す……九七三
七月十一日長薩の大軍十三日を以て進發すべきの報山崎の陣營に到る……九七七
七月十一日松代藩士佐久間修理京都三條木屋町に於て刺客に殺さる……九八一
七月十一日長藩老臣國司信濃天龍寺に至り屯集諸士を諭し其一部を山崎に移らしむ……九八五
七月十二日井上正直老中を免せらる……九八六
七月十二日大炊御門家信等長州處分に關する建白書を二條關白及ひ議奏日野資宗に提出す……九八六

七月十三日幕府は浪士取締の爲め新に關門を武州岩淵澁谷道玄坂に設くべき旨を達す……九八七
七月十三日在坂本藩士桑坂熊四郎等は志州鳥羽に於て幕船天神丸襲撃のこと、攝州妙見山に於て浪士屯集のこと、薩讃兩州の大兵着坂のこと及ひ水野鳥居兩氏の居城陷落のこと等を報告す……九八八
七月十四日長藩老臣益田右衛門介兵六百を率ゐ攝州男山に至り陣す……九八九
七月十五日中川宮薩藩小松帶刀に諭し土、肥、會、桑、久留米の五藩と共に長派の公卿五十餘人に說得すべしとの內意を傳へらる……九九〇
七月十五日本藩政府は京都不穩の報に接し備頭溝口藏人に兵を率て上京を命す……九九〇

改訂 肥後藩國事史料　卷四目次終

改訂 肥後藩國事史料　卷四

文久三年癸亥七月十三日本藩老臣長岡監物小笠原備前相會して國是を議す

〔小笠原備前日錄〕

七月十三日

會米家、議國是、筑前已因迫切時躰、決出京諫諍之議、本藩國議、已在於此、早可決心、云々

七月十三日本藩政府は江戸藩邸事務省略の訓令を發す

文久三年四月ヨリ元治元年四月マデ

〔御記錄〕

御用番被相渡候書付寫

覺

江戸表昨年來非常之御改革ニ而御方々樣茂御下向被爲在候付而者　御廟之外者御警衛之御人數茂詰込ニ及不申諸家樣方ハ御屋敷番計り程之向茂不少候由此方樣茂右ニ準格別之御省略被仰付候間左之通

一江戸詰間遠ニ相成候付而者御役々年を逐功熟之族相減候譯ニ付御參勤之節々武門之御瑕瑾ニもへ不相成樣心懸候へ者其餘御不都合等不案內ニ而カニ不及儀者不被遊御構筈候

付紙

本文之通ニ付御使者等被進候場ニ奉書仕出之類茂可有之右樣之御取扱振且諸方御斷等之儀於御書方取ゟらゐ候樣可被達候

文久三年

一向後共御留守中者表御玄關締切り御縁家樣共外御出入之御方々御入來者勿論御使者勤等之儀茂一切御斷ニ相成出火之節御見舞御人數御使者等茂被進間敷候間御向方ゟ茂夫ニ被應候樣被仰入管候

但無據儀有之御使者參候節者御留守居方又者御留守居御小屋ニ而取次是ゟ同樣被差越候節茂事柄之輕重ニ因御留守居御城使之内ニ被仰付管候

一右之通ニ付御役ニ因都而詰方被指止又者過半減少被仰付候向茂可有之迚茂　公邊之御趣意を被奉候事ニ付自然之節御人數無之候とも御恥辱ニ相成候筋者有之候間是迄之情態ニ不泥非常之御省略相立候樣御役々一致ニ差入可申談旨被仰出候條各見込之趣早々取まらへ可被相達候以上

七月十三日

七月十四日姉小路兇變取調掛我藩宮部鼎藏轟木武兵衛は水戸藩梶清次右衛門等と連書して薩藩士琴酌内往來の禁を解かれたることにつき意見書を提出す

〔投筆餘編〕

今般輕賤不肖之者共姉小路殿御一條御吟味懸り被仰付候儀難有仕合ニ奉存候然處至愚蒙昧之者共非常之御時勢とハ乍申彈臺小吏之勤向假ニも被仰付候儀感激之至何分ニも微忠を盡し涯分之御奉公申上度覺悟ニ罷在申候得共固より短才無智別而治獄之典故ニ於而ハ不案内之事柄ニ付若不調法之儀御座候而ハ微臣等之罪過ハ決而相厭不申候得共自然彈臺之過失ニ相成候樣之儀有之候而ハ重疊奉恐入候ニ付日夜苦心仕候のミならす大戒懼仕居候事ニ御座候然ニ右御吟味之儀薩州田中雄平仁禮源之允共御不審之筋ニ付被召込於同國之者ハ右御吟味相濟候迄一切九門内往來御停止被仰付置候處近日右御停止被遊御差免候儀定而於　朝廷深思召之筋被爲在候御事とハ奉存候得共右御吟味之一條之儀ニ於而ハ重大之御事柄ニ付薩州之者共末々ニ至迄嚴重御處置相成候末いまた御吟味之落着も無之内右樣御宥恕之　御沙汰被爲在候而ハ乍恐御政事之筋始末貫通不仕御失體之御姿ニ相成候譯ニハ有御座間敷哉と奉存候且又薩州之者ニ於而ハ不依貴賤朝命を奉畏屹度謹慎第一ニ相心得彼是動搖不仕罷在候ハ當然之臣節定而恐縮仕居候ものと相見申候然るニ此節右條理不分明之御處置ニ相成候而ハ却而驚愕も可仕歟申上候迄も無之候得共至當公平之御政體ニ無御座候而ハ萬民疑懼之念を生し可申御時節柄別而奉恐入候扨又近日承候得ハ島津三郎被召登候由於此儀別而如何之御次第ニ可有御座哉と奉存候薩藩之御處置且同國心得ニ於而ハ前文申上候通ニも可有御座候得ハ何卒右御吟味相濟一點之御疑念も不被爲在候樣ニ相成共上ニ而登京仕田中雄平共不埒之罪御詑申上一際丹誠盡力仕候樣被仰付度伏而奉願上候左樣無御座候而ハ朝政之條理御貫徹ニ差響き候末差寄微臣等ニ被仰付候御吟味之一條如何相心得勤上可申歟實以恐懼之至奉存候右ハ事々敷彼是申立候儀僭踰之罪無所逃奉存候得共差當り被仰付候御用之儀ニ相係り候ニ付不得止此段奉窺候以上

水戸中納言家來　梶清次右衛門
細川越中守家來　宮部鼎藏
轟木武兵衛
松平相模守家來　中野治平
佐善修藏
松平阿波守家來　大津伊之助
柏木半平

七月十四日

七月十五日幕府長藩に小倉侵入の兵を撤退すへきを命す

〔尊攘錄皇武令〕

文久三　七月

九月十四日着　寫　亥七月十五日和泉守殿樋口喜左衛門を以下ケ

酒井雅樂頭家來　河合惣兵衛　伊舟木源三郎

共方家來共小倉領に多人數立入不法之及所業候由相聞以之外之義ニ被思召候早々取鎭爲引拂可申候事

松平大膳大夫に　松平大膳大夫

七月

小笠原大膳大夫に　小笠原大膳大夫

松平大膳大夫家來共其方領内に立入不法之及所業候由以之外之儀ニ被思召候依之右家來共早々爲引拂候樣松平大膳大夫に相達候間其段相心得自然於不引拂ハ早々追退ケ可申候尤松平美濃守松平安藝守奥平大膳大夫に應援之儀申達候間諸事申談候樣可被致候事

七月

松平美濃守に　松平美濃守

松平大膳大夫家來共小倉領内に立入不法之及所業候由以之外之儀ニ被思召候依之別紙之通小笠原大膳大夫に相達候間此上二家之動靜ニ寄候而者隣國之儀ゟ付諸事小笠原家申合應援可致候尤松平安藝守奥平大膳大夫に茂此段相達候間夫々打合可被取計候事

七月

松平大膳大夫に　松平大膳大夫

一松平安藝守奥平大膳大夫にも同文章一通宛

共方國許ニおゐて外國船炮擊およひ候得共攘夷之儀之不容易事ニ付御全國之人心一定不致候内妄動いたし候而之御國辱ニ茂可相成筋ニ付先達而内達之旨も有之候處最早兵端相開候上者穩便之取計難致旨申立候共節相達置候趣も有之候得共猶今度京師へ被仰立候御旨も有之一躰拒絶之儀ハ勅命ニ候得共策略之素ゟ御委任相成候事故此上應接之模樣ニ寄彌打拂可申段を改而可相達ニ付航海之異船へ猥ニ炮發等不致樣家來末々に嚴重可被申付候事

七月十五日長州下關砲臺守備の壯士等攘夷監察使正親町公董につきて小倉征伐の請願書を上る

〔青木彦兵衛引取書〕

正親町三條樣爲監軍使西國エ御下向ニ相成(中略)同(七月)十五日下關之樣ニ御越ニ而海岸御巡覽ニ相成候處同所臺場附之面々ヨリ願出候者先頃異船取合之節長州ヨリ五度迄異船エ致炮發戰爭仕候得共向地小倉ヨリハ一切應援不仕此以後異船ゟ戰爭炮發仕候節モ小倉ヨリハ應援仕申間敷左候者異船者向地ニ寄致往來又者致碇泊候而モ此方ヨリ炮丸達候所柄ニモ無之候間早々小倉ヲ征伐被仰付外義勇之諸侯ヲ被封應援有之候樣有御座度段正親町樣御下向ヲ幸ニ激烈之面々ヨリ頻ニ願出候間正親町樣エハ甚以御困窮ニ相成左候者一應小倉エ御使者ヲ被差向存念御糺之上ニ而如何樣共御決議ニ

相成可申ゝ之旨ニ而水戸藩松本忠太姫路藩萩原虎六御國ヨリ川上彦齋三人御使者被仰付小倉エ罷越様子承合候處右炮發等致不申次第者重疊奉恐入以後者必ズ發炮應援可仕段申出候由ニ而罷歸其趣申上候處臺場之面々是迄之臆慣ニ堪兼以後發炮之處何分見込無之且者以後諸國之見蔑ニモ相成候間强而征伐被仰付候様申出候間正親町様ヨリ御隨從之面々エ御相談ニ相成候處既往者不尤ゝ申事御座候得者此以後應援可仕段申出候得者夫ヲ征伐被仰付候而者相濟申間敷段口ヲ揃エ申出候得共臺場之面々聞入不申候間左候者朝廷エ御伺取ニ相成可申ゝ右小倉エ被差越候面々ヲ京都ニ被差遣候筈之處夫迄ニ而者長州之疑モ可有之ゝ臺場之者兩三人被差添候却說長州ヨリ小倉之五罪ヲ數エ征伐願書正親町様エ差出候書面左之通

多恐モ　叡慮既ニ攘夷ニ被爲決於長門下關者數度及戰爭候處小倉者咽喉緊要之地ニ乍居未曾一門之炮モ不搆一介之兵モ不出常ニ是ヲ傍觀スルハ武備不足乎夷狄エ內通乎罪一也癸丑以來十餘年之間賊ヲ眼前ニ乍見不育人材不繕武器尸位不覺之罪二也六月五日佛夷田浦エ上陸セシニ是ニ不擊向而已ナラズ剩エ彼カ書狀貳通ヲ受取候事夷狄ニ狃御國辱ヲ不辨罪三也薩ニ長州ヨリ每度使者ヲ以　叡慮之所鬱爲怒之夷狄速ニ不可有不攘之趣意懇切ニ申諭セシカ共幕府普代ゝイフヲ以テ更ニ不相應遂ニ長州ヨリ炮臺場所推借セラルヽニ到ル是全ク義理ニ暗ク隣國之禮ヲ失スル之所致罪四也幕府奸猾之所爲遂　勅之振舞ヲ乍知一言共不正ヲ不糺者普代之責ヲ不盡國家之大變ヲ不憂シテ因循姑息ニ安ズ罪五也右之五罪者皇天之所照鑑決而不可免之逆賊也假令　神勅之威嚴ニ因リ一旦陽從仕候共固リ其君昏愚ニシテ其臣隋弱忽夷狄之有ゝ成時者　皇國之御一大事ゝ奉存候伏願クハ其君臣ヲ貶逐シ忠肝義烈必死之士近邊ニ不乏候間一先ッ是ヲ以テ此地ヲ守ラセ長州ト相應援仕候時者賊艦幾千萬襲來候共決而內海エ者闖賊本ノマヽ入爲致間敷奉存候左候而佐賀之關島戸之口屹度其任ヲ擇テ防禦被仰付候者中西國者平穩勿論之儀ゝ奉存候乍恐御明案被遊速ニ御英斷被爲在度不願徽賤奉申上候恐懼死罪

文久三年癸亥七月

長門國有志士謹白

右願書前段之面々エ被成御附御差登ニ相成右征伐願書　既ニ朝廷ヨリ御返事出候朝八月十八日之變動ニ而其儘右之面々モ罷歸正親町様エモ其後者京都之様ニ御登ニ相成候而モ奸徒之內ニ而被致方モ有之間敷ゝ之旨ニ而三田尻エ御滯留ニ相成七卿ゝ一所ニ御住居ニ而迎モ御歸京者不被爲叶御見込ニ付一旦者御供之面々御差返ニ相成候筈之處京都之御模様左程迄ニハ無之由御聞込ニ相成差候者初發九州御巡行之儀モ被仰付置候得共前段變動ニ而御打止ニ相成居候間再御巡行ニ相成候筈ニ而筑前黑崎迄御出ニ相成

七月十六日今夜朝議を開き島津久光召命のことを中止せらる

文久三癸亥年
〔尊攘錄探索書〕

（七月廿一日附國友半右衛門首藤敬助草野平藏報告書抄）

一去ル十六日夜公卿方御參內之處御下り曉ニ及候由右之島津三郎との被召登候　勅諚ニ付關白殿下三條公抔御奏聞ニ之薩州之儀未タ罪人御吟味も不相濟內御召登ニ相成候事如何敷有之候間被召止候様絶而御願御座候ニ付御免ニ之相成候得とも主上ニも餘程被遊御逆鱗被仰候ニ之是迄　勅諚追々差返候事有之是之以之外之事ニ而以來屹度左様之儀無之様可相心得若向後右様之事有之候ハヽ　朕も位を避可申其方共ニも辭職之覺悟可致と被仰候由（會津松坂三內齋話）

但三郎殿召之儀ハ長州抔尤不平之由ニ而種々周旋いたし作州津山藩鞍掛虎次郎へ相談いたし御差止ニ相成候様建白致せ候由

七月十六日幕府使番牧野左近村上求馬中根市之丞に九州派遣を命す

文久三年
〔探索書〕

（日附は尊攘錄對州エ魯夷亂妨薩長夷艦砲戰附生愛伏水一件所藏包坂平右衛門より道家角左衛門宛書面に據る）

付紙　小笠原大繕大夫家來に　　牧野左近
御使番牧野左近村上求馬朝陽丸御船に乗組九州邊に被差遣候間其方共茂同船にて罷越候樣可仕候事　　村上求馬
七月　　御目附助之由　　中根市之丞

七月十八日我藩は九州各藩連衡して力を公武合躰に盡さんとの議を決す

〔自筆狀控〕（文久三年元治元年）

以別紙申達候方今天下之勢益危急ニ差臨候付而之此方樣兼而之御覺悟筋彌以實地之御運不被爲在候而之難相濟御場合ニ付猶精々評議を凝シ席中一同召出奉願尊慮之趣奉伺候處別紙書取之通被遊御心決誠以難有奉感佩候然上之地旗共右之御旨趣を奉シ周旋不仕而難叶儀と相考申候間別帋至密ニ御手元迄爲御心得差進申候尤右大要之御趣意之一統も敬承仕居不申而ハ難相成差寄今度出京被仰付置候御備手之面々覺悟筋ニも係り候儀ニ付先坂崎忠左衛門相示候書付寫壹通是又差遣申候御地詰之儀之　天子之御膝元ニ伺候いたし萬一心得違之儀等有之候而ハ難相濟事ニ付夫々御示可被置と存候殊ニ選士之面々ハ兼而諸公卿方へも親炙いたし候事候へハ猶更此節之御主意を奉し專ら其筋ニ勉力いたし候ハヽ無此上大功業とも可申是等之趣御含得斗被及御示諭度若違背之向有之候ハヽ追而御處置之筋も可有之候得共此儀之御地之事情次第御見込之程も可有之何樣如此御國議一定之上御家中上下一致ニ盡力可仕筋合ニ付彼是御取分之氣味有之候而ハ却而御運ニも差障可申と右之通得御意候事ニ御座候以上

七月廿六日　　惣連名

沼田勘解由殿

七月十八日

奉伺相決候書附

天朝幕府之御沙汰表裏ニ出御政道二筋ニ相成候付而之列藩之人心疑惑紛亂仕外夷拒絶之儀未申渡無之內長州と朝廷之御趣意を奉候由ニ而外夷攘斥いたし其末小倉方應援無之を慣り不法之仕形ニ及小倉と幕府之御指圖を守一切不相應双方之御覺悟違却いたし殆戰爭を引起候樣之勢ニ成行居長州ニ御下リニ相成居候正親町三條樣九州にも御下リ應援之儀御督責之御模樣ニ相聞又征夷將軍ニ可被爲立哉之風評も仕且薩州ニ而も兵端相開愈以人心紛亂ニ至申候ケ樣之事躰ニ成行候而と外夷ハ押置　皇國中之爭亂無覺束切迫之世上ニ罷成既ニ薩州にハ御使者長谷川仁右衛門に　公武眞之御一和ニ而天下之御政道御一致ニ歸候樣被遊御盡力旨兼而御覺悟之次第御含被差越長州小倉筑前方之御使者にも右御覺悟筋と御返答ニ相成肥筑久留米ハ疾ニ　公武御合躰之儀を御建白之被仰談も相整居候由御使者方も申出御家中之面々ハ此砌如何樣之御覺悟ニ可被爲在哉と一統も不案意ニ奉存候間此節上京被仰付候面々方ハ稜々伺出も有之最早此儘被爲居候而ハ御外聞御實義不被爲濟御拔差不成御場合ニ相成申候依之一刻も兼而之御覺悟を實地ニ御運出被爲在度尤將軍家を初一橋公春嶽公方種々被仰上候末ニ而此方樣御一封之御諫言迄ニ而御採用ニ可相成樣も無之候間右之趣を以薩州肥筑久留米柳川抔被仰談御建言被差上候樣之御都合引續御上京之御比合等茂大概御一同程ニ被爲在九州擧而皇國之たゑ何處々々迄も御周旋と申ニ相成候ハヽ其響ニ而心得違之族半ハ畏縮仕候而已ふらす列藩　朝命を奉厭候折柄山陰山陽東北國之諸大名も此筋ニ御落合候と必然ニ而究而御成功可被爲在左候ハヽ先ツ以御使者御建白被仰上從是注進次第直樣御出京と御土臺を被遊御居へ御隣國之御方々御同意之段相分り候上と御供をも被仰付置度奉存候此御趣意御家中何とも奉窺候ハヽ末々迄も憤起いたし物議も自然と相止可申候事

但三條樣と御問柄ニ而專浮浪有志之言を御主張被成候由ニ付御懇切之御督責被爲在度其儀ハ追而取調べ可奉伺候事

〔仝　書〕

御備頭等ニ相渡管之書付寫

天朝幕府ニ御忠節を被盡天下之事至當ニ歸候樣被遊御取扱度儀從來之御本意ニ而既ニ御滯京中公武眞之御一和眞之御委任ニ至不申候而之萬般之混雜此筋より釀成候間右御基本被爲立度御双方ニ被仰立候得共今以凡之御政道先ハ二筋ニ相成各國之人心日を逐紛亂いたし益切迫之事體ニ及候而之愈以右之御主意實地ニ不被爲在御周旋候而之難相成依之天朝ニ而も幕府ニ而も不可然御處置筋ハ無御遠慮被遊御諫諍候儀勿論ニ而時宜次第御登京御出府も被爲在　皇國之たゑ御丹誠を可被抽と被遊御決心候付其趣を以先御隣國諸侯方ニ被仰合御同心ニ候ハヽ共々御力を被爲盡御覺悟ニ候事

七月十八日杵築藩使者を熊本に遣し海岸防備及ひ長倉交渉の事に關して意見を徵し且つ臨時助力を乞はんと欲するの意を陳ぶ

〔文久三年八月以來一橋初來使一件〕

口上手扣（十七日使者來着十八日本書提出）

秋暑御座候處彌御堅達被成御座珍重御儀奉存候此度内使者差出候間萬端宜御差圖可被成下候從來御懇切被成下厚忝奉存候扨弊邑海岸手廣ニ付當節柄手當向甚不安心之儀ニ御座候萬一非常之節者萬端無御腹臓御心添被成下候樣仕度奉賴候尙委細使者ニ申含置候間宜御承知可被成下候右以使者申上候付麁末之兩種進覽之仕候（本文答書は七月晦日交付したり）

松平但馬守使者

亀井勘介

別段

此度於長州表異船打拂之儀ニ付小笠原大膳太夫殿より以使者被申越不容易事柄深心痛仕候就而は其御許樣御問柄之儀ニ茂被成御座候間此邊之情實追々御承知之儀と奉存候何卒厚御勘考被成下御取扱被成下度奉願候又中務大輔儀は江府ニ罷在切迫之時合ニ御座候付此段私より相願候儀ニ御座候委細之儀は使者口上を以可申上候

松平但馬守使者

亀井勘介

進上

砂糖漬梅　一壺　　串鼠　一箱

以上

御家老中ニ之來札

一筆致啓上候殘暑强御座候處各樣彌御堅達可被成御勤仕珍重之御儀奉存候然者此度越中守樣ニ但馬守より以使者申上候通自然異船渡來之節當領分海岸手廣之儀防禦手當者仕候得共甚以手薄中務大輔儀は在府人數少旁以但馬守心配被仕候萬一非常之節者無御腹臓被爲添御心力被下候樣被相願度且又此度於長州表異船打拂之儀ニ付小倉樣より御使者を以被仰越不容易御事柄但馬守深心痛被仕候此邊之情實は追々御承知之御儀と奉存候然者其御許樣より小倉樣ニは御問柄之御儀茂被成御座候付何卒厚御勘考を以如何樣と歟御取扱被成下度御手數之段は何共被奉恐入候得共御取成を以御和談御取扱之程各樣迄私共より茂申上候樣但馬守被申付候前條之通中務大輔儀在府中ニ者有之何分切迫之御時合只々心痛而已被罷在候此段厚御賢察被成下候樣奉願候委細之儀は使者口上中含置候間御承知可被成下候右之段可得貴意如斯御座候恐惶謹言

七月十二日

平井太兵衛

加藤助左衛門

長岡帶刀様
有吉監物様
小笠原備前様
松野亘様

七月十九日朝廷再ひ御用の外薩人の禁門通行を禁せらる

〔文久三癸亥年尊攘錄探索書〕

（七月廿一日附國友半右衛門首藤敬助草野平藏報告書）

一先日薩州人九口御門内通行不苦且三郎御召之事尚又御詮議違ニ相成三郎上京見合せ候様被仰出九門内通行之儀も御用之外一切不被爲叶段一昨十九日御達之事

七月十九日本藩庄村助右衛門增田八十六に砲器火藥研究の爲め長崎出張を命ず

〔文久三年機密間日記〕

覺

御刑法方
御奉行ニ

一郎助嫡子
庄村助右衛門

右者就御用長崎表ニ被差越候條此段可被達候以上

七月十九日

七月廿五日方出京仕筈之段屆有之候事

御内意之覺

右之近年歐羅巴諸州ニ而新發明之手元込大炮今般長崎表ニ舶來之器有之右之於西洋諸國是迄之發明中ニ無之利器ニ有之且地金調合等新ニ相開候良法有之候段彼表知音之方方申越候付而之增田八十六儀彼地ニ被差越被下度段御内意奉願候通ニ御座候然處八十六儀之彼地不案内之事ニ付萬端都合宜ゟる間敷依之助右衛門儀八十六一同被差越候ハヽ其筋知音之媒介も有之御用辨可宜見込ニ御座候加之前條炮器火藥之分量其外取扱等之傳書秘蘊之向も有之由ニ御座候間夫等探索之筋を茂申談置候儀ニ御座候間旁助右衛門儀此節長崎表ニ被差越被下候様奉願候此段宜敷被成御參談可被下候已上

七月

庄村助右衛門
池部啓太

七月廿日我藩兵を增遣して三條家を警固するに決す

〔文久三年京都諸扣〕

三條様ニ被差出置候大筒手心得方等之儀付而一昨日御内意之趣沼田勘解由方ニ相達候處被存寄無之候間大筒手ニ者夫々申含置候條左様御心得候様存候以上

七月廿日

小坂大八殿
廣吉半之允殿
瀨川一郎助様

鎌田軍之助
鎌田軍之助

及御面談儀有之候間只今之内御役所ニ可有御出候以上

同日

右出方之上委細御口達之事

本文御含ニ相成候土臺ハ薩州九門出入御差留ニ相成居候處近日御免ニ相成島津三郎殿　御所ゟ被爲召管之處九門御免間もふく召付候儀列藩親兵之内より議論有之候由ニ而右召之事ハ御沙汰止ニ相成右一件三條様專ラ御取計之由ニ付薩藩よりゝらみ候との趣ニ而列藩ハ人數増差出候由ゝ付此方様御固メ御人數も其心得ニ罷在候様左候ハヽ御親兵よりも三四人ハ右御人數ニ加り罷出候筈之由廣吉より内意ニよつて本行之通候事

七月廿二日我藩外七藩建春門内の警衛を命せらる

〔京都諸扣〕文久三年

七月廿二日

三條様ニ被差出候大筒手心得方等之儀付而者一昨廿日得御内意候通ニ候處選士之内ゟ晝夜二十人充東建春御門内御警衛被仰付候付三條様ニ者罷出候儀雖相成段小坂大八列ゟ内意相達候間左様御心得大筒手ニゝ夫々可有御通達候以上

七月廿二日　　鎌田軍之助

瀬川一郎助殿

〔御内勅等書拔〕

東建春御門内

壹番　晝　肥後貳十人
貳番　晝　松代桑名十人
參番　晝　津二十人

夜　宇和島姫路十人
夜　肥後二十人
夜　津山忍十人

一辰刻より申刻晝夜交代之事
一當分衣躰羽織袴之事
一鑓隨從之事
　但休所ニ差置之事
一貳十人之内三分一ツ不寐之番可相勤之事
一毎夜三度ツヽ見廻り之事
　持場之儀ゝ追而御達之事
一交代之節於御門番所ニ御守衛何藩何拾人と申答通行之事
一交代之節十人ニ從僕三人ツヽ番所ニ殘置之事其餘供歸り之事
一辨當夜具之類於其藩世話可有之事
一辨當夜具抔持運之節ゝ持夫ニ鑑札御渡しニ相成候間於御門番所ニ可被改候事
　但し十万石ニ付三枚も御渡し之事
一非常出火之節　承明門兩脇ニ御書付之通り東西ニ分無遲滯參集之事

〔投筆餘編〕

東建春御門内

一番書肥後二十人　（以下三番迄御内勅等書拔と同文）

已上　七月

右者東建春御門内迄也外三方之御門内も今七月廿三日より一同御守衛掛之御方々三條殿櫛本殿滋野井殿より各藩隊長御呼出ニ而右御書付を以被仰渡如　御制度相勤候事

但し出張之節直ニ建春門より參集致し御指揮可相待之事
一東賀茂川　西堀川　南二條　北鞍馬口　右之外出張ニ不及之事
　但し雖爲遠火火勢ニ寄出張可有之事
一非常之節一統火事裝束之事
一非常之節ゝ隊長九門内馬上被免候事
　但し建春門外北之方築地際ニ高張乘馬扣居鑓持壹人ツヽ隨從之事隊長之從僕鑓持共ニ御門内兩人隨從之事
　右書付小坂大八ゟ相達候事

七月廿二日中川宮家用人伊丹藏人山田勘解由町奉行所に預けらる

〔文久三癸亥年 尊攘錄探索書〕

一亥七月廿二日着京師ゟ之來狀寫（抄出）

六月廿二日中川宮様御用人ニて青蓮院宮様御家來伊丹藏人山田勘解由同日　禁庭ゟ是迄之勤功ニ寄り六位ニ被仰付青蓮院宮様に御差戻ニ相成候處同夜水戸侍肥後侍來り兩人とも召連來り町奉行所に預候由右ハ　禁庭ゟ之御内沙汰御町奉行所ニ之　御所より之御預ケと相成申候

右兩人之中川宮様御心願ニ寄楠公之宮に御代參ニ翌朝より弓矢を納メニ立出之積之處右之次第御町奉行ニハ不怪御迷惑ニ而御調一切無之殊之外難澁之ものと申噂同日より中川宮様付御家來不殘御入替ニ相成候由不容易儀と申事ニ御座候

一先日姉小路様一件ニ而御召捕薩州之人壹人之東町御奉行所ゟ而切腹致し町御奉行所未御慮（ヵ）藝州様に一人上杉様へ一人御預之處上杉様ニ而之御取逃し藝州様之ゟりニ相成申候由

七月廿三日幕吏牧野左近村上求馬中根市之丞豐前田浦に至る尋て長人に拘留せらる

〔尊攘錄對エ魯夷亂妨薩長夷艦砲戰附生麥伏水一件〕

八月四日之日付ニ而匂坂平右衛門ゟ道家角左衛門へ書狀之内書拔

小澤理右衛門小倉長崎御留守也　内密話之趣

小笠原大膳太夫様ゟ御郡代河野四郎御勘定奉行大八木三郎左衛門六月十五日小倉表被差立公義ゟ御目附被差下長州之所業直と御見聞被下候様爲可奉願大坂表迄罷出候處最早將軍様御發駕ニ相成申候付直ニ江戸表へ罷出御老中様に申上候處七月七日御城に被召出一橋様始閣老方御目前ニ而長州之所業御聞屆ニ相成左迄之所業者有之間敷被思召上候由ニ而早速御使番御目附牧野左近様同斷中根市之丞様御使番村上求馬様被差下旨ニ而蒸氣船ニ而右小倉より之兩人御同船ニ而同月十六日江戸表御乘船同月廿三日小倉領田ノ浦近方邊崎と申所沖迄御乘付被成候處長州ゟ小倉領臺場押借いたし居候所ゟ貳放炮發有之壹發ハ御船之艫上を越壹發ハ之な之方ニ少々當り候付直ニ御船を御留被成ハツテイラをおろし兩三人御乘組せ右邊崎へ上り在役之者歟ニ様子御尋させ被成候處先日對州歟之御船通り候節ハ浦觸有之候付異儀ふく通候付其手數被成可然申候付其御手數ニ相成居候處其内長州より四五人も乘船いたし來如何之船ニ有之候哉子細承り候付公義御役人御乘船之段御申聞被成候内數艘ニ而取卷同廿四日召船を下ノ關ニ引付候由其内小倉ゟ御迎船等差出候へ共一切近ケ不申御目附様方御上陸を相拒ミ候付其子細を御聞屆可被成との儀ニ付中根様者直ニ萩之御城下に御越被成跡御兩人者廿七日ニ御着ニ相成候様子ニ御座候事

一右之御方々様江戸表御乘船ニ相成候節小倉御留守居助役樋尾林助右之御様子御國許に相達申たゝ七月十三日比御先立いたし同廿五日比小倉表に着いたし候處右之御方々様御上陸を相拒候様子承り直ニ長崎表へ早打ニ而罷越同廿八日御奉行様に右之段直ニ及言上候處御聞屆ニ相成最早いたし方無之此上者隣國筑前中津安藝申談取計候様及違儀候ハ、早々追退候様との御沙汰有之候處ニ猶又小倉ゟ早打到來右之御方々様無異儀廿七日ニ小倉へ御着ニ相成候段申來候ゝ付先ッ當座ハ無事ニ相濟候へ共未タ萩へ御越候中根様之御様子相分り不申且御召船ハ今以相押へ相渡不申様子ニ候事

一七月廿六日小倉類役御呼出ニ而長州表へ改御渡ニ相成候御書附小倉表へハ江戸御留守居に御渡ニ相成候へ共於長崎者其方心得之たゝ相渡可申との事ニ而筑前類役一同御渡ニ相成候書附別帋之通ニ御座候事右之御方々様小倉ゟ長崎表に御廻被成候御様子之段承り申候以後定而御隣國之御扱ニ可有之哉誠ニ笑止千万切迫之様子風說仕候

七月廿四日朝廷攘夷監察使を紀州加田播州明石等に差遣して其勵行を檢せしめ若朝旨に悖り傍

觀畏縮の輩あらば嚴譴に處すへき旨を列藩に達せらる

〔太守樣御上京良之助殿御出京一途、御内勅等書拔〕

寫

別紙之通被仰出候在國御一列不洩樣早々御傳達可有之候仍而申入候也

七月二十四日　　定切雅典

松平相模守殿
松平淡路守殿
上杉彈正大弼殿
松平備前守殿

寫

海岸防禦之儀度々　御沙汰之處往々不備之聞有之候ニ付今度紀州加田浦播州明石浦等ニ被立監察使候是迄傍觀畏縮之藩有之趣ニ付自後右樣之輩有之候得は屹度　御沙汰被　召上官位候於列藩茂其心得可有之　御沙汰之事

七月

七月廿五日在京本藩重臣沼田勘解由は京都警衛拜辭困難の事情を藩政府に報し且つ長岡護美の上京を促す

〔自筆狀控〕文久三年元治元年

急ニ而今日爰許差立候間着之上篤ト御聞取被下早々御評決之次第早打を以被仰聞候樣奉存候以上

以別紙申達候去ル十一日御地被指立候雇飛脚同廿一日薩州表之動靜外聞として德富只助列三人被差越候處折節英軍艦七艘罷越居熟談出來兼候末終ニ及炮發御臺場散々打崩死亡茂不少由右ハ御家老初廟堂之參談之平穩之御覺悟候得共固陋之風俗ニ而島津家之門閥を誇候流儀多其議論相立是ゟ相初候付而ハ後來之捌六ケ敷由御書面之通扨々遺恨之至御座候右之趣外聞之面々歸着御達仕候付御見舞として長谷川仁右衛門ニ副使等被指添被差立候由右之通ニ而此後いつ大變ゝ茂至可申哉御自國海岸天草御手當方々應接之手賦等御備御人數いゝ程有之候而茂足り合不申遠路相隔候御警衛之儀之御心底ニ不被任趣を以御斷茂可被仰立候得共中々之御混雜ニ而未タ其御評決ニ不被爲至由巨細被仰聞趣具ニ承知仕實ニ切迫之場合ニ相成御配意且御紛雜之程深く遙察仕候

一右之通ニ而爰許御警衛之儀御斷可被仰立哉之儀於御地之重疊御尤之次第ニ御座候處爰許之儀茂中々六ケ敷事情ゝ而御斷通品能御聞濟何程ニ可有御座哉萬一御聞通ニ相成候埒ニ至候ハヽ猶又良之助樣御出京之儀被仰出之有之間敷哉重疊拔差ふらぬ御場合相成候而已ならす最前御切組之御名代衆初引拂之御都合如何之御運ヒニ相成可申哉御人數不被指登候得之是非御名代衆ハ滯無之候而ハ相成申間敷處是又長ク滯京ニ相成候而ハ甚以差障之綾有之候間いか樣卒仕早ク引拂ニ相成候樣有之度然處前文御人數之儀方今之形勢ニ而ハいか程有之候而茂足り合可申樣ハ無之候得共爰許之儀無圖斗御斷之迚茂出來不申哉ゝ奉存候仍之爰許ニ而重疊及評議候之坂崎忠左衛門以下片手ハ是非被指登御名代衆初私共一ト先引拂左候而來春ニ茂至御人數登之儀御斷被仰立候樣之御都合ニ無御座候而ハ只今迄之御願立等頓斗之虛ニ相成却而禍を招候樣之氣味御座候間何分此節迄之不被指登候而ハ相成申間敷奉存候

一良之助樣御出京御猶豫被仰出候付而ハ五月九日早打を以申達候後大分之日數ニ相成候得共御請等無御座至多物及御延引候而ハ御都合不宜候間既ニ御名代衆三條樣ニ被罷出御地御繁雜等無御餘儀趣を以御延引之段程能御斷被申上置候得共今以何之御左右茂無之何程之御都合ニ候哉此上御延引ニ相成候而ハ殊之外御爲ニ宜カル間敷於爰許之御名代衆初誠ニ心痛至極御座候間一刻茂早ク御禮御請被爲在候樣奉存候右之外樣々何分難盡筆頭綾有之先ッ古小路嘉右衛門儀中之

七月廿五日

惣連名殿

七月廿五日越前藩の副使酒井十之丞熊本に來着す

〔小笠原佛前日錄〕

七月廿五日

越前副使酒井十之丞至、以書欲訪予、々諾之、以明日來、云々曾江戸而所邂逅之人也

（備考）

續再夢紀事等に據れは七月五日越藩岡部豐後酒井十之丞三岡八郎使命を奉して熊本及ひ鹿兒島の二藩に出發す八日三國港に於て瀧船黑龍丸に乘り同月十九日長崎に至る我藩德富太多助之を迎へて肥薩の形勢を語る酒井三岡等は廿五日熊本に着し岡部は翌廿六日に到着せり

七月廿五日本藩外交掛寺尾太門大里八左衞門小篠熊雄等小倉に赴き長倉二藩の狀況を視察して之を藩政府に申告す

〔文久三年尊攘錄探索書〕

覺

一私共當所着仕候節久留米藩本庄榮三郎竹田嚴次郎に小倉城下ニ而行逢申候間暫立留咄仕候右兩人ハ此度大里表に參り小倉ニも用事有之由ニ而一宿いたし直ニ歸國仕ると之噂ニ御座候大里表之儀ハ最初淡川次郎左衞門抔臺場築として參り右臺場築立等ニ事寄せ假令異船參候共放發ハ不致覺悟ニ御座候處此節久留米之尖連致出京居候者共大勢大里に參勅使と諜合當十八日大里表に　勅使渡海ニ相成大炮打方共見分有之候由

一右之通ニ而異船參候ハ、大里よりも彌炮發可致相考申候

一右兩人之咄ニ此度九州合從之儀京都之方ニ一々相分居候由右者筑前之尖り平野次郎と申もの筑前ニてハ尖之儀ハ改心致し候樣申出候付禁錮御免ニ相成探索之ため京都ニ被差越居候處近來下關に參專長州之用を爲し居候由右合從之事も此者より告知せ候由私共筑前久留米へ參候事も尖り之間者共より附廻長州之方へハ分明ニ相分居候由

一下關之儀ハ近來浪人共大人數參居國司信濃惣帥ニ而浪人共の申出を用不法之振舞のみ仕候由今度小倉町人宮崎良助右ハ長州久留米之用達致居候者ニ而　勅使小倉へ被參候樣子ニ付其儀伺ニ參候處召捕于今返シ不申外ニ大里之者重松彦次郎薩州之用達仕候者も下關に用事ニ付參候處同召捕牢舍爲致候由當時小倉之方ハ長州より敵國之振合ニいたし小倉筑前諜合長州を襲候と申長州よりは專共用心を致し居候由右之次第ニ而下關へは一切旅人之通行ハ六ケ敷周防之方ハ小郡宮市ニ新關を構へ旅人ハ通シ不申由右者些譯合御座候由當時山口之古城を取立造營中ニ而新關等を構へ候と相考申候

一勅使下向ニ付小倉へは攘夷之儀追々催促御座候へ共小倉よりは幕府之命を待攘夷仕度由返答相成候處　勅使より使者被差立候由水戸之親兵を正使として姫路之親兵並川上彦齋を副使として大膳大夫樣に直ニ御面談可致樣　勅使之命ニ依而直ニ御面談申度由申入候處共儀ハ小倉より相斷御家老兩人奉行兩人ニ而面談有之候處彦齋坊主抔色々とこま事を申遂ニ奉　勅ニ相成候由夫に付而ハ直ニ原又左衞門江戸へ被差立幕府に奉伺御沙汰次第ニは猶模樣も相替候由

一一昨日本山沖手ニ異船相見候相圖有之小倉御地よりも相圖を受鐘太鼓打立候處市中大騷動いたし候間直ニ私共も町迦迄出浮候處家中之面々鎗鐵炮を手々ニ持或ハ甲冑したるも有野かけの服もありて御城を指而縱横ニ走參一方ならぬ騷動ニ而御座候私共も町迦へ出浮船望候へ共相見不申候右相圖ハ八時分之事ニ御座候七時分ニ相成候而も船參不申共內本山沖手ニ碇泊致し候由相聞候間騷動も相止候今日承候へハ異船ニてハ無之幕府之蒸氣船之由然處昨日砲聲五六發相聞前田之臺場よりと相見公義船へ打懸候由然し船ニハ中不申由共儘船を下關に呼付公義船たりとも精々吟味致し候迄

ハ下關より出帆致せ不申由誠長州之振舞は全謀反之形ニ而不遠自滅と相見申候

一廿三日熊谷彈助玉篠五郎兵衛兩人ニ而會致候處此節　御奉勅ニ相成候由ニ候得共只今異船渡來致候ハヽ定而炮發ニ可相成と承候處共儀ハ如何之子細ニ而候哉右等之事ハ職分ニ而無之候間存不申何樣右之次第承知いたし居候者へ申通可申迚翌廿四日杉生寡上條八兵衛と申者參り候而此節御　勅諚之次第何とも御請可申上儀ニ無之候へ共不得止次第ニ而御請申上置候得は只今異船渡來致候とも直樣炮發致候覺悟ニ而は無之公義へも右之次第奉伺置候へは此御差圖相待候儀無御座候若急迫ニ及炮發不致候而ハ不叶場合ニ相成候へは筑前久留米申談之上ニ而炮發可致との事之由ニ御座候由尤御國へも當所より御使者罷出居候由ニ御座候得は委細從是可申上奉存候得は大略右之通ニ御座候

一長州より小倉へは不怪遺恨之樣子ニ而不法之仕方而已有之此節小倉打拂之返答ニ相成候得は門司臺場早友臺場へ大炮持出ニ相成且田浦へ長州人詰込候臺場へ御使者參候而既ニ小倉ニも打拂之決議いたし候上ハ早々人數差出候間何卒引拂呉候樣申向候處然上は私とも御指圖ニ從ひ可申候若大炮抔自然不足ニ而有之候ハヽ唯今迄すへ置候筒此儘差出可申候併私共此儘ニ而一戰爭も不致引取候而は此處ニ出張り無本意事ニ有之候間何卒私共つら立候樣御取成被下候樣と申候而引拂不申小倉之儀を疑ひ候由ニ御座候然處共後十八九日頃早友御臺場へ備有之候筒を夜中ニ皆海中へ落込火門ニ釘抔打込候由何樣小倉より手出候へは直に仕懸度樣子ニ相見候ニ付小倉よりハ必多こらへニ忍居られ候由御座候

大略右之通之次第ニ御座候委細之儀は當所より御使者罷出候由ニ御座候得は是より御聞取可被爲成奉存候以上

七月二十五日

小篠熊雄
大里八左衛門
寺尾太門

別啓仕候

一私共新藏所ニ着仕候時小坂小半太へ逢申候處此節　勅使方之内命を以熊本ニ參候由當所ニ而承候へハ　勅使ハ廿一日三田尻ニ一宿ニ而山口へ被參候由付而者三田尻より十六挺立之早船ニ而京都方（ニカマヽ）使者を差立候由京都よりハ　勅使へ九州ニ渡海致し候へと追命も參私當所ニ而見聞仕候處ハ極々怪敷樣子ニ御座候間今日より乘船仕直ニ京都へ參京都之樣樣見聞仕度候京都へ四五日も滯留いたし差急申國へ參安藝岩國抔精々槌索仕度付而ハ路銀等不足ニ相成候間新藏方用心金拾兩宛受取申候間左樣御承知可被下候

一此節小坂佐々御内命ニ而參候儀ハ不圖差起候由右今度合從之儀差起候間御國之模樣伺之爲ゝ而ハ無御座哉奉存候

勅使へ九州渡海之　勅諚も御座候へ共未タ御決心無之早船之御使抔定而九州模樣相替候付其爲之早飛脚と相考申候右之次第ニ而合從之義も急ニ相調不申候ハヽ定而京都ニ難題事被申懸候と奉存候長州之形勢を以相考候へハ合從之義躊取候而ハ浪人者とも長州押立　天子を奉奪事を擧候義ハ粲然たる事と奉存候合從之義ハ乍憚隨分御急被成候樣奉禱候

右之段奉得尊意度如此御座候恐惶謹言

七月廿五日

荒木甚四郎様
井上加左衛門様

小篠熊雄判
大里八左衛門判
寺尾太門判

七月廿六日我藩神谷矢柄を肥前に遣し公武合躰周旋のことを談合せしむ

〔尊攘錄御建白御國議〕

神谷矢柄肥前に持參之御口上書

方今之事躰ニ付而之猶更　公武御一和ニ不被爲在候而之難相濟趣御滯京中　朝廷幕府ニ被仰上其後之御運今以眞之御一和共不被成御恐察既攘夷之一條　公武之御沙汰先ハ二筋ニ相成一統疑惑ヲ懷候折柄長州薩州ニ而之兵端を被開此末誠ニ大切之御時節深被成御憂慮候迚も　公武眞之御合躰ニ而將軍職彌以御委任御一致之御根本相定不申候而者攘夷之御趣意も貫徹仕間敷就而之猶又御存意之次第被仰立且御伺茂被成筈之處不容易御事件ニ付御隣國御問柄之儀ニも御坐候得之至密御國議之程も御伺御教示も御請被成度御相談旁被仰進候委細之御使者ニ被仰含候

覺

諸岡規作

佐賀表ニ而應接等名前

御家老

七月廿六日　鍋島大隅

右者御口上爲取次罷出申候

中野數馬

右者爲挨拶罷出申候

深江助右衛門

羽室雷助

右者爲對談罷出申候

山口六太夫

七月廿八日

右者御返答申述候

右者爲對談罷出申候

馬渡三右衛門

右之通御座候以上

八月

右者肥前守様ゟ遠路太儀之段御挨拶且又私ニ白銀三枚山三郎ニ同二枚其外御進物才料等まて金子被下置旨申述

中野數馬

深江勘右衛門

羽室雷助

七月廿六日本藩政府は攘夷に關し朝旨幕議の阻隔を憂ひ公武に對する建白書の案文を草して之を京師に送る

文久三年四月廿一日より慶應元年十二月迄〔京大坂鶴崎長崎小倉仕懸御用狀扣〕

七月廿六日

青地　神谷矢柄

河口殿

早打御飛脚立候間致啓達候

、、、、

一外夷拒絶期限五月十日ト被仰出候得共於關東者未御談判中ニ候處於長州下關者五月十日兵端ヲ開小倉之方ハ　公義之御達ヲ守リ同意無之炮發等相扣夫ヨリ長州小倉大異論ト相成候儀畢竟　公武ノ御沙汰御一筋ニ不相成所ヨリ之儀ニテ銘々ノ覺悟區ニ相成人心不一定然ニ長州ヘハ兵端開候付テ　朝廷ヨリ御賞詞有之其外應援ノ御沙汰監軍ヲモ御差下付

テハ長藩專　朝意ヲ押立小倉ノ方ヘ無禮非法相働候由就テハ小倉樣ヨリ御使者ヲ以　公邊ノ御達通御心得ノ趣此方樣ヘ御相談モ有之且又長州樣ヨリモ御使者來御應援之思召等御問合ノ趣有之候處勿論前文ノ通拒絶期限ハ過候得共拒絶御申放彌御決議ノ段今一應御達ヲ不被受候テハ只今御應援ノ場ニハ難被至候付其趣御返答ニ相成申候

右長州樣御口上御答共別紙差進申候

一右ノ通　公武ノ御沙汰筋一途ニ出候樣無之候テハ御覺悟筋難相立長州樣ヘハ既御伺ヲモ被遊筈ノ段御答ニ相成居候事ニ付段々御評議ノ趣有之此節別紙ノ通京都ヘ御伺書被差出筈ニ御決議ニ相成候間寫差進申候右一條都テ御家老衆ノ方ニテ取調ニ相成今日早打飛脚ヲ以委細申向ニ相成申候不容易御書付共上　朝廷ヘハ忌諱ニ觸候儀ト被考候間關東ノ御處置筋ニハ無御構御應援等ノ儀急度御指圖モ出候樣ニ共ハ有之間敷哉左候得ハ又候御申立御取戻シ等ハ不被出來一モ二モナク御指圖通御心得被遊候ヨリ外無之候間是非御書付被差出候方ニ候ハヽ傳奏樣ニテハ相成間敷三條樣ト又ハ御別段ノ譯ヲ以應司樣ナトヘ御內意思召御伺ノ御都合ニテ程能被差出候方ニモ可有之哉ト申出候處右等ノ所ハ重疊御參談ノ上トノ道不被差出候テハ難相濟勿論三條樣應司樣御內々御伺ノ都合ニテ程能被差出候方ニ取計有之候樣申向ニ相成筈ノ由ニ御座候右ハ此節御參談ノ趣等能相心得候可然人躰ニテモ不被差登候テハ於京都取扱方モ致惡ニ可有之トモ申出候得共委細ノ儀被申向候テ人躰ハ不被差登トノ事ニ御座候委敷御趣意等御書方ヘハ不承事ニ付强テハ難申出定テ向々能呑込候丈ハ申向ニ可相成御本書モ御家老衆ヨリ差廻ニ相成候間イツレ御手許ヘ相廻可申候間御都合宜樣重疊可被有御心配ト存候

一右ノ通ニ付　公邊ヘモ御伺書ノ振別紙ノ通被差出候方ニ御參談相決是亦御本書ハ御家老衆ヨリ江戸御家老衆迄此度ノ早打ニ差廻ニ相成申候　公邊ノ方ハ猶更御建白向ノ御書付面ニテ當時　公武ノ御間ニテハ些御差付御迷惑筋ノ意味ニモ相聞如何ノ儀トモ相見候得共夫等ノ所モ精々御參談相決候由ニ御座候爲御心得寫差進申候以上恐々謹言

〔文久二年慶應元年迄〕自筆御用狀扣

朝廷ニ建白

外夷拒絶期限之事先達而天下に御布告ニ相成候上者於列藩夷船攘斥之心得勿論ニ候處傍觀ニ打過候藩有之候趣深被惱宸襟既於長州兵端相開候就而者皇國一體之儀ニ候間互ニ應援掃攘仕皇國之御恥辱ニ不相成樣列藩一致決戰盡力叡慮貫徹致候樣御沙汰之旨奉敬承候然處御趣意柄得と伺取不申事を誤候而者皇國之御爲ニ相成不申奉恐入候間不顧憚奉親候拒絶期限五月十日と被仰出將軍家御請ニ相成候上者固より　勅諭を被爲奉候而先拒絶之御談判ニ相成承伏有無ニ從而御處置筋被令諸藩共旨ニ隨順仕候者則　朝意を奉候儀と心得居申候處將軍家ニ者征夷之御任ニ而未拒絶之談判中承伏有無を茂辨不申通航碇泊之夷船或打拂或見遁銘々之覺悟區々ニ相成候者畢竟御命令一途ニ無之處よりの儀ニ而人心益疑惑を生し申候疑惑者三軍之禍とも承申候處右樣人心一定不仕若曲直を誤候而者却而御國辱を引起候而已ならす第一者重キ將軍職御委任之御趣意茂立兼內蕭墻之禍を釀外諸蠻之寇を受遂ニ皇國之大至難ニ茂及申候而者乍恐　叡慮ニ茂被爲愧間敷誠以深奉恐入候前條御沙汰之趣ニ而者越中守家中之者共茂甚以疑惑仕居申候間重疊恐多奉存候得共何卒事理明白之御指揮奉仰冀候以上

七月

幕府ニ建白

外夷拒絶期限之儀先般御請茂被爲濟候付而者素より　勅意御遵奉先拒絶之御談判ニ相成承伏有無ニ從而御處置筋之儀猶御差圖可被爲在列藩其旨を奉し一同盡力仕候儀當然之筋と相心得居申候處既於長州兵端相開候就而者皇國一體之儀ニ付五ニ應援掃攘皇國之御恥辱ニ不相成樣との趣猶又從　朝廷御沙汰被爲在候然處右拒絶之御處置中列藩共御模樣を茂不奉親通航碇船之夷船或打拂或見遁し區々之覺悟ニ相成候者畢竟御命令一定不仕處より之儀ニ而人心紛亂適從する

所を不知若理非曲直を誤候而者却而御國體立兼候而已ならす内蕭墻之禍を醸外蠻夷之悔を被爲受約ル處皇國之大至難ニ茂及申候而者再御挽回之期者有御座間敷歟以深奉恐入候前條之次第越中守家中之者共茂甚以疑惑痛心罷在候付京都にも奉伺置候事ニ御座候乍恐於公邊者如何様之御見亘ニ可被爲在哉願者御評議之趣等御懇切ニ被仰立　叡慮之御深旨を也御窺取一定之御指揮奉仰冀候以上

七月　　細川越中守

右御伺之書付（二通の建白書）三條様關白様ニ被差出管之處此許詰之御一門衆初見込も違候付先御見合ニ相成方と決議相成勘解由殿御國許ニ持歸ニ相成候事

〔仝　書〕

以別紙申達候先月廿六日御國被差立候上々早打之御飛脚一昨三日之夜着外夷拒絶之儀ニ付公武ニ御窺書相達候處爰許之事躰と御趣意喰違居候様被考其儘被差出候而ハ却而貫通難仕候間右窺書ハ先爰許へ押置捌者儀早々御國許へ罷越具ニ言上等仕筈ニ候間追而猶御模様相分候迄ハ於御地も被押置候様存候此段爲申達如之御座候以上

八月五日　　沼田勘解由

郡夷則殿（江戸在勤）

七月廿六日越前藩の使者岡部豐後熊本に來着す

〔小笠原備前日錄〕

七月廿六日

越前君側要人酒井十之丞、奉行三岡八郎來、外廳而逢之、是越前侯副使也、本使岡部豐後、今日到、各乘蒸氣船、至長崎而上陸、鳥原而又乘和船、木使、從茂木浦乘和船、故至有遲、

七月廿六日筑前藩の使者白水白熊本に來り其藩世子の上京を報す

〔小笠原備前日錄〕

七月廿六日

（前略）

筑前白水白者來、同侯世子、決意出京、老臣二人從之、曾有與本藩所議、故告之於奉行道家角左衛門、乃歸國、

七月廿六日夜松平春嶽の旅館に充つへき京都東山高臺寺に火を放つ者あり

〔尊攘錄探索書〕（文久三年）

一春岳公人數四萬程引連上京之由風聞

一右之風聞より嘸當月廿六日夜春岳様御旅宿東山高臺寺出火翌朝七ッ時前ニ四條御旅所小屋竹やらひに板札出し有之を見付候寫左之通

高臺寺奸僧共朝敵松平春嶽ニ寄宿差許候段不屆至極ニ付神火を放チ燒捨候畢向後右様之もの有之ニ於て者可處同罪者也

亥七月（七月廿六日ヵ）

七月廿七日小倉藩の使者熊本に來り攘夷決行に關し苦慮する所の内情を陳べて我藩の斡旋を乞ふ

〔尊攘錄御建白御國議〕

小倉より三度目ニ參リ候御使者（大池金右衛門）口上寫

但御内役へ及御面談度と申出御側御取次籔作右衛門應對有之候由左候而御使者ハ直様引取候由

一此度正親町少將様より御使者被差立候付而は猶又一段之急場御決定次第ニ而は即刻及戰鬪候外無之時宜左候得は皇國内亂之兵端を開公義御厄介相成其罪不輕恐入候次第ニ付一昨十五日攘夷一件御決答相成候儀は畢竟後世不忠不義之御名を不被爲蒙様一時之御策略深思召之所より　御勅答被　仰上置候得共元來於此方様は御當代之御家柄奉對　朝廷候而は則御陪臣之御筋ニ付　御直勅御奉戴有之候而は將軍家を被成蔑如候筋と相成不忠不義之御名者固より御遁難被成は當然之御事ニ候處右忠義不相立ニ當り候御家ニ御　直勅有之候而は則於　朝廷不忠不義之國を被成御擧用候之道理重疊恐入候次第ニ付何卒是迄之　勅諚廉々早々關東ニ御沙汰ニ相成關東より御指圖被成下候ハヽ難有奉戴仕度段歎願之次第兩人差急京都ニ申遣候

〔仝書、小倉來使一件〕

七月廿七日此書取井上加左衛門より彼方様御使者へ相渡候事

上包　御家老衆ニ　御家老ゟ

御答

先達而以來長州より御仕懸之極付而之御家中衆も茂御鬱憤ニ被堪兼最早爭鬪ニも茂可被及場合ニ差臨重疊御心配被成候間見込之筋も有之候ハヽ無遠慮得御意候様問宮四郎左衛門殿を以御傳言之極具ニ致承知御尤之次第御心中深々察入存候頃日越中守様よりも御答被仰進候通公武御一和御政道御一途之儀此節御隣境も被茂ニ仰談屹度御盡力之筈ニ候。差寄攘夷之御趣意二途ニ出候様ニ而重疊被成御疑惑候付先其儀より御伺被成候間御採用ニも相成候ハヽ御兩國御氷解御取扱之一條尤之急務ニ候處其内兵端ニも及候而ハ追而之御處置茂六ヶ敷相成候者のみならす第一ハ外夷切迫之折柄實ニ内亂之緒ニ而往々如何成行可申哉其上長州も茂　勅意を被奉候而之事ニ候へハ御一己之御宿意抔とハ違候間旁皇國之ため難被忍を御忍有之成丈事ニ不相成様御覺悟被成候外有御座間敷と咄合候事ニ御座候右體普通之儀ハ勿論疾御評議有之たる儀と存候へ共折角之御相談ニ付不關申述試候事

七月廿八日筑前藩の使者公武合躰周旋談合の使命を帶びて熊本に來る

〔文久三年八月以來越前外九藩へ御使者被進候一件〕

一御客屋方御奉行中ゟ左之通

松平美濃守様ゟ之御使者ニ於御客屋片山多門致應對候處別紙御口上手扣三通演述書一通並御音物目錄共差出申候間則歩御小姓を以差廻申候以上

七月廿九日　　御客屋方

藤本彌三郎殿　　御奉行中

上包　御口上手扣

越中守様ニ　　美濃守様ゟ

彌御堅因被成御在國珍重思召候此節御家來川越又右衛門牧市内と申者其御地ニ被成御指出候付御安否御承知被成度御口上被仰進候依之御目錄之通被進之候

右一通

上包同

越中守様ニ　　下野守様ゟ

文久三年

彌御堅固御在國被成珍重思召候此節美濃守様ゟ御家來之者共御地ニ御指出被成候付御安否御承知被成度御口上被仰進之候

右一通

方今　皇國之勢日ニ増切迫之事情ニ押移唯今之形勢ニ而者外寇内憂一時差湊ひ益被惱　宸襟候者必然之御儀ニ而　皇國之御安危爰ニ迫候様御考御心痛御悲歎之至御座候就而ハ彌以　公武御心實之御和合ニ相成攘夷一徹之御所置ニ出四民安堵之御基本不被爲立候而者決而難被相濟御儀ヶ思召候依之此度御上京　叡慮猶又御窺　御爲筋御周旋被成候所ニ御決心不日御上京可被成之處夏以來御持病之御疝邪今以御甘不被成差向御旅行難被成時日御延引被成候而ハ彌増時勢茂差詰り候付爲御名代下野守様ニ御含御家老共御添近々被成御登京御儀ニ御座候此段以御使者被仰進候由

右一通

上包

演述

別紙御口上被仰進候趣者　皇國御爲筋ヶ之申ながら不容易御事件ニ付御微力之可被爲及儀ニ之無之候得共斯切迫之時勢ニ臨御傍觀被成候而者被對　公武御不忠至極御累代被爲蒙　御高恩御藩屏之任ニ御備り候詮茂無御座御不本意至極ニ付御心力之及ひ御周旋被成御深慮御感服被成候ハ、各別左茂無御座ニおゐて者幾重ニ茂　公武御合躰之御根軸相立候様御勤被成候御心得ニ御座候御近國殊御山緒柄御同心茂於被成進者御互ニ御力を被合　公武御安心之道ニ致し被上度思召候間不被閣御心情候處被仰進候猶御賢考御存念ニ付無御覆藏被仰進可被下候委細者御家來之者ニ御含被成候條事々御聞取可被下候由

〔文久三年機密間日記〕

筑前御使者持參　（朱の書込ミ）七月廿八日筑前ゟ之御使者川越又右衛門牧市内と申仁ニ御奉行片山多門應對之節持參之書付也

上包　御口上手扣

方今　皇國之勢云々（前ニ出つるを以て之を略す）

七月廿九日遣薩慰問使長谷川仁右衛門等歸藩復命す

〔文久三年四月より元治元年四月迄御記錄〕

（七月廿九日長谷川仁右衛門等薩藩より歸着提出之）

御口上

今度御領海ニ英國軍艦渡來掃攘之段越中守様被成御伺承御心遣思召候付委細被成御承知度以御使者被仰進趣致承知候此由修理大夫様ニ申上候處右掃攘之儀付而者先達而御家老中より被及爲御知候通之儀ニ而外ニ相替子細茂無之候就而者御見廻以御使者被示聞趣被入御念儀忝思召候と之御事

〔尊攘錄對州エ魯夷亂妨薩長夷艦砲戰附生麥伏水一件〕

亥七月薩英取合聞書

一當二月英夷横濱ニ來船去夏於生麥島津三郎殿行列中ニ英人騎馬に而乘入失禮いたし候ニ付薩人殺害いたし候者之家内共養育料等之儀申出於公邊御取扱難成候ハ、直ニ鹿兒島ニ押渡及談判候段申立候得共段々御申諭有之承引いたし候間直ニ鹿兒島には參り申間敷候得とも前文之通申立候事ニ付一ト通り御知らせ有之候旨越前公より御沙汰有之候由之事

一前文之次第ニ付鹿兒島海岸之臺場大凡二十八ヶ所程ニ而過不及も有之候得共大概長短之頃拾挺計内壹挺者臼炮之由　嚴重ニ御用意有之居候得とも近來ニ至り候而者人氣も些ト相忘候趣ニ爲有之由

一六月二十七日異船拾艘餘相見候段薩州海岸之改所山川口之番所より同日午ノ刻注進有之候處暫時之間鹿兒島より壹里

計相隔候櫻島近ク乘入候處大小之船數七艘ニ爲有之由
　但由川口番所ニて茂一ト通應接爲有之由之處其次第聞兼申候得共何國之船ニ而何用向ニ而參候哉之問合共ニてハ無之哉ニ相見申候事
一英夷船は大炮六十門備壹艘三十二門貳艘十八門三艘大炮船壹艘百五十凡度位之由都合七艘に而炮數大凡一百七拾九門程ニ而アルムストロングと歟申元込筒ニ而尖彈多圓丸少ク爲有之樣相見候由
　但尖は都而着發ニ而柔キ大地ニ打込候ものは多發シ不申由
一六月二十八日より應接懸り役人代ル代ル應對有之御客屋等御取繕上陸いたさせニ相成候筈之處其儀者好不申由ニ而英國より之書翰委敷は聞兼候得共生麥ニ而殺害ニ逢候解死人を差出候樣左候ハヽ船將ミニストル初衆夷之目前ニ而首を刎可申且養育料何クドルと歟日本壹萬五千兩に相當候由　出候樣此返答二十四時歟ニ刻限を切有之其外生麥異變之砌銃隊を以跡を慕候へとも公邊より無餘儀御沙汰も有之其儘ニいたし置候ニ付幸ニして三郎殿今迄存命抔申文言有之前文解死人養育料之二ケ條不相叶候節ハ忽兵艦を以兵端を開可申と無限輕蔑いたし候得共未タ薩州より炮發を初候趣意ニてハ無之大名之行列ニ無禮いたし候節打果候儀者日本古來より之國法ニ而其砌兩日は　勅使並薩州通行ニ付夷人共他行いたし不申樣公邊よりも御沙汰有之居旁以英人之曲ト申儀御答有之候得共其儀は日本迄之御國法ニ而萬國ニ亘り公平之論ニ無之處より歟一切耳ニも聞入不申候由
一應接者英夷共も和話ニ通候得共蘭人シーホルトと申者之倅長崎ニ而成長いたし能日本話をいたし候者を屈參居候ニ付双方解シ易爲有之由
一炮發之儀は早鐘烽火之相圖有之候迄はいたし不申樣異船渡來之後追々嚴重ニ御觸爲有之由
一當月二日巳ノ刻頃前文二十四時限之御返答無之處より歟薩州御手船蒸氣船（商船ニて大炮等之備無之盜賊威シ之小炮貳挺宛歟飾爲有之由）三艘奪取候存念歟質ニ取候心持歟重留と申處之前ニ繫り居候を綱を付引出候間下貳番目之臺場より（辨天波濤と歟唱候由）夷人盜取候と相心得軍ニある時ハ主之命茂受さる處ありト申ものニて炮發いたし候間彼よりも是ニ應し右三艘之御手船は忽沖合ニて烙丸を以燒滅いたし夫より終日双方戰爭ニ相成候由
一御手船彼より引出候節薩之水夫共恥を不知ものハ海潮ニ飛入通候者を端船ニ乘せ夷人より助上候由
一右御手船預士分五代才助松木安右衛門其外下々迄ニは少々ハ乘組居爲申由之處孰茂燒溺之二ツハ通申間敷五代列は有名之航海家ニ而可惜事之由尤五代儀其前日之咽ニ自身命も今明ニ相成居候由ニて預候船若彼より被奪取候儀も難計其節ハ自燒いたし候覺悟ニ而硝藥共貯置候由申候得共其事を不造施彼より燒失いたされ候儀重疊殘懷之由
一彼が烙丸ニて鹿兒島上町幅半町餘竪三町餘御家中新納某川上某等之屋敷迄燒失いたし候由
一歩兵屯いたし候場所ニ破裂彈一ッ來り貳人卽死數多手疵尤右貳人共骨肉散亂して壁或ハ柱ニ肉抔も打付爲申由
一鹿兒島之臺場五ケ所より炮發いたし候餘ハ程遠爲有之由有名之炮術者田原直助烙丸を用意いたし待懸候得共夷船此方ニは近寄不申甚殘念之由
一彼初之程ハ船之進退炮發之趣寛ニいたし暫戸切後段ハ進退誠ニ神速炮發も一入嚴敷いたし候由
一彼が六十門備之大艦（白壁之由）祇園臺場ニ近々と三丁程ニ來双方炮發中臺場より彈射し候一丸彼が檣ニ的中いたし候間船央相傾打居候處其儘船より一入烈敷連發いたし候間臺場之筒巢口を打曲メ或ハ胴中を被打筒中ニ瘤を生じ車臺を被碎一ツも不殘損破し候ニ付唯々切齒扼腕ニ而眺居たる迄之由右打居候船船將下知いたし候と相見沖之ケ輪よりハ端舟より類船ニ通移候處臺場ニ向候ケ輪者前條之通頻ニ連發いたし候趣を以考察いたし候へ者紀律ハ餘程正敷相見候由此戰ニ士分稅所清助深手ニ而翌朝死ス又者壹人卽死少々宛之手負數多有之其内船ハ類船より助引出行右之次第ニて二ノ矢を繼不申處千萬無量之遺恨ニ有之候由
一臺場筒者西洋流炮術師役成田庄右衛門指揮ニてワラホイト臺之由
一銃陣編束之法者是迄西洋流ニ而爲有之由之處號令服裝等彼ニ習ふ事一統之人氣ニ差障り候間島津家古來より傳來之法

も有之近來雷粉火繩兩用ニ相成一種之兵制ニ一變いたし候由

但右之通候得共鄉士交代之面々數多行逢候處火繩筒迄見及候間御城下にてハ歩兵一統之處ハ何程ニ可有之哉

一陸軍之惣師者島津左衛門と歟申人之由國内六七歩之人數持ロ々々嚴重ニ爲相固居候由之事

一惣臺場より打出候彈丸空實共彼が船腹ニ數多的中いたし穿透候樣覺候得共左迄騷立テ候樣之儀相見不申全者船板之間砂石を入有之候處迄ニ而深ク入不申ものと覺候由

一當日者烈敷風雨ニ而有之候由ニ候得共大炮之彈丸者格別障り不申乍併臺場よりハ向風敵船は追手ニ而臺場者炮烟ニ而少々迷惑いたし候得とも雨を付居候ニ付炎熱之時分一統大キニ助りニ相成候由

一兵糧者俄之事ニ而仕出處より臺場々々に仕送り候處持夫共彈丸頭上ニ飛走り所々ニ而破裂いたし候ニ相驚捨而逃去兵糧臺場ニ行屆不申不怪難渋いたしたる由實ニ三日茂連戰いたし候ハヽ兵卒餓而用立不申可有之此節初而實驗いたし候ニ付以來ハ臺場々々ニて焚出候樣可仕由此儀者必其心得いたし候樣相咄候事

一同三日昨夕英船盡ク沖合ニ引退今未ノ下刻猶又鹿兒島に押寄來一戰爭いたし双方勝劣無之左候而オコ島之臺場に取掛り暫時嚴敷戰爭之處荻野流之炮術家青山五郎右衛門高臺場より一放打出候處不過彼が一艘之甲板ニ當りワット大勢叫候聲相聞候由ニ付多分死亡手負いたし候と覺候由無程暮近相成退帆いたし候由

但右戰爭中櫻島者相接候所柄ニ而是より茂炮發いたし候由扨又此日ニ遲ク取懸候儀者昨日戰爭之節船之損處を繕候ニ付延引いたし候共ニ而者無之哉之由

一彼が船眞直ニ進ミ斜ニ成炮發いたし候由之咄も有之候得共一說ニ炮發之節ハ眞一文字ニ相成候由左候得は臨機應變にて一定いたし不申と相見候事

一オコ島之臺場ニ而彼より車臺を打候ニ付破損いたし木片飛來壹人太ト股ニ餘程深手を受候由其外惣臺場ニ懸身薄時分ニ付砂石等惣身ニ穿入いたし薄手を負候間以來ハ臺場之兵卒ハ必甲冑可用事之由

一此節薩人不殘素肌ニ而出張いたし間々陣羽織陣笠等迄相用候者ハ爲有之由

一右異船ハ長崎にハ立寄不申定而横濱に廻候ものと相見候段長崎詰之薩人より鹿兒島へ申越候由ニ而委敷樣子者不相分由

一祇園臺場大破損之外格別損所無之當時專御手入之由尤祇園と次臺場之間拾町計有之些程遠相見候ニ付オコ島ニて青山的中いたし候高臺場之功を發明し右中間ニ高臺場新規御築立ニ相成候由

一夷人之死體三ッ上り候由之處手足ニ石又ハ彈丸之重りを付海底ニ沈有之候處孰茂腹を裂候而膽を脫キ裂目ハ糸を以縫有之日本遺髮同樣之由

但帆木錦之袋ニ入重りを付沈メ候もの茂有之候由此外引網抔ニ而所々ニ引上候由之處官府ニ持出候得者入費も有之且腐肉ニ而嗅氣難堪其儘ニ捨置候由專ら相唱候得とも附會之巷唱も難計本文ニ者顯不申候事

一御女儀樣方ハ早々四里外程ニ御立退有之候由

一修理大夫樣にも御立除ニ相成候由

一三郎殿ニ者四五丁御立除ニ相成候得共所々御順覽諸隊へ御下知有之候由

一御居館ニも彈丸來り火起り候得共直ニ取消候由

一御居館ハ隅州國分に（海岸より三里も相隔居候由）御移之筈ニ而當二月頃より御普請之處根元龍伯樣御住居跡ニて要害宜最早大半御成就ニ相成候間御移ニ可相成之處此折柄人氣ニ差障り候間暫御見合秋ニも相成候ハヽ御引移之由

但是迄之鹿兒島御居館ハ海岸より五丁程有之樞要之地ニ付臺場等築立候筈ニて御遷居之思召立と申譯いたし候處全海岸近炮彈を恐而之事ニ可有之候得共例之氣幅ニ而無餘儀返答と被考申候事

一異情此儘ニてハ迚も相濟申間敷根元重疊見侮縱七艘ニて詐力を以襲來候得共一ッハ思惟せしよりハ薩之備嚴密ニ有之候處より迚も志を遂得不申と見亘引取爲申ものニ可有之左候得者此末船數を增再來必定と人々振立相待居候趣ニ相見

候由

但此節英船七艘一隊ニ付再來ハ必拾四艘又ハ貳拾壹艘と見込居候由

一薩州御家老壹人公邊御勘定衆壹人（根元外國奉行之管候處俄ニ打替候由）兩人衆共姓名承落去ル十九日鹿兒島に着岸未タ昨今之事ニて事情相分不申候得共何れ此節異船來船ニ付而未タ攘夷之時節ニ無之致炮發不申樣御示談之積り共ニてハ無之哉勿論當時柳營之御威光相立不申一切御手も不伸候ニ付双方御取鎖之御所置ハ有之間敷何樣炮聲ニ恐所々ニ繫り戰爭後ニ來着ニ付共後も無用ニ相成候由承り候得共未タ無篤斗談話ニ付外御用茂知不申由

但本文乘組之蒸汽船ハ公邊より拜借之船ニ有之候由

一薩州御手船三艘彼より燒失いたし候ニ付跡ニ者漸異國船造之商船貳艘迄相殘居候由

一薩州御口屋等に之御觸一通今度薩英戰爭之新聞紙一通相添置申候右者英船薩海より三日之晩無殘退帆同日四艘横濱に致廻着同所より長崎之同國ミニストルに差廻候もの之由ニ而薩人長崎詰之者より鹿兒島に差送候と申事ニ付寫留置申候然處全章些ト難解稜も有之自然ハ附會之もの茂難計眞贋之境難辨御座候得共其儘相添置申候

右者私共儀今度薩州に御使者衆へ被差添罷越申候處同國伊集院驛（鹿兒島より四里半）内者御混雜中ニ付御斷同驛ニて應接ニ相成申候右應接人本田織部（京御留守居ニて御側御用人）種子田市兵衛（表御士）に談話尋問いたし候概略ニて直と鹿兒島表ニ罷出致見聞不申右兩人之談話ニ付自然ハ行違之儀も難計奉存候得共承り候内事實等敷事柄を一ッ書ニいたし差上申候間左樣御聞置可被下候樣奉願候以上（本文薩藩觸達及新聞等添付云々とあるも記錄なし）

七月二十九日

古閑富次
山田巳右衛門
藤木源右衛門

七月廿九日本藩住江甚兵衛國老小笠原備前に見え兵端を開かずして攘夷の實を擧げ以て人心を治むべきを說き此意味を以て己親く出京して公武合躰關東委任の周旋に當らんことを請ふ

〔小笠原備前日錄〕

七月廿九日雨

至宮内邸、告越使前節之動靜、且使節所告、應之俄不可答之旨、○朝　○入夜、住江甚兵衛來、蓋彼欲至于京師、而公武一體、關東委任之爲周旋、告其所見、其要者、關東而有攘夷之處置、則人心治、云々

〔尊攘錄上書類〕

文久三年頃歟
美濃殿書取也
住江甚兵衛内話之大意

長州之兵を解　公武御合體眞御委任等働見申度其存意ゑ攘夷と申候へハ打拂と心得候氣取多候處何そ打拂候が攘夷ニ而者有之間敷何也ニも談判を以不得止之事情を以攘夷之御處置有之候ハ、彼等不伏之節茂有間敷歟何樣攘夷之驗相立候ハ、治り可申元來禽獸ニ等敷外夷ニ候得者天理を付不申譯ニ而右ゑ付而者御國是屹と相立御合體御委任之筋も先關東に右之御筋貫候樣御周旋肝要ゑて此攘夷之御稜目不立候而者治申間敷唯今之儘ニ而候ハ、御國内之割據爭亂ハ眼前、○合印付札奥ニアリ

ニ而左候得ゑ攘夷之方ハ十ニ五ッハ可承伏攘夷之御談判と被考若不伏兵を加候而も我直ニ有之候ハ、戰ハ不得止次第ニ而内外之兵端何レゑ利害得失可有之哉若此筋ニ筋付不申而ゑ御親征と申ニ至可申歟此上期限御猶豫ニ而も先之驗さへ相立候ハ、治り可申因而御國是此處に屹と相立候ハ、必死之覺悟を以相働見申度尤一人ニてハ不安意之由御奉行内井上ト一同罷越申度趣ニ御座候右十日計内ニ者決候樣有之度旨申出候ニ付得斗勘考話合候上猶可申聞と申置候且又右之通攘夷之御處置付候上長崎之儀ハ神祖以來被開置候譯も有之藥種等我無所之物茂持渡候譯茂有之事故此方ハ可被開

旨

一長州兵を開候ハ筋を得不申と見込候由ニ而是も筋押ニ而說申候ハヽ可被行哉之見込ニ申候

一諸親兵其他浮浪有志之向も筋を以論候ハヽ大方可被行見込ミ申候

○合印

關東ニ而是迄之御失策ハ重疊御侘天下之事ハ御誠意を以御熟議之御歩ヒ等勿論

七月下旬本藩宮部鼎藏山田十郎は土藩土方楠右衛門と共に時局に關する建白書を朝廷に上る

〔山田十郎引取書〕

文久三年七月末日ハ覺エ不申三條樣ヨリ急ニ致參殿候樣申來候間十郎儀差急罷出候處鼎藏并ニ土州藩土方楠左衛門ヒ申者罷出居三人一同被召出當今時勢切迫ニ付テハ公卿百官ハ不及申詰合諸侯方迄エ從　朝廷當世之急務心付候丈無遠慮可申上旨被仰付候事ニ付草莽微賤之者ニテモ見込之筋有之候者汎ク御下問可有之トノ旨ニ付三人共見込之趣有之候者申上候樣被仰付候間一應ハ御辭退申上候得共　朝廷之御爲　皇國之爲ニ付無遠慮申上候樣重々被仰聞候間三人共見込之趣替々申上候處義論一定不仕御聞取惡被爲在候間致退出論談決著之上書附ニテ差上候樣被仰付候ニ付鼎藏下宿ニ打寄致論談候得共銘々見込之趣致一致兼候得共大同小異之儀ニ付大略寄セ合セ書附ニ致シ差出候右書付左之通

輕賤不肖之微臣增實信道久元等　廟堂之御機務至重至大之御事體彼是奉議候儀重疊奉恐入候得共近日者愈以切迫之御場合天下之勢不出數旬而御安危之際可立至茂乍存傍觀坐視仕候而者猶更不臣之罪難免次第御座候間不憚尊嚴犯死罪上言仕候方今天下之形勢大觀熟察仕候ニ第一關東之事情　叡慮遵奉之事實聊相立不申當路之役人大略安藤小笠原之餘黨而征夷之府中概略貪戾之奸吏共營爲仕候處只管通商之事而已ニテ三港之交易彌以甚敷趣御座候然ニ今日以暴横所以不奉迫　朝廷之者聊憚名分候而不恣逆焰而已併名分者君子所悲而小人奸吏ニ至而者藐然而無忌憚則平義時カ如キ所業モ有之候間可悲事ニ御座候若暴横之奸吏義時ガ故智ヲ襲候者有而大逆ヲ企候者由々敷御大事ニ可有之若無左共關以東之地者彼ガ有ヒ相成候事必然之勢ニ御座候近頃承候得者小笠原圖書頭當月十日幕府之蒸氣船順動丸ニ乘組急速大阪港致出帆關東エ罷下候趣其内情探索仕候處此節同人儀又々呼取再勤爲仕候模樣ニ御座候然上ハ彼義時カ故智相用候半事頃日之擧動ニテ推察被仕申候將又越前一國之論近頃益邪曲之說ヲ興張シ甚敷ニ至候而者小國之大國ニ事ルハ當然之道理耶蘇之宗法全ク邪教ニ無之抔囂々相唱申候由其深意之根帶スル處右等之僻論ヲ以天下之人心ヲ壓倒シ其内機會ニ乘シ人數ヲ引率シ父子一同急速ニ上京暴威ヲ以奉迫　朝廷恐多モ通商之　勅許ヲ可奉戴トノ存意ニ相違有之間敷奉存候右之次第證跡明白ニ御座候且又當月八日家臣重役之者兩人蒸氣船ニ乘組同國敦賀港出帆薩國エ罷越候由薩國之儀者元來眞之攘夷一定ニ無之其子細者去七月九月兩度迄交易相開度段幕府エ願出候儀有之其心情甚以難計且又近頃藩臣等御不審之筋ニテ國中疑惑之折柄越之僻論ヲ以遊說仕候者十ニ八九ハ同心可仕歟ヒ相察申候若一度薩越合從邪說ヲ主張仕候者關以西之諸藩過半雷同可仕全躰諸藩之深情ヲ熟察仕候ニ倫安偕勢之策而已ニテ義理ヒ共ニ存亡スル國ハ三藩ニ不過候然ニ其倫安偕勢之諸藩エ薩越合從之威力ヲ以俗吏心願スル所ノ邪說ヲ煽動シ關東ヵ遙ニ相首肯セハ首鼠兩端ヲ持候諸藩悉合從仕候者天下大略彼等ガ術中ニ落入只　朝廷而已孤立之勢ニ被爲成如何樣共被遊樣有御座間敷其虛ニ乘シ彼等カ定算之如ク暴威ヲ以　朝廷ニ相迫講和之謀ヲ設永久開港之議論ニ一定仕候策タル事顯著明白ニ御座候若　聲戮之下右藩中エ同意内援仕候者有之候者禍端蕭牆之内ニ相起不可言儀ニ立到可申モ難計誠以恐懼之至奉存候仍而深考慮仕候ニ一條恐懼至極・ニ奉存候者方今之御急務　御親征之御一大事ニ被爲在候ヒ奉存候右御一大事之　宸斷御根本不被爲立候而者千緒萬端御事業都テ枝葉之御儀ニテ復古濟世之　叡念御徹底之御効驗御立難被遊右非常之御果斷被爲在候時者禍ヲ轉シ福ト被遊候而已ナラズ千歲之廢典ヲ被爲興　祖宗之御舊業御恢復之氣運全ク以此御一擧之外有御座間敷奉存候比喩仕候モ奉恐入候得共宋之眞宗之澶淵之役モ如是時機ニテ有之候歟彼一代之主ヲ以スラ挺身進伐致候故天下之士氣奮興强虜ヲ一戰ニ挫候事如是御座候況　皇國宇内萬國之　至尊ヲ以被遊御親征忝モ　聖體之御苦身ヲ不被爲厭鳳輦ヲ形勢最上之地ニ御進被遊天下之牧伯ヲ被爲召光明正大之　宸衷ヲ被爲開反復　勅諭被爲在候者不臣倫安之徒愕然トシテ面目ヲ改可申奉存候左候者天下人民始而所嚮ヲ知　皇國一致孰カ死ヲ以忠ヲ盡萬世之御德澤不奉報者有御座

間敷假令老奸巨賊百端詐僞ヲ以嘯集仕候ト雖モ左袒之者有御座間敷奉存候是則千歳之一時不可失之機會殆數旬ヲ不可出乍恐中川宮様御事戊午以來　皇國御爲ニ御盡忠被遊儀ハ天下之士民奉仰望居候處去冬以來聊御藏鋒之御模様ニモ被爲渡候哉天下之士民望ヲ失候次第ニ御座候處近頃竊ニ承候得者攘夷之御先鋒御至願ニ相成候由誠ニ難有思召天下之御鴻福ト奉存候何卒御至願之通　御親征之御先鋒被遊御許容御進發軍務ヲ御統領被遊候者官軍之士氣故ニ奮興シ兵勢強大ニ相成候事前知被仕候事ニ御座候右御事實之御運試ニ奉申上候得者乍恐　鳳輦ヲ美濃尾張之間エ被遊御進宮様ニハ箱根ヲ御越小田原城エ御進發先横濱之異賊ヲ御掃攘順叙ヲ以テ箱舘長崎之賊巢御一掃可被仰付是則第一策ニ御座候又鳳輦者男山エ　行幸宮様大坂城エ被爲成攝海紀淡中國之海備嚴肅ニ被仰付其上如何共　叡慮之儘御取捨被爲在度尤尾張大納言殿當時坂城守將之趣ニ御座候得者其儘差添被仰付度左候者御次第モ相立人氣モ居合可申ト奉存候是則第二策御座候右宮様御先鋒直ニ　鳳輦ヲ行宮エ被遊御進御手順全相立候上大樹公ヲ始諸牧伯エ　鳳詔ヲ下給り　皇國一統速ニ掃攘之功ヲ奏候様被仰付候者如何成老奸巨賊ト雖モ悚服不仕者有之間敷奉存候萬一不逞之賊臣有之候時ハ屹ト誅代被仰付候共何之難事可有御座哉仰願ハ速ニ御威稜ヲ御振興　宸衷ヨリ御英斷天下之耳目ヲ御一新被遊度重疊奉至願候此儀若御衆議ニ被爲渡候者決而至急之御運ニ難相成假令御運被爲在候而モ御軍機漏洩人心之感戚薄ク相成可申奉存候伏而奉懇願候儀者　宸斷之一事ニ御座候前文申出候通眞宗獨斷渡河而趙宋安シ孫權斫案決策而吳國終ニ全ク御座候英明之主大事ニ臨ミ果決勇斷ヲ以テ其邦域ヲ保全致候事古今一轍ニ御座候斷而敢行焉鬼神避之ト申事御座候得者何卒非常之　御宸斷ヲ以テ内憂外患一時ニ勘定被遊候様有御座度左候得者實ニ千歳復古之御大業此大一舉ニ被爲在候者必然之御儀ト奉存候恐多奉存候得共數旬之優柔不斷ニ被爲渡候者内外之憂患一時ニ相迫前古未曾有之御艱難御眼前ニ立至可申歟ト杞憂之至ニ堪不申候仰願ハ内外之事情深被遊御考慮御遺算不被爲在候様右微賤之某々之喋々言上仕候儀實以恐入候得共非常切迫之御時節默止罷過候事却而永世之御德澤忘却仕候ニ相當將又方今　聖明之朝廷言路御洞開衆議御採用之折柄ニ御座候ニ付狂愚出位之妄言犯萬死上言仕候誠恐誠惶死罪々々頓首謹言

右之通相認差出申候

七月晦日幕府は屢々海陸防備及ひ士氣振興の令を下すと雖も猶ほ未た其實の見るべきものなきを以て特に專任者を置きて之を督勵せしむべき旨を各藩に通達す

〔文久三癸亥年尊攘錄探索書〕

大　目　付ニ

外夷拒絶之儀兼而被仰出候上者海陸御警衛向并士氣振興之儀方今之御急務ニ候處是迄百事遲緩ニ流れ攻守之法未タ御全備ニ不相成御國威ニも係り候儀ニ付此度別紙之通海陸御備向掛被仰付候間諸向共得其意御武備御更張相成候様厚相心得於銘々も一際勉勵有之候様可被致候

右之趣向々ニ可被相觸候

七月

別紙

七月晦日

海陸御備向掛

水野和泉守

稲葉兵部少輔

大目付

松平對馬守

大久保豐後守

御勘定奉行　川勝丹波守
御目付　池田修理
杉浦正一郎
設樂岩次郎
佐々木脩輔

七月晦日越藩の使者我藩主に謁して越藩主父子の書を呈す

〔小笠原備前日錄〕

七月卅日　雨

今日、　臺下見越前之三使於鹿房、兩公子侍坐、予等因使節之乞、列座　君側聞使命、使節先出其君之封書、八代長岡氏採之、直出　臺下、々々拆封、與兩公子共讀之、而後與予等、而三使等告越國之議一端之要領退、尙乞逢予等、歌仙房而遇之、則乞許横井之罪也、初令坐三使於弓之間、以屛風圍之、松埜氏與予、先應接之、而要人官扈從長輩接之、　臺下聞使命之後、又至弓局、出饗膳之前、予又應接、而寛々勸飲食、始予等應接之、後八代松井氏米田氏亦逢之、○右君側所列之者、松井氏米田氏有吉城東氏及予與要人官大木氏也、

〔尊攘錄御建白御國議〕

一翰致拜啓候殘暑難堪御座候處愈御安寧珍重ニ存候然は兼々御承知之通京師事情實ニ切迫ニ及ひ其上將軍家ニも俄ニ御東下ニ相成加之馬關之騷亂等茂追々風説承之今後之形勢如何相成候哉實ニ難計殊ニ京師近來ニ至り候而は縉紳之殺害彼是混揺別而ハ中川宮　朝議御關係等茂御辭退に而御隱遁之御覺悟ニ相成候由彌增之困厄皇國治亂之境と日夜不堪憂惱唯々奉恐入候外無之候右樣之御時態ニ候得は最傍觀可致時ニ無之と存詰候就而は尙此上京師彌急迫之模樣次第致登京不顧駑鈍盡力致度と存候依而は區々之微衷今度家老初ニ委細相含貴邦ニ指出候間御聞取被下御同意ニも候ハ、御兩君共御出京相成萬事御相談被下報國悃忱相盡度奉存候御賢慮茂御座候ハ、渾而無御伏臓御示諭之程希望之至ニ御座候恐惶謹言

七月四日　認

松平越前守
松平春嶽

細川越中守様
長岡良之助様
玉机下

御端書之趣ハ時下御挨拶等之事ニ付略候事

七月晦日我藩は杵築藩の使者に答書を授く

〔文久三年機密間日記〕

松平但馬守様より之御使者ニ御答明日被仰進候間其方共儀御客屋ニ罷出可被申達候尤委細之儀者御書方承合可被相勤候以上

七月廿九日
月番御使者番也
岡　貞之助殿

奉行所

佐分利平次郎殿

右同斷被仰進候付岡貞之助佐分利平次郎御客屋に罷出相勤候樣尤委細之儀者御書方承合候樣及達候間此段藤本彌三郎に可被相知候以上

同日　　奉行所

御書方

御用人衆中

〔他國狀扣〕文久三年

一杵筑御家老中

七月廿九日

御狀致拜見候秋暑之砌各樣彌御堅固珍重存候然之此度越中守方に但馬守樣より御使者被差遣自然異船渡來之節御領分海岸御手廣防禦御手當向之被成候得共中務大輔樣之御在府御人數少旁被成御心配候間萬一非常之節者無腹臓心力を被添候樣且又於長州表異船打拂之儀に付小倉之混雜筋有之候處越中守に之間柄に茂候間取扱方御相談被仰遣候付而仰之趣等委曲被示聞通致承知各樣に茂彼是御厚配察存候右付而之越中守より御答被申述候通り非常之節之勿論模樣に應如何共相心得可申候得共領分茂場廣之海岸共上帝都御警衛等大造之事に付自然被屆兼候儀茂可有御座其段之御聞置被下度候將又長州表取扱方之儀之公武之御達筋御一途に出候樣不相成候而之即今見込之筋無之此節公武に被相伺候儀茂有之夫等之趣共御答被申述事御座候間御承知可被下候事躰茂彌切迫に相成實に憂念之次第に御座候此段御報爲可得御意如是御坐候恐惶謹言

〔一橋初來使一件、機密間日記〕文久三年八月以來

秋暑之砌彌御堅固珍里存候御領分海岸御手廣に付當節柄御手當向御不安心之儀に付非常之節心添爲御頼委細御使者を以被仰越右に付御土產御目錄之通被懸御意不淺忝存候非常之節は勿論模樣に應如何樣とも相心得可申候得共領分之儀も場廣之海岸共上帝都御警衛等大造之事に付自然屆兼候儀も可有之共段は御斷申述置候

別紙御答之趣

長州表夷船打拂之儀に付小笠原大膳大夫方より申入之趣不容易事柄深御心痛被成候間取扱方御相談之趣委細致承知候右付而ハ最前拙者に茂頼談筋有之自己之宿意に も候ハ、如何樣卒可致心配處長州者　勅諚を奉小倉者公義之御差圖を守旁方之趣意致違却候所より之混雜に候得は急度見込之筋も無之當春滯京中公武に致言上置候儀有之其後益切迫之事體相成候付而は存意之次第猶又此節申立天下之御政道一途に出各國之人心致一定候樣成丈盡力之筈候處右攘夷之御趣意重疊致疑惑候付差寄其儀より急に公武に相伺候間御差圖次第には兩國一和之儀も勿論取扱可申候得共即今之所に而は何分屆兼心外之至御座候御見込之筋茂有之候ハ、猶被仰越度存候

〔機密間日記〕文久三年

右之御答之七月晦日於御客屋御使者番より申演候事

七月某日本藩余田三右衛門は京摂間の探索に係る幕府の人材缺乏と薩州を襲撃せし英艦處分の失策及ひ京都に於ける諸藩攘夷論の眞相等を報告す

〔尊攘錄探索書〕文久三癸亥年

覺

一當時幕府之模樣俗論家起り正義家ハ退らる候勢に相成人才擧用之路絶候山勝麟太郎さま共外にも正義人才之唱有之候人柄之御擧用無之由に而麟太郎樣抔ハ追々閣老に茂建白筋又ハ論談等御座候得之毎度御同意には乍相成御取用ハ無御座由尤閣老かたも勝樣論談之節之毎茂閉口に相成候由に御座候

一薩州留守居被召出此節戰爭之儀曲サニ言上いたし候處大樹公重疊御滿足ニ被思召上候旨一橋公被仰渡候趣ニ而御役人衆方御達ニ相成候由然處薩州戰後英船七艘之横濱ニ乘廻し當時船作事最中ニ而幕府方何之御構茂無之由ニ付京都方御責付ニ可相成薩長を初其外列藩之議論愈以さし起り可申見込之由

一當時京都之事情列藩擄毒拒絶を唱候得共其實ハ難計只々當時之勢ニおされ朝廷に媚候而まげて攘夷を唱へ候へば先幕府を咎候より外無御座其末愈以公武之御間隔者彌增可申越前抔之丸之開國家と唱申候而一切不被容之勢ニ相成此上萬々一御上京ニ茂相成候ハヽ大津に人數被差向勢ニ而御座候間善惡共ニ建白之筋行レ候勢ニ而之無之時勢と見込申候

右之通見聞之次第ニ御座候以上

文久三也
七月

余田三右衛門

八月朔日我藩使者神谷矢拇肥前より歸る

〔小笠原備前日錄〕

八月朔日　晴

神谷矢拇、從肥前歸、肥老侯歸欲告其國議、使其臣欲謀之、故不至筑前、不得止反命、且携肥候父子之答書來、乃直出君前告之、有吉氏（城東侍座）、○會平埜氏、議國議行之模樣次第且發之寛急、至夜亥半而歸、

八月二日朝廷本藩士林藤次及ひ永島三平を召さる

〔京都返達御用狀控〕（文久三年）

八月二日　八月十日着

河口よ丁樣書

今日傳奏野宮宰相中將樣方御呼出ニ付藤本兎三郎參上之處御家來永島三平林藤次を急々被指登候樣難掌を以被仰聞候

右之御役所に達有之候付其筋より言上可有之候へとも爲御心得申進候以上

八月二日久留米藩使者を熊本に遣して豐前大里海防應援の命を受けたることを報じ且つ列藩一和公武合躰して攘夷の功を奏せんことを議る

〔越前外九藩へ御使者被進候一件〕（文久三年八月以來）

（八月二日參着、同三日口上取次）

御目錄

粉漬朱口魚　一桶

有馬中務大輔

寫

彌御安全被成御座珍重思召候然ハ今般豐前國大里表海防應援之儀被蒙　勅命候付而者乍微力早々人數差出候筈ニ御座候處自國之儀兼而海岸茂無之候得ハ是迄海防之器械等兵備手薄海門要衝之地防禦之儀當時御手當專務ニ御座候全躰攘夷之儀天下列藩一和之戮力ニ無之候而ハ却而　皇國之瑕瑾を重ね候儀必然之事ニ付何卒列藩一和　公武御合躰ニ而天下戮力之場ニ至候儀御賢慮茂有之間敷哉猶追々被仰談度此段以御使者被仰進候

一右本書ハ御用番に被差出直ニ差上ニ相成候由然處御番物ニ付而之御口上不相分御品差上之都合不宜候付左之引切書相添御用人迄差出候

有馬中務大輔樣方之御使者本庄仲太（公事奉行並添知行高二百石平組）に井上加左衛門應對仕候處別紙御口上書之趣申述且時候爲御見舞御目錄之通被進候事

一御答書草稿御家老衆方被相渡候由ニ而分職御用人方於御書方淸書致出來候樣被傳候付直ニ相認同人に差出候

上包　美濃紙上下折懸手扣と出來（此答書ハ八月七日奉行ヨリ渡ス）

彌御安全被成御座珍重思召候然ゝ今般大里表應援之儀被蒙　勅命早々御人數被指出筈御座候處是迄海防之器械等御手薄ニ付專其御手當有之全躰攘夷之儀列藩一和　公武御合體ニ而天下戮力之場ニ至不申候而ゝ却而　皇國之瑕瑾を重可申右付而御懸合之趣被成御承知至極御同意之筋ニ而既應援之儀ハ　公武に御窺書も被差出置引續　御合體等之儀可成丈御周旋之思召候條追而從是御相談之筋も可有之先一應之御答被仰進候

八月二日在京本藩重臣沼田勘解由は京都の事情を藩政府に報し建白中止藩兵東上自己西下等の件を通議す

〔文久三年元治元年自筆狀控〕

以別紙申達候當地之形勢朝夕打替彌以及切迫候付而ゝ書面ニ而ハ貫通難仕就而ハ先ツ古小路嘉右衛門に委曲申含先月廿五日中之急ニ而差立申候間追々着之上ゝ種々御配意可被下ゝ奉存候然處同廿七日之曉四條南御旅所ニ別紙寫之通板札を立東山高豪寺一圓燒拂候位ニ而全ク春嶽樣猶御出京之儀を爲支浪人躰之者仕業之由　公武御合躰等之事ハ只今先可被仰立哉之場合ニ無之無是非次第ニ御座候御地ゟ今一應御建白可被仰立哉之御模樣ニ御座候處爰許之事情右之通ニ而定し相違茂可仕哉左候得ゝ重疊御評議を被盡候上被仰下候共先ツ押付置候而爰許之事情御取遣仕東西御一致之上被仰立候樣之御運ニ而無御座候而ハ宜カル間敷哉自然度々之往返等ニ而際取候樣御座候而ハ極々御都合不宜候間片時茂早ク其邊之次第御談合仕篤ゝ貫通仕度懇願之事御座候

一坂崎忠左衛門以下殘片手出京之儀薩州一件ゟ斷茂可被仰立哉之儀先便被仰下候通ニ而其時分中々之御繁忙ニ而未タいつゟ共御決着ニ不被爲至候間不日ニ早打可被指立由其後晝夜奉待居候得共于今御便無之如何之御運ニ相成申たる哉此節無異儀被指登方ニ相成候へハ最前被仰立之通御名代衆初引拂候而子細無御座候處萬々一御備手御斷之埒ニ至候ハ、今迄之切組ゝハ表裏仕候付品能御聞濟之被仰立筋等御咽合之趣候含御席中ゟ御出京茂可被下哉然處前文之通御地之御評議ゝハ爰許之形勢段々相違仕居候樣相見譬御出京ニ相成候而茂猶又追々及御取遣不申而ハ難叶左樣ニ時日を移候場合ニ無御座候間若御出立無御座候ハ、暫ク御見合被下度是又御談合仕度奉存候右之通ニ而古小路嘉右衛門に委細申含置候得共御互ニ言上仕御談合茂不仕候而ハ貫徹難仕此儘被押移候而ハ大切之場合御國体ニ茂係り候樣之儀出來申間敷共更ニ不被考何分難安寢食候間內分三條樣に罷出貫通仕兼候稜々有之私儀暫御國許に罷下候儀相伺候處不苦旨御返答ニ而　朝廷之方ハ御差障無之候得共最前太守樣御下國之御時分爰許御家老衆詰込之儀付而被仰立置候御趣意且又兼而之御格ニ茂違候付一應御取遣之上　尊慮御伺被下御左右次第相心得可申處右之通延々ニ相成候而ハ此末之御運何分見亘付兼申候付尙此上急迫之場ニ至候ハ、直ニ罷立可申儀茂可有御座ゝ奉存候尤此表一人詰之儀ニゝ御座候得共御名代衆御奉行御目附抔に引返之處を以重疊申談前條之次第不得止事情ニ付迚茂右之通ふらてハ相成申間敷ゝ一決仕申候尤私儀猶又爰許に可被召仕哉否之儀ハ被仰付次第相心得可申候且又私出立之埒ニ相成候ハ、暫之間御奉行に御家老代役御目附に御奉行兼勤被仰付旨及達可申ゝ奉存候何分此儘難押移候間幸御地ゟ參居候飛脚番等に上々早打申付言上且爲可被成御心組茂得貴意置申候以上

八月二日

物　連　名　殿　　沼田勘解由

八月四日朝廷松平容保に破約攘夷の布告を促さる

〔文久三年尊攘錄探索書〕

去ル五月十日蠻夷拒絕之期限決定雖有之横濱箱館之兩港未止之趣如何思食候速ニ破約攘夷可有之候且長崎港拒絕之儀從　朝廷御沙汰候得共一同早々布告可有之　御沙汰之事

八月四日（一書ニ十四日とも認あり）　定功
會津中將殿　雅典

八月四日松平阿波守は攘夷監察使の令達にもとつき幕船を始めすへて異國形の船舶通航の節は豫報を得たき旨を幕府に申達す

〔文久三年　尊攘錄探索書〕

外夷攘斥之儀ニ付而之今般紀州加田ニ東園中將殿播州明石ニ四條侍從殿爲監察使下向夫方淡州ニ被取渡候趣ニ付時宜ニ寄打拂之儀も可有御坐旨先達而御屆仕候處淡路國ニ被取渡異國船ニ紛敷見屆難相定船之儀之已來無二念打拂候樣可仕旨被　仰渡候ニ付　公儀御船始異國船形之儀之通船之節前以端船ニ而相斷置候樣致度無左候而之及炮發候儀も可有之ニ付兼而此段御屆申達候以上

八月四日　松平阿波守
國元日付

八月四日米澤藩は姉小路暗殺嫌疑の囚人逃亡の者探索に關する我藩の配慮を謝し且つ彼藩主に對し責任解除の朝命ありし旨を報す

〔文久三年　京都返達御用狀控〕

細川越中守樣　上杉彈正大弼內
御留守居中樣　佐藤孫兵衛
小幡源吾

以手紙致啓上候然者御預之囚人探索之儀致御賴候處今日野宮樣ニ家來之者御呼出之上元より家來ニ御預之囚人之付探索方家來ニ相任せ彈正大弼儀ハ不及心配旨被仰渡候右ニ付是迄之不成容易御配慮被下候條忝次第被存候右一應之御禮御案內旁被申述候此段各樣迄宜得御意旨被申付如斯御座候以上

八月四日

八月五日日華門前に於て會津因州阿波米澤等諸藩兵の分列式を行ふ

〔文久三年　京都返達御用狀扣〕

（八月七日河口より送付之書中卷込）

八月五日日花御門前ニ而肥後守樣馬揃之次第

叡覽仮御殿西側中央南手仮館三拾間余其內ニ攝家始諸堂上方不殘御詰ニ相成御仮殿向側北手親兵警衛七八百人程候仮殿兩脇二百人計り其兩次側南手警衛阿波因州北手上杉備前始り己之刻先手鐵炮拾文目筒二番弓三番鉄中央肥後守樣騎馬ニ而甲黑鎧黑糸縅赤地錦陣羽折指物金蓮葉樣之もの十本程旗上下白紋付中黑一人之而持候五流旗本勢騎馬武者惣馬乘五拾騎之ゟ歩行武者何も茂日本具足付北手より操出し　叡覽前ニ而大將金采配振下知致候鐵炮相用候惣勢二千五六百人程未刻相濟申候退出之節御臺所御門より參內殿階下ニ御進尤甲冑之儘立帽子着ニ而御下座ニ相成居候處上樣出御拜領物鞍黃金三枚西之刻退座に相成申候

俄ニ御所望ニ而警衛被致居候因州樣阿波樣上杉樣も引續馬揃有之候事

但し前以傳奏衆より御內意御座候由

因州樣大体右同斷

相模守樣陣羽折紺羅紗癸紋付甲頭巾金采配指物無之小旗數多御座候惣勢陣笠火事羽織鐵炮打申候人數五百人計り申刻

相濟申候

阿　波　様

淡路守様蒲黄せいご火事羽織陣笠鐵炮鎗弓之無御座候事

小旗數多白地ニ紋付纏持せ人數五百人計り西上刻相濟申候

上　杉　様

彈正大弼様勢影ニ而裝束分り兼申候陣立三備ニ繰出し　叡覽前ニ而一文字ニ並申候其左右三拾目筒拾挺計り宛打出し七八度ニおよひ候處余り烈敷候故鵆飛鳥井殿直ニ大將ニ御逢被遊御斷ニ相成候由後陣謙信流トカ申陣立御見合ニ相成候と申事ニ御座候右人數三百人計り車備トカ申事ニ而相仕舞ニ成申候

右之陣立親兵ニ相尋申候處惣躰操懸りト相答申候

八月七日

八月五日我藩老臣小笠原備前越藩の副使に會見す

〔小笠原備前日錄〕

八月五日晴

酒井三岡、越前之副使也、今日來、外廳而逢之、

八月五日佐賀藩使者を熊本に遣して時局に關する我藩の交渉に答ふ

〔越前外九藩文久三年八月以來へ御使者被進候一件〕

演舌手覺

方今之事體ニ付最前御使者を以御談相成候次第者御尤存候得共御互様御周旋　御依頼之御手續も有之關東ニ御委任之儀　京都表御建白と申儀何分可有御座哉御申立振ニ寄り却而　公武御一和之御妨とも相成候而者寔以被爲恐入儀候歟而者　京都表之御都合　共御許様ニ者御聞得之趣も御座候半者得ト御承知被成度候條何卒委曲御示被下度右御都合次第猶又御考量之上御承合被成候儀も可有御座思召候

御使者

當頭詰役相談知行高六百五拾石　中　野　數　馬

上下拾五人

御家屋支配役中

松平肥前守様ゟ之御使者參着申出之趣有之拙者共内明日於御客屋口上取次且應對を茂致管候此段申達候以上

八月四日

八月六日越藩使節岡部豐後三岡八郎熊本を辭して薩摩に向ふ

〔小笠原備前日錄〕

八月六日陰

朝政府、酒井氏書至、岡部三岡兩氏、發於薩、酒井獨可受答書、云々、蓋豫窃以明日告　臺下欲見之故也、則尾藤氏以出政府、托之伺　旨、則爲故及返書、○本日、以烟草及干蝦、贈酒井十之丞、

八月七日朝廷本藩の献納米を免し和筒献上を命せらる

〔御内勅等書拔〕

三條様ゟ今七日御呼出ニ付藤本兎三郎罷出候處過日御願濟相成居候　御献納米ハ被成　御免和筒御献上ニ相成候様中納言様御沙汰之趣諸大夫村上右兵衛大尉を以被　仰聞候事

八月七日　　青地源右衛門

付札
本文御筒數之儀御内々相伺候處三百挺位ニ而可宜旨御沙汰ニ相成候事
以別紙申達候今日三條様ゟ御留守居御呼出ゝ付罷出候處最前御願濟之　御献米之被成御免和筒三百挺位御献上ニ相成候様別帋之通被仰聞候處六匁玉之火繩筒爰許ニ貳百挺之御備有之外様足輕等ニ御渡被置候を强而取集候ハヽ今五十挺計も可有之候得共右之内ニ之損筒茂可有之且追而ハ猶外様足輕等ニ御渡無之候而ハ相成不申候間都合百挺被指登候得ハ彼是可然候條御着熊之上早々共御取計有御座度奉存候此段爲可申達如是御座候以上

八月六日　　鎌田軍之助
沼田勘解由殿

右勘解由方ハ今朝出立廣吉半之允今夕出立ゝ而大坂ゟハ一所ニ相成候間右廣吉ニ白木文箱入ニ〆添狀等一同相渡候事

八月七日幕府軍艦旗の制を定む

〔文久三年御同席觸寫大目付様御廻狀并御書扣〕

御同席觸寫

板倉周防守殿御渡候御覺書寫壹通相達候間被得共意御同列中不殘様無遲滯早々可有通達候答之儀者先々從銘々不及挨拶各より松平對馬方ニ可被申聞候以上

八月七日　　大目付
南部美濃守殿
松平左兵衛督殿
右留守居

覺

御軍艦之儀者御國印白地日之丸之外白地中黑之旗常之大檣上ニ引上置候間此段向々ニ可被相觸候事

八月

八月七日藩主慶順及ひ長岡護美答書を松平春嶽父子に贈る

〔小笠原備前日錄〕

八月七日

越前前使酒井十之丞、以辰刻　臺下召之授答書、故予輩早朝、〇使酒井而花殿而所約乞密書、酒井與使令獨見、予走筆寫之、蓋越老公所建白之書寫也、

〔尊攘錄御建白御國議〕

華墨拜誦仕候愚御清祥被成御座珍重奉存候然者京師之事情益切迫ニ及候上將軍家俄ニ御東下加之長州之騷亂縉紳之殺害等實ニ皇國治亂之境ニ而最御傍觀可被成時ニ無之猶此上京師之模様次第御登京御盡力被成度御同意仕候ハヽ兩人共出京萬事御相談仕候様遠境態々御使者被差立御申含之趣をも具ニ致承知從來御心魂を被碎候儀無此上感佩仕且御厚意之至深辱奉存候當方ニ而も危急之形勢晝夜憂念ニ堪不申候間先般滯京中公武ニ言上仕置候趣意を纏乍不束皇國之御爲筋と心得候儀ハ何處々々迄も周旋仕度存立候へ共御在職中重疊御丹誠有之候而も難相整程之御事柄中々微力之及處ニ無御座依之薩筑を初近隣之諸大名存意之趣等承合候折柄前文御懇篤之預貴教不斗も御覺悟筋ニ致暗合大慶仕候而已ならす甚以心强奉依賴候條出京之上ハ猶更無御伏藏御差圖被下度幾重ニも奉願候委細者御家老初ニ家老共面談ニ及せ候付歸着之上御聞取可被下候恐惶謹言

八月　　長岡良之助

松平春嶽様
松平越前守様　　細川越中守

貴答（御端書略之）

八月七日在京長岡内膳は公武に對する我藩主の上書案を閲して朝旨に副はざるものと認め沼田勘解由に附して意見書を送り藩主の復考を希望す

〔尊攘錄御建白御國議〕

今般御差出ニ相成候筥之御親書當時京地之形勢ニ者御都合何程ニ可有御座哉自然者御國家御存亡之端ニ相成候も難量愚考仕候間今一應奉親尊慮候上ト乍恐手許ニ留置申候御指揮を猶豫仕候段者罪當萬死深奉恐入候得共不容易事件に付尚御復考被爲在候樣奉願候尤時處位ニ相叶候御所置者爰許ニ不被爲在御座候事に而貫通仕兼可申候間此節沼田勘解由より言上可仕候間其上ニ而茂同樣之御建議ニ被爲在候ハ重大之御事柄ニ付仰願日ハ乍恐被爲成御上京候歟又ハ何れそ被差登可被達尊慮を儀伏而奉希候頓首々々謹言

八月七日（端書ニ通及ひ沼田書翰共に七月廿六日の條に出つ）　長岡内膳

八月七日柳河藩使者を熊本に遣して時局に對する打合をなす

〔文久三年八月以來一橋初來使一件〕

（八月七日柳河藩使者大村鏋殿持參）

手扣

秋暑之砌ニ御座候處彌御堅固珍重存候方今不容易時勢ニ付何茂萬端預御示談度存候仍時候御見舞旁以使者申述候委細

ゝ使者に申含候

演舌聞取書

此節御使者柄之御主意ゝ當時不容易時勢彼是兼而御親睦之御譯柄ニ茂有之何分小藩微力ニ而ゝ何茂屆兼候間萬端何事ニよらす無御腹臓被遊御示談度此段此方樣京都に重役出張之模樣且又是ゝ先之御處置等此方樣ゟ茂被及御示談被下候樣ニ有之度御使者柄ゝ右等之事情第一之儀ニ付此處重疊相達候樣尤此節京師之變動ニ付而ハ弊藩丈相應之人數ゝ早速爲伺天機重役差登置此以後迎茂彌以公武之御指揮次第小藩相應之力を盡候國是ニ有之候間此方樣ゟ之御國是茂委細承り申度由申候事

八月七日　　志方司馬助
道家七郎右衛門

一立花飛彈守樣に之御答振左之通可被仰進哉

秋暑之砌彌御堅固珍重存候方今不容易時勢ニ付萬端被成御相談度時候御見舞旁預御使者殊御目錄（希代三百疋）之通被懸御意不淺忝存候從是茂何角及御相談申ニ而可有御座候且又御使演述之趣致承知右御答ゝ御使者に申含置候間御承知被下度此段御答申述候

八月八日我藩の在京探索生薩藩の堂上諸家出入の狀況を報す

〔尊攘錄探索書〕（文久三癸亥年）

（八月八日國友首藤草野聞取書の一節）

一薩州ゝ姉小路殿一條御不審未相霽當時不首尾ニ御座候處段々失意之堂上方近衛家二條家德大寺家九條家抔に取入り中川親王樣大原三位殿にも内々出入仕今出川屋敷等廣大ニ搆に此末如何挽回仕候哉も難計余程有遠略國柄と相見に申候

事

八月八日大村丹後守長崎總奉行に任せらる

〔文久三年四月より慶應元年迄 鵜崎長崎小倉返達御用狀抑〕

九月朔日　九月十一日着

匂坂より

長崎表（中略）大村様聞役ゟ奉札壹通則差進申候以上

匂坂平右衛門様

以手紙致啓上候丹後守儀去ル八日御老中御連名之以御奉書長崎奉行被　仰付候得共長崎惣奉行と可相心得旨被　仰出難有仕合被奉存候右爲御知貴所様迄宜得貴意旨被申付越如斯御座候以上

八月廿七日　　大村　觀負

猶以最前被申候通丹後守儀持疾兎角同篇ニ而于今出崎難相成候條若御歎御使者御祝儀物等之御沙汰も御座候ハヽ堅被及御斷候此段も宜得貴意旨被申付越候

八月十日將軍家茂親しく幕吏を引見して近々鎖港談判開始の旨を告ぐ

〔文久三年ゟ元治元年マテ 江戸返達御用狀控〕

八月十四日

藤本（藤本彌三郎）
松本（松本彦作）様　　本木

一昨十二日上意之趣有之候由ニ付同日立之御飛脚差延置段々探索方申談候得共今日迄茂聢相分り不申候別紙ハ御坊主より遣候由ニ付差進申候大廣間御席も同様歟と相考申候且上意後此節御呼登之御四家にハ一橋様より外ニ御讀聞せを有之候由ニ候得共是以相分り不申右ニ付而ハ御内々爲伺中根殿迄清田被相越方ニ咄合置申候南部衆返書格別之儀も無之候得共爲御見合差進申候右之通ニ付差延置候御飛脚ハ今日立ニ咄合申候右之趣追懸申進候以上

尚々去十日俄出御高家衆初ニ上意之趣御坊主ゟ遣候書付之趣ハ聢ト不致由ニ付差上ハ御見合可被下候以上

卷込寫八月十一日御坊主星野久民より於御城遣候書付寫

八月十日

一今夕七半時比俄ニ御黒書院ニ出御

右御目見上意有之

上意振

近々鎖港之儀取掛ニ付而何ゟも熟慮致し可申聞旨上意之由

高家　寺社奉行　詰合布衣以上　御役人

〔御内勅等書拔〕

上意振

不遠鎖港之應接爲取掛候付自然彼より拔爭端候ハヽ一同　皇國のゟゑ盡力防戰可致との上意之由

八月十日我藩は筑前の使者に答書を授け交渉の趣旨賛同の意を表す

〔尊攘錄御建白御國議〕

右（七月廿八日の條を參照せよ）筑前御使者名前　　川越又右衛門

右兩人右御口上手扣等持參片山多門應對いたし夫ゟ薩州へ罷越歸り懸御返事受取度由ニ而出立いたし候處八月八日薩州表御用向相仕舞熊本着いたし候付急ニ御書出候樣催促申出候付

（別段御答御口上等扣）

方今　皇國之勢ひ日ニ增切迫ニ及ひ候付彌以　公武御深實之御和合ニ相成攘夷一轍之御處置へ出四民安堵之御基本被爲立度被思召上此節御上京　叡慮猶又御窺　御爲筋御周旋被成候處ニ御決心之處夏以來御持病之御痼邪今以御甘不被成差向御旅行難被成候付爲御名代下野守樣近々被成御登京候由具ニ以御使者被仰進候趣越中守樣被成御承知既於此御方も其思食立ニ御座候段ゝ組御案內之通ニ而不計茂御主意暗合いたし別而御太慶之御事ニ御座候就而者不取敢御上京可有之處先御存意之大趣意重役を以被仰立無程御發途之筈ニ御座候委細之議者從是茂御使者を以猶可被仰進候

右一通

此節之思召立不容易御事件ニ候得共斯切迫之時勢ニ臨御傍觀被成候而者難被爲濟右付而往々御盡力之御深情を茂別段被仰進候趣委細被成御承知至極御同意思召候事ニ御座候勿論向後御存付之儀者猶更無御包藏可被仰合候間其御許樣より茂御同樣御心を被添候樣被成度思召候（八月十日於御客屋答相濟）

〔仝　書〕

華簡拜見仕候秋冷之候愈御清榮之由奉大賀候爾來小子より社御無音罷過恐縮不少奉存候然者此節御上京一條付而者追々御使者を以御國論之趣等巨細被示聞候通ニ御座候處近來ニ至天下之時情日ニ增及切迫候付御上京之儀御窺之處被逢叡聞神妙被　思召候付早々御上京被成候樣傳奏より之御書相達候由旁以御發途御取急之由御執掌之程奉想像候島津三郎殿ニも被仰合置候付三藩一同上京每事御打合眞實公武之御爲筋御立入御心力之限御周旋被成度候間小子ニ茂一同上京いたし候樣御紙表之趣具ニ承知仕候小子儀も兼而其存念ニ罷在就中去ル十八日之曉より京地異變之樣子も彼地ニ差出置候家來共より申越候付而は不取敢發足可仕處小子家督後も聢と在國不仕候付而ハ領內場廣之海岸防禦之手當等相整居不申內既ニ隣國へ兵端を開候付而は多端之指揮筋行屆兼可申歟と家來共擧而懇願之趣も有之候付既ニ舍弟長岡澄之助儀爲名代上京申付置猶長岡良之助儀も一同差登候筈ニ御座候間御上京之上は彌以聊無御伏臓御教示被下何事も御一致之運ひニいたし度儀は素より所希ニ御座候此節は一大事之御周旋ニ前以內實之趣意篤と被成御承知度幸鹿兒島へも右之趣意被仰入候付御家老立花山城を被差遣歸路藝藩へも御差越之筈ニ付而會いたし御國論之趣も承り愚存之次第ハ申聞候樣具ニ承知仕候惣躰之國議ハ何そ相替候儀も無之候得共山城儀近々參着可致候間委細其節可及面晤奉存候將又時下爲御見舞何寄之兩品御惠贈被下不淺忝奉存候折角上京御懇切ニ御進メ被下候處前條之次第素懷ニ背候儀不惡御汲取可被下候書外は後音ニ讓右貴答迄匆々如此御座候恐々頓首

八月

下　野　守　樣　　越　中　守

猶々申候御端書之趣孰れも忝次第ニ奉存候段申出候本文之趣等尊大人樣へも宜敷御鶴聲奉仰候恠々も小子上京出來兼候儀貴教ニ逸別而久々ニ拜顏と相樂居候儀も無ニ成殘心此事ニ奉存候以上

八月十日我藩老臣小笠原備前西肥の使者中野數馬を引見して彼藩國議のある所を聞く

〔小笠原備前日錄〕

八月十日

肥前侯使節永埜數馬（中賊ヵ）、招予邸、乞其密話使詳、不告國議、交君話及評論、爲己之見而話之、米田氏、城東有吉氏、及奉行官荒木茜四郎、井上嘉左衛門來、話終而饗應之、殆及三更歸

〔尊攘錄御建白御國議〕

此一通ハ備前殿書取也

八月十日西肥中野數馬話之趣

西肥ニてハ屹ト御國議御一定ニ無之乍然粗閑叟様御話等相伺且其身抔見込評論之趣ニ而申候大趣意元來攘夷之儀ハ年來之　叡念被爲在日本ニ而ハ夷狄禽獸同前ニ存候事に而候得ハ一心一同ニ候ハヽ攘夷之　思召も御尤ニ而既ニ昨春此方様抔御共々御上京御周旋被成候も攘夷御遵奉之儀ニ而方今如此切迫之時躰ニ相成候も基候所ハ此所より起り候而關東に而御遵奉之上拒絶期限も五月十日と御奏聞天下ニ御布告ニ相成候上ハ屹ト御見込も有之候上之儀ニ可有之筋ニ而加之將軍家御一人ニても攘夷可被成旨も御受被仰上候程之末是迄御延引之儀者如何之御事ニ候哉先其旨御伺ニも相成可申筋と相考候固より今日之勢攘夷ハ不可然共元來攘夷之御趣意は共々御遵奉御周旋之末前條通將軍家之御都合も有之候處より之御行違紛雜候へハ此筋を以被仰立候ハヽ關東ニ如何様と歟御模様可有之若枉而　朝命之重ニよつて御請にも相成候ハヽ其段ハ御斷之御手續ニ至明白ニ御見込ハ被仰立諸侯伯を關東へ召候而得斗御相談も有之様之御運ひニも可有之哉假令ハ父子之間隔混雜ニ而候ハヽ先其子より手を付可申歟殊ニ攘夷ハ不可然抔被仰立京之御述白等ハ何程ニ可有之哉前條之通一家之混雜に而も取扱候ニ段々混雜いたし居候を取扱候而扱崩候様ニ而は無詮次第却而禍を益シ不可然歟御大藩御押出ニ候ハヽ天下之人目を注キ居可申然ルニ被仰立も立兼御出京ニ而も直ニ關東に御出之御都合共相成或ハ御國へ御下り共相成候而ハ誠ニ無詮次第ニ可有之御成功之程八分位之御見亘ニ而ハ如何可有之哉況や中間ニ妨候處有物ニ候ハヽ却而其處ニ御手付候ハヽ案外スラリト治も付可申哉三條様など當時專ら御主立之御様子又ハ此方様選士之事抔京ニ而閑叟様御話之趣も粗伺居候由ニ而其意味を含候様之話も有之候元來天ニ二日なし當今之有様は西肥ニ而も彼是と御案既ニ御使者をも可被差越處御使者被進候に付先精敷御國議相伺申上候ハヽ猶被仰遣儀も可有之尚又推返シ罷出可申旨

八月十一日本藩山川龜三郎森尾龍彦等に砲器製造係等を命す

〔文久三年機密問日記〕

其方組山川岩之助三男山川龜三郎儀池部啓太に差添西洋法銃隊稽古教示方并大小炮製造御用懸被仰付候條此段可被達候以上

八月十一日　　奉行所

津田三十郎殿

覺

御勘定方御奉行に

右之大小炮製造御用懸被仰付候條此段可被達候以上

八月十一日　　康三郎二男　森尾龍彦

山川岩之助三男山川龜三郎儀其元に差添西洋法銃隊稽古教示方被仰付旨及御達候間左様可有御心得旨候以上

八月十一日　　御奉行中

池部啓太殿

〔自文久三年ヨリ元治元年迄筆狀〕

八月十日在京本藩奉行鎌田軍之助は藩政府に對し此際愍に公武合躰を主張するは禍を招くの恐あり若し之を遂行せんと欲せは兵力を擁する必要あらんと報告す

一筆啓上仕候御地之事情爰許に篤と貫兼何角ニ喰違候事而已有之東西一致ニ無御座候而者難相濟旁沼田勘解由方去ル七日出立ニ相成候間着之上諸事御承知可被下と奉存候然處探索として被指出置候小篠熊雄寺亀太門大里八左衛門一昨日致着京御國議之次第相伺居候丈ケ申出承知仕候勿論公武御合体ふらてハ可相濟樣茂無御座候得ハ其御建白外有之間敷と申御決議ニ御座候處爰許之形勢中々六ケ敷右御建白御席中樣内御持參ニ而御出京其御筋ニ被爲成御差出候御都合ニ而ハ却而禍を被遊御招候ハ必定其可申位之場合ニ而何分爰許ニ而ハ見込付兼申候尤御仕遂有無ハ天ニ被任是非其御合躰之儀御國家ニ被爲換候而茂被遊御周旋候御覺悟被爲在候ハヽ大勢之御人數御引連御登京不被爲在候而ハ迎茂御手數迄ニ相成候而已ふらす却而御爲ニ宜カル間敷右之御覺悟何程ニ被爲在候哉何樣延々ニ相成候而ハ相成不申候間私儀急速ニ御地に被差越候樣との儀態雄列ゟ内意相達候得共當時御代役を茂相勤逃し候儀ハ難相成御名代衆初段々論談之上是迄滯京罷在候國友半右衛門幷右熊雄兩人早打ニ而今日爰許差立候間委曲之儀ハ直と言上可仕と奉存候此段爲可申達如是御座候恐々謹言

八月十一日　　鎌田軍之助

御家老
御中老　殿

八月十一日横井平四郎越前福井を發して熊本に歸る

〔續再夢紀事〕

同日(十一日)横井平四郎福井を發して熊本に歸る（十三日三國を開帆して十九日長崎に達し夫より熊本に着せりとそ）去る安政五年聘用せられし以來中將公少將公賓師の禮を執り藩政の顧問に宛られ其信用大かたふらさりしか此程本多松平を始要路の輩數名の職を解かれけれは横井ハ事の爰に在りしを見て深く慨嘆し最早滯留すへきにあらすとて俄かに暇を賜ハらんことを請ひけれと兩公ハ容易く許されさりしか猶思ひ止まらす再三懇願に及ひし故止を得す其請を許さるゝ事となれりさて去年横井か江戸に至りて刺客の難に遇ひし時其席を避けし事のありしを熊本藩にて武士道を缺たる擧動なりとて重き譴責あるへき由兼て聞へてありけるか兩公には横井かさる難に遇ひしハ元來國事に關して盡力の廉ありし爲め反對の意見を懷ける輩より暴行を加へんとせしものなれは尋常の武士道を缺たるものと同視すへきにあらす況や本藩へ聘用以來前後少からさる功勞ある事なれは默止すへきにあらすとて爰に岡部豐後等を熊本に遣はされし時其事實を述へしめ且其處分を寛恕せられん事を乞はしめられてありけれと未た其復命を聞かれさる程に今度卒然横井か熊本に歸る事となりし故特に榊原幸八平瀨儀作末松覺兵衛海福雪を使介に宛横井とゝもに熊本に發遣して多年横井を借用せられし謝辭を述へしめ且更に其處分を寛恕せられん事を乞ハしめられたり此時兩公より熊本侯へ遣はされし書翰左の如し（據列唐桑秘筐癸亥秘記）（書翰は八月廿五日の條に出つ）

〔永懷錄〕

一書拜呈仕候秋冷之砌愈御安康に被勤務珍重の至に奉存候就は御國許大變動に就ては私事も御暇奉希今日出立仕候海路とても御逢申事は出來不申候故心事聊拜呈仕候

天下の變動不遠事にて其節ニ臨み候へは人材御用ひ無之ては難叶は申に不及候

老公樣にも初發より其思召は被爲在候事にて私も御直に奉仕候即今の勢御國政向は如何にうち替り候とも天下に對し候へば誠に少々の事柄に候へば何もかも御かんにん被成從容と御勤聊たり共不平等の御事無御座樣萬々奉希候左候へば其變に臨み急斗御手段御盡力之被成樣可有御座は相違無御座此外拜呈申義は無之候吳々も從容の二字御心得被成候樣奉存候此段御別に拜呈餘は何も大略仕候以上

八月十一日　　小楠拜

岡部大夫机下

拜啓仕候殘暑難凌候處益御清榮被成御起居奉大賀候過日は先大人御祭辭並ニ維新前御往復の書翰御示被下御勳績を追想し轉々感歎に不堪奉存候就中小楠より贈呈の一書は憶ふに文久三年將軍上洛中に係り當時大樹公攘夷の勅命を奉じたるも之を實行するの途なく一橋公後見職を辭し春嶽公亦總裁職を辭し國に就かれ内公武の確執あり外列國の威迫あり國勢の窮縮實に其極に達せり茲に於て越前の藩議老公及當公を奉じ擧藩上京天下公論に訴へて攘夷の問題を解決し又國政の統一を圖らん爲に大權を朝廷に收め天下の人材を登用し共和一致の基を立つべしと云ふに一決し加賀肥後薩摩等の友藩に特使を派し協力を求めたり由利子爵の祭事中君が先考豐後氏春嶽公の内旨を受け肥後薩摩の兩藩に使し國事を圖りしことあり是實に維新鴻業を爲しゝものと云へるは卽ち此時の事情を指すものなり不幸にして藩議一變し大事將さに成らんとして敗れしも若し然らずして其大事果して決行せられしならんには維新の鴻業は蓋し實際よりも五箇年の以前に成りしならん乃ち志士の憤慨想見すへきに非ずや小楠の書中事の破れたるを憤らす從容時機を待つべしと云ふもの蓋學意の存する所にして亦當時の光景殆と眼之を見るが如し然れとも當時越藩の提案は卽ち後年維新星謨の骨子なり後世の史家必ず因緣の在る所を明にするの日あるべし

明治三十九年九月二日

岡部廣様　梧右

横井時雄

八月十二日我藩答書を佐賀藩の使者に授け公武周旋に關し爲さんと欲する所を告く

〔小笠原備前日錄〕

八月十二日

井上加左衛門、應對西肥使節、而來逢其密話、且井上演述之書、彼有所乞、爲省文、其文西肥之不國議、一己之見也、故乞省、予與井上斗直、致之於書記官長藤本彌三郎、急改之省之、以明日辰牌及今夜中返之〇入夜藤本答書來、又ハノ意ナラシ

〔文久三年八月以來越前外九藩へ御使者被進候一件〕（八月十二日御奉行ゟ肥前使者へ御答振）

御口上手扣

方今之事躰ニ付而御處置筋之儀被及御相談候通候處京都表御建白ゝ中儀御申立振ニ寄却而　公武御一和之御妨と茂相成候而者寔以被爲恐入儀ニ付此御方ニ御聞得之趣茂有之候ハヽ猶又御考量之上御打合被成候儀茂可有御座思召之段被成御承知御心添之趣深忝思召候右付而之又々御評議を可被遂處最前御使者被差立候後京師を初長州小倉其餘一体之事情種々相聞候趣有之何茂切迫ニ差臨候ゝ申内最京都表之形勢重疊御案勞之筋有之片時茂御傍觀之成候而之屹ト難相濟旨御家中一統より申出於越中守様茂從來右之御趣意ニ而何分御猶豫之場合ニ無之候間先重役を以御存意之大趣意公武に被仰立追而御登京　叡慮之御深旨御窺之上御模様ニ應關東ニ茂御越可被成處猶往々可被仰合候條乍此上萬端無御伏藏御心添被進候様思召候

八月十三日傳奏野宮定功等は攘夷祈願の爲め大和に行幸あり尋て親征の軍議を開き且つ神宮にも參拜あるべき旨の勅諚を傳ふ尋て因州備前阿波米澤の四藩親征猶豫の請願をなす

〔尊攘錄皇武令〕

今度爲攘夷御祈願大和國　行幸　神武帝山陵春日社等ニ　御拜暫御逗留　御親征軍議被爲在其上　神宮　行幸之事

右之通被　仰出候間爲心得申入候事

八月十三日

野々宮
飛鳥井

〔文久三癸亥年 尊攘錄探索書〕

（京都より探索通信）

八月廿六日承込

一八月十三日春日より伊勢　御幸被仰出伊勢路ニおゐて長州勢御警衛致し直ニ關東御下向横濱攘夷を名目として幕府御親征之御結構有之候處全主上之思召ニ而無之關東御親征長州并國事方ゟ迫り甚御憂苦被遊俄ニ會津侯ゟ急參内被仰付候由主上御直命ニ而全關東御征伐之思召無之國事職長州ニ御迫り之旨勅諚有之會津侯ゟ所置被仰付候右ニ付直ニ勅命之趣を以去ル十八日三條殿始國事方一同參内被差留長州家老益田彈正壹萬余之勢を以境町御門警衛罷在候處ゟ可引取旨申達候處不聞入して返而諸方之浪士俄ニ呼集候由然處柳原殿勅使として是非ニ引拂可申旨勅諚有之無余儀右彈正京地引拂申候由會津侯ニ之五畿北陸之諸侯ゟ勅命ニ相成候由右ニ付越前侯を始追々上京警衛有之候由彌以長州朝敵之旨勅諚被仰出候趣也

一右之趣會津侯早打十八日京地出立八月廿二日夜江戸着即刻御黒書院於御下段將軍家御直ニ御返答直ニ御佩刀被爲取會津侯被下旨早打之者ゟ御直ニ御渡有之由雅樂頭殿御上京之右一條之由來月朔日出京之由申候

一右引續將軍家御上洛可被仰出候よし共上朝敵之長州征伐可被仰出とのよし

一右一件ニ付尾張大納言殿備前侯阿州侯等上京有之候由

〔轟木武兵衛引取書〕

却說右一揆之風聞京中一旦者餘程騷々敷罷在候内大和行幸之被仰出有之候處備前侯阿州世子因州世子御申談ニ而御參内ニ相成大和　行幸之儀元來關東ヨリ攘夷之御請有之候得者夫等之埒ニ被爲及間敷候處右之　御請不被爲出來候處ヨリ　親征又者　行幸等之御運ニ相成候間此節　行幸之儀暫　御見合被成下候者三侯直ニ江戸ニ御下ニ而是非共鎖港之御談合ニ相成可申夫ニ而モ　御請不被爲出來候者共節者　將軍家　御見放ニ相成候而モ致方無之三侯共御親藩之事ニ被爲在候間三侯ニ被爲對　行幸御猶豫御願ニ相成候段被仰立候處　主上殊之外被遊　御逆鱗玉座ヲ被爲立與エ被爲入候旨ニ而三侯共ニ不怪御恐入ニ而關東エ御下モ不被爲叶京都中ニ而御盡力モ不被爲出來御場合ニ相成御三方共暫御引入ニ相成居候間阿州留守居新與市郎ト申者外ニ五六輩同道武兵衛下宿ニ參前文之次第相噺武兵衛ヨリ傳奏議奏之方ニ御斷申入第一三條樣エ御斷申上呉候者　朝廷之御向モ相直リ可申段相頼候儀有之候内野々宮樣諸太夫ヨリ武兵衛儀頓而致驚愕候程之御觸出可有之段相噺候間定而　行幸之事ニ而可有之ト相察居鼎藏儀者前段姉小路樣御一件御吟味之方者御免ニ相成專ラ　行幸之方ニ致周旋居武兵衛儀者矢張右御吟味ニ罷出居候

〔佐々文書〕

○八月十二日朝廷ヨリ被仰出之大意

大和國行幸神武帝陵ニ御拜同國春日社ニ御參詣云々（八月十三日の條に野宮飛鳥井兩傳奏より示達の正文あり故にこゝに略之）

○右ニ付同十四五六日比因州備州阿州米澤推而參内奉拜天顔言上之趣

此節被　仰出候御親征之儀ハ幕府速ニ攘夷不仕候ニ依而之御儀ニ御さ候へハ乍恐　御尤之御儀ニ奉存候然處武臣雁相立儀ニ御座候間今暫御猶豫被遊被下候樣ニ奉願上候左候ハヽ此四人明日ゟ直ニ關東ニ下向仕候而將軍家ニ攘夷爲致可申萬一幕府承知不仕節ハ臣等直ニ横濱ニ赴攘夷可仕と申上候處

其通ニ致候ハヽ御滿足ニ被思召上ニ依而直ニ關東下向いたし其通りニ致候へと之御諚也

然處事實之上ニ之糟ヅマリ出來申候故又例之通り器械之論抔ニ及ヒ色々と逃辭ヲ巧ミ其内ニハ段々輕蔑仕候事等も相認ゑ候由

其後因州も引入ニ相成候由阿波も引入ニ相成候由阿波ハ元來スカサレ而被引込候由ニ而右ハ本心ニ而ハ無之由跡ニ而

大分困りニ相成候由米澤も同様（以下は十八日の條に出つ）

八月十三日幕府は實名俗名ともに今上の御諱字を憚るべき旨を達す

〔文久三年御同席觸寫並大目付様御廻狀寫〕

（八月十三日板倉周防守渡大目付より我藩外八藩留守居宛廻狀）

大　目　付ゟ

當今御諱字之儀以來俗名實名共相憚候様可仕候尤當時名乗候分ハ相改候様可被致候

右之趣万石以上以下之面々被可被相觸候

八　月

八月十三日薩藩の内使藤井良藏等熊本に來る

〔小笠原備前日錄〕

八月十三日　陰　夕霽　少雨

與書於井上加左衛門、昨夜以所改之書、朝花殿、○召三老及予於披雲閣、出京決、澄公子頻促建白之艸書、予亦乞良公子、欲與書於三條卿、而返所出之選士令交代之草書、諸之、○今日薩之内使藤井良藏外一人來、乞逢長谷川仁右衛門、蓋長谷川曾以使而至薩也、

八月十四日朝廷大和行幸親征準備の爲め諸藩の志士を擇み之れに出仕を命せらる

〔公用雜記〕

筑前平野二郎、久留米水野丹後、木村三郎、池尻茂右衛門、肥後宮部鼎藏、山田十郎、加屋榮太、長州益田右衛門介、桂小五郎、久坂義助、中村九郎、津和野福羽文三郎、土州土方楠左衛門、

〔防長回天史〕

毛利氏の藩記に依るに朝廷眞木和泉に命じ肥後土州久留米長州の四藩より各數人を擇で親征の準備調査を命ず是に於て肥後より宮部鼎藏久留米より眞木和泉長藩より山田亦助久坂義助を出す三條東久世萬里小路烏丸の四卿學習院に出でゝ是等藩士と議し左の諸項を調査すと云ふ

一御守衛之事　一御休泊之事　一御納戸方之事　一人夫掛之事　一御用途之事　一在京兵數取調之事　一監國之事

八月十四日幕府は天草に異船渡來の節警衛として我藩の兵を出すべき旨を令達す

〔文久三年日記〕

天草郡御警衛之儀ニ付於江戸八月十四日外國御用御月番井上河内守様より御渡之御書付

細川越中守

西國郡代屋代增之助支配所肥後國天草郡ニ異國船渡來之節固人數差出方之儀松平主殿頭相心得罷在候處此度被成御免候天草郡之儀ゑ共方領分ニ接候場所ニ付猶又以後御警衛相心得增之助より相達次第人數差出候様可被致候

文久三年四月ゟ鶴崎長崎小倉返達御用狀控〕

九月七日　十一日着

匂坂より

島原様聞役ゟ廻達有之候御書付寫一通則差進申候以上

以廻狀致啓上候各様彌御堅勝被成御勤珍重奉存候然ゑ西國御郡代屋代增之助様御支配所肥後國天草郡ニ異國船渡來之

節固人數差出方之儀以後細川越中守様に被仰付候間主殿頭儀ゑ被成御免候旨八月十四日井上河内守様より留守居御呼出被仰渡候右之段服部長門守様に被申伸候付今日私相勤申候此段爲御知乍略儀以一紙如斯御座候以上

九月七日　　土橋麻右衛門

八月十四日在京本藩奉行鎌田軍之助書を藩政府に贈り藩兵上京の急務なる所以をのへ且つ藩主若くは連枝の親しく上京して公武一和の爲めに斡旋の勞をとらんことを請ふ

〔自筆狀扣〕（自文久三年至元治元年）

以別紙申達候御備手片手出立延引に付而ハ先達而三條様に御名代衆被罷出御國御繁雜之譯を以暫延引可仕との趣程能被申入置候處右御備手早々被指登方ニ被成御決着候間不日ニ出立之筈ニ付是迄延引之次第ハ三條様初其筋に都合能申入之儀取計候様先便被仰下候因之早速夫々手數仕候處存之外速ニ出立有之候様相成御太慶ニ思召屈指被成御待請との御事ニ御座候只今船中ニ而茂可有之哉不遠着京之上ハ御名代衆引拂之都合等專ら申談仕居申候右之通至極之御都合ニ候處萬々一此上出立延引ニ共相成候様御座候而ハ御名代衆初實ニ當惑至極ニ而滯京罷在候儀ゑ如何躰ニ茂不落着之仕合御座候勿論跡事ニ而ゑ無用之手數と罷成可申候得共甚掛念之餘り得貴慮申候間心中御汲取可被下候以上

八月十四日　　鎌田軍之助

御家老
御中老　殿

以別紙申達候去ル十一日佐野亥一郎爰許着仕御國議付而御用番様ゟ御演達之趣且同役中ゟ茂同様ニ而其段夫々承知仕候然處爰許之事躰ケ様ニ切迫ニ相成申候而ゑ公武御一和之儀被仰立候外有御座間敷是迄朝廷之御都合宜き様ニとの御運ニ而御座候處從是ハ前條之處ニ御腰を被爲居候付何茂無御頓着此節先御伺書被指出引續御隣藩被仰合御建白被爲在候付御席中様之内ゟ御持參被爲成筈ニ候間私共ニ茂共心得罷在候様との御含之旨御座候處此表之形勢ハ先日沼田勘解由方罷下候付定而爲被成御承知と奉存候且又其後小篠熊雄列三人探索として登京仕御國議之大略相咄申候付猶御許に貫通仕可申たゑ爰許に當時迄被指置候國友半右衛門右熊雄同道爲致去ル十一日差立置申候付從是茂御承知被爲成たるゝ奉存候然處尙篤と勘考仕候得ゑ折角御國議茂相立申候儀を爰許事躰六ケ敷と迄申上候而ハ尊慮之旨を茂被爲替候御儀ニ共ハ被爲在間敷哉若左様ニ茂罷成候而ハ誠ニ以心痛至極無此上奉恐入候得共是迄之次第ハ浮浪之徒愈以所々に周旋仕候由ニ而大分大勢之徒黨之哉ニ承リ居共上久留米水天宮社司牧和泉等學修所（習カマヽ）に日勤仕候而當時專ら朝廷ゟ御用ヒニ茂相成申候由ニ承リ込居申候得ゑ追々奉申上置候通迎茂御隣藩之御方々様御一致に而大勢之御人數被召連太守様被遊御周旋候歟又ゑ宮内御二方様之御内御席中様御差添御上京御周旋不被爲成候者而ハ中々御成功之程ハ何程之御儀ニ可被爲在哉若左様ニ無之御席中様まて御上京御建白ゝ申候儀ハ一切見込付兼申候乍併御國許之御居りハ乍恐如何程之御差入りニ被爲在候歟何分ニ茂是迄之見込ハ大略前段之通ニ而御模様ニ應申候而ハ如何様ニ茂相心得申候儀ハ當然ニ奉存候得共當春以來且御引拂後ゟ之件々觀念仕候得ゑ何分ニ茂亥一郎迄被仰聞候御演達之儀ゑ直ニ御受ゑ難奉申上奉存候間何卒私儀至急ニ交代被仰付罷下候上篤と之御治定奉敬承候而御受奉申上度乍恐奉存候尤私一己之見込迄ニ茂無御座御名代衆初爰許詰合之御役々同意御座候間事情何卒御汲取被成下候様奉伏願候此段爲可申達早打を以如斯御座候以上

月日　　右同　充

八月十四日本藩井上加左衛門長谷川仁右衛門薩藩の使者に會して其口濱書を受く

〔小笠原備前日錄〕

文久三年　　右同

八月十四日

坂崎氏來話示其隊下之一件○長谷川仁右衛門來、以應對薩使、粗問其話說之事、○井上加左衛門、長谷川與共、應接薩密使藤井良藏、波江田某、○薩使所出之口述書、米田氏呈之於　臺下、暫而以大木下賜之、○退朝、予携右之書、呈兩公子而歸、此回之事、限人話之、欲密之、

〔上書寫〕

（十四日提出の口演書）

方今皇國之形勢日增相迫公武之御間判然御確執之姿に相成此末之處不容易御大事と越中守樣深御心痛被爲在不被堪御傍觀有志之諸藩合從いたし御上京之上一層之御盡力被成度被仰進候趣修理大夫樣三郎樣御同意至極に被思召期日御一定之上は御一門方重役之内より上京可被添御徵志被仰進置候得共　朝廷頃日之形勢彌增御危急被爲惱　宸襟候段御内々被成御承知實に御大事此に窮候儀と被思召御默止難被成候間三郎樣御上京平日之御趣意通公武御一和之基本十分御盡力被成度御決心に付猶又御話合期日等御一定之ため御使者を以被仰進候也

八月十四日侍從中山忠光池内藏太藤本津之助吉村寅太郎等に擁せられて大和天之川に一揆を起す

〔轟木武兵衛引取書〕

其比ニ至　雅陽宮樣者御引入近衛樣德大寺樣其外御同腹之御方々追々近衛樣御別業ニ御打寄有之會津其間ニ致周旋薩州者九門内通行被差留不穩形勢ニ罷成其砌大和天之川ニ者中山侍從ヲ大將ニ押立池内藏太藤本徹石吉村虎太郎ト申者抔巨魁ニ而一揆ヲ企騷動差起候儀有之右侍從者元來堂上方ニ而者珍敷激烈家ニ而今日堂上ニ而因循之聞有之候人躰ヲ聞捨ニ致置候儀激烈黨兼而之論ニハ似合不申其方共討取不申候者自身討取可申候間致助力呉候樣抔被申聞候事モ有之孰モ夫ハ匹夫之仕業ニ而大將之所爲ニ無之抔申相留候位之御方ニ而前文吉村虎太郎ト申者ハ土州村庄屋之子ニ而若年ヨリ少々才覺有之先年國許致脫走京地ニ入込居候由之處近比金子爲才覺若黨鎗持召連大坂ニ下り法外相働候事有之土州ヨリモ餘り不都合之仕形ニ付見遁モ成兼抑捕候手段ニ及候處進退窮候處ヨリ侍從エ相迫天之川一揆ヲ企候由且又其外近江之者ノ由六角權太夫ト申者兼而近江者要害之地故萬一之節者　鳳輦ヲ奪取近江エ奉移候抔申居候由此者モ侍從ヲ相勸侍從者元來前文之通之御方ニ付勿論無二意同意ニ相成右ハ不意ニ差起候事柄ニ而右與黨之面々ハ激烈黨内ニモ上中下有之　足利將軍之御像ヲ奉誅或ハ春岳樣御下宿向臺寺ニ相定候ヲ憤り燒候樣成事ヲ致シ尤甚敷激烈黨ニ而頭ニ水之一合モ無之刀之柄ヲ長ク差シ月代ヲ狹ク剃衣裳之襟ニ報國盡忠抔書記居候者共之所爲ニ而長州土州ヲ初藩士體之者ハ一人モ居不申故ニ右一揆一件長州人モ初之程者一向存不申由其砌段々武器被盜取致立腹居武兵衛抔モ同樣一向存不申跡達而承候得者前文之通ニ而候處併長州人之内ニハ右一揆ニ加候族モ爲有之哉天之川沒落致シ右侍從者大坂之樣ニ潛逃ニ相成長州屋敷エ暫圍置夫ヨリ長持ニ入レ竊ニ山陰石州之樣ニ落行ニ相成候由

八月十五日幕府は京都江戸大坂及び諸國海岸防禦に關し諸藩の意見を諮問す

〔文久三年御同席觸寫大目付樣御廻狀並御書扣〕

御同席觸寫

京都江戸大坂并其外國々海岸等之御固當時被相心得候儀兩三日中取調御城拙者共迄可被差出候依之申達候以上

八月十五日

松平大和守殿　留守居　新庄右近

杉浦正一郎

追啓御同席中にも通達有之且御徒目付當番所迄可被相返候以上

八月十五日藩主慶順親しく弟長岡護久に上京を命す

〔小笠原備前日錄〕

八月十五日

朝當直也○此回上京之事、今日公然、　臺下直命澄公子委任○書公之建白草稿

八月十五日藩主慶順書を松平春嶽父子に贈り曩に其協商に答へたりと雖も爾後時勢の轉變は姑く自己の上京を許さゞる事情あるを以て弟護久を代理として上京せしむべき旨を通告す

〔尊攘錄御建白御國議〕

一翰拜啓仕候日を追秋冷相增候へ共各位益御清福御消光可被成珍重之至奉存候然は方今切迫之事躰ニ付而先日ハ御家老岡部豐後列遠境被差越御存意之次第且御教示之趣共具ニ致承知一ト通之貴答ハ酒井十之允ニ相渡猶家老共より委敷咄合せ置候間究而御承知可被下奉存候右之御會釋ハ申迄も無御座爾來當方覺悟之有樣をも爲可達貴聽不取敢使節差立候筈處其後京師之時情愈以六ヶ敷相成同所蹈通尊藩ニ致往來候而ハ如何樣ニ相響キ混雜引越候哉も難計所詮御双方とも皇國之御爲ニ相成候儀大趣意ニ付態と差扣不能其儀候條幾重ニも御海量可被下候左候へは私儀乍不及早々上京いたし成丈盡力可仕處既ニ於隣藩兵端相開又候外寇必定ニ可有之此砌領内人氣之動搖海岸ハ勿論天草表之手當等多端之指揮筋も有之藩屏之任何分迦出來兼候間弟長岡澄之助儀爲名代近々出京仕せ周旋筋等都而委任申付候間御會同之上ハ萬端被添御心被下候樣伏而奉願候且又最前良之助ニ茂致出京候樣被仰下候得共此節ハ澄之助念願之趣も有之前條之通候間是又不惡御汲取可被下候彼是之御斷旁如是御座候恐々頓首（施点の四字は續再夢記事に據る）

八月十五日

松平春嶽　細川越中守　様

松平越前守　様

八月十五日我藩老臣書を越藩老臣に贈り彼藩特使派遣の禮に酬ゆること能はざる所以をのぶ

〔尊攘錄御建白御國議〕

一儲致拜捧候各樣彌御安祥珍重奉存候然者此程岡部豐後殿御列遠々被指越御二方樣御存意之筋等越中守樣ニ委敷被仰進之趣同席中も潛ニ相窺其後於私宅猶御咄合も都合能致出來御双方之御趣意無存懸符合ニ至り誠ニ太慶不少奉存候就ては此御方よりも早々御使者を以御挨拶可被爲在處京師之模樣甚六ヶ敷同所蹈通り尊藩ニ致往復候而者意外之混雜醸成候も難計右樣之御手數向より土臺之御覺悟ニ差障候ハ勿論御本意ニ無之不遠御舍弟澄之助樣御登京之事ニ付御面會之上ハ直と御斷ニも可相成ケ樣之節蒸氣船有之候へハ大ニ御便利ニ相成候へ共御所持無之候へハ海路被差越儀も難相成右之次第越中守樣深御配慮被爲在巨細御直書に而御拜謝之御樣子ニ御座候得共貴丈樣方よりも可然樣被仰上被下度此段賴入存候恐惶謹言

八月十五日

中老　木多丹波　様
家老　物連名判
山縣三郎兵衛　様
木多飛驒　様
松平主馬　様
狛山城　様
酒井外記　様

八月十五日宮部鼎藏眞木和泉山田又助久坂義助桂小五郎等學習院に於て大學の國簿等のことを議す三條實美萬里小路博房烏丸光德東久世通禧之に臨む

〔文久癸亥日記〕（眞木和泉守遺文所收）

十五日（八月）陰、朝條公に謁、水野（丹後）木村（三郎）同道條公に謁、午後學習院に出議大學之國簿等之事、條公、萬里、烏丸、東久世公臨之、余、山田亦助、久坂、桂、宮部等而已也、夜無月、中島英來訪

八月某日我藩久留米筑前兩藩に使者を遣し長岡護久藩主に代り上京すべき旨を報す

〔尊攘錄御建白御國議〕

頃日以御使者御相談之趣付而は御答被仰進置候通ニ候處近日京地動搖不穩樣子ニ相聞候付彌以御差急御登京御盡力思召ニ御座候得共此砌藩屏萬般之御手當筋一時ニ差湊如何體ニも難被及其儀候付御名代として御舍弟長岡澄之助樣御登京同良之助樣をも一同御差登不日御發足之筈御座候御問柄且先度御使者被進候末之儀ニ茂有之御案內旁以御使者被仰進候方今之事體ニ付追々御相談之趣付而者越中守樣兼而之御覺悟筋を茂御答被仰進置候通候處近日京地動搖不穩樣子相聞御警衛之御任彌以御差急御登京之思召ニ御座候得共此砌藩屏萬般之御手當筋一時ニ差湊如何體ニも難被及其儀候依之御名代として御舍弟長岡澄之助樣御登京同良之助樣をも一同御差登猶更厚被仰合御盡力之思召ニ候間不日下野守樣御出會之上は萬般無御伏藏御心添被下度思召候尤御船用意等之都合も有之候付來月十日頃迄ニ御發足之筈ニ御座候此段御案內旁以御使者被仰進候

八月十六日朝廷親征の用途十萬金の調達を我藩及び加州長州藩州久留米土州等に命せらる

〔文久三年京都返達御用狀控〕

八月十八日　同廿五日着
青地河口より
中國路四日限之屈飛脚立候間致啓達候
、、、
一一昨十六日朝傳奏野宮宰相中將樣より只今之內罷出候樣申來候付御留守居代として安岡辰之助罷出候處加州樣御留守居同席ニ而行幸並御親征軍議御用途金加州樣初申談指上候樣との御書付一通宛雜掌を以御渡ニ相成候付指上申候右ニ付先之御請ゑ即座相濟候得共太守樣被遊御承知候上猶御請ゑ被仰達候樣との儀茂雜掌より申聞候
一右ニ付加州樣長州樣初上納之手續等打合置候得共何方樣も御評議最中ニ而未如何樣とも相決不申由御座候恐々謹言
細川越中守

行幸並御親征軍議御用途十万金加州長州薩州久留米土州等申談調達有之候樣之事

〔文久三年京都諸扣〕

八月

只今安岡辰之助方相達候御用途金之儀御高割ニ而御出金之御都合ニ候哉又ゑ平等之御割合候哉且又加州長州薩州久留米土州等ゑ有之候へハ今一方樣被成御座候哉ニ茂相見右等之境早々御聞合御達有之候樣其上ニ而御國許ニ屈飛脚差立筈候間左樣御承知候樣存候以上

八月十六日
長鹽庄兵衛

青地源二右衛門殿

尙々右御渡之御方々樣外ニ茂同樣被仰付候御向も定而可有之願曰左樣之儀も相分候へハ大ニ都合宜候間其御心組ニ而御聞繕有之候樣存候以上

文久三年

〔文久三年元治元年
自筆狀控〕

以別紙申達候一昨十六日野宮宰相中將樣より御留守居御呼出ニ付罷出申候處　行幸並御親征軍議御用途十萬金加州侯初被仰談被遊御調達候樣との御書付被成御渡候由ゝ而別紙寫達有之候付早々御國許ニ申上追而太守樣ゟ御請可被仰上候得共爰許詰合之面々迄之一ト通御請申上置候段茂御留守居ゟ口達仕候重疊御冥加之御儀ニゝ被爲在候得共方今莫太之御出方而已被指湊候折柄不意之御出金を茂被爲蒙仰誠以奉恐入候何樣後段ハ兎茂角茂差寄御出金之儀御高割又ゝ平等之御割合歟之境ゟと早々承繕せ申筈ニ御座候第一御銀操之儀御勘定頭申談仕候處勿論右之大高爰許ニ御貯可有之樣茂無御座於大坂茂昨今餘計之金高漸御銀談相濟候即下ニ候得ゝ此上御請申上候儀何程ニ可有之哉甚以當惑之樣子ニ御座候得共御用意ニ相成居不申候而ハ難相濟事ニ付是非共相調候樣勘頭ニ相含今日申向之手數仕せ候事ニ御座候行幸之御比合未タ相分不申候得共當月中歟來月初旬共風評仕候若左樣ニ茂御座候節ハ太守樣ゟ之御請を奉初御衆評之趣等不奉待請諸藩之御見合を以御不都合之儀無御座樣周旋可仕ゝ奉存候右之御儀付而ハ諸家樣方之御振合今少相分候上申上候得ゝ萬端之御都合可宜ゝ奉存候得共一兩日中ゝ共治定之樣子相分可申事ニ無御座左候而ハ必多物及延引候而已ゟす此後迚茂如何計之御出方筋可起來哉難計於御地御銀操之御都合ニ相成可申候間先右之段迄申國路四日限之屆飛脚差立申候猶御割合高を初一躰之儀ハ相分次第可申達ゝ奉存候以上

八月十八日　　鎌田

御家老
御中老　殿

尙々別紙御書付寫之末文ニ土州等ゝ有之候得共加州樣御初此方樣共御六方樣迄之由且又右御方々樣外ニ茂究而御同樣被蒙仰候御向茂可有之承繕せ候處此方樣御組合之御方々樣迄ニ而外ニハ無御座由越前當りニゝ發敷御出金も被仰付たる歟ト心算仕居候處案外之事ニ而いつゑ右之御六方樣ゝ別途御親睦之御譯ニ而被爲蒙仰候事ニハ有御座間敷哉ゝ窺ニ勘考仕候且又右　行幸之節ハ選士之内ゟ隨從ハ勿論御警衛茂被仰付ニ而可有御座第一近來ニ至候而ハ彌以御人少ニ候へ共御守衛中之御事ニ付表向御人少ゝ申儀ハ難申出譯合茂有之又夫ニ相成候得ゝ彌ゟ上之御出方增ニ而萬般當惑心痛無申計御高察被成下候樣奉願候以上

八月十六日關白鷹司輔熙三條實美と共に島津久光召登の議を阻止す

〔京都ミやけ〕

一去ル十六日夜公卿方御參內之處御下り曉ニ及候由右ハ島津三郎殿被召登候　勅定ニ付關白殿下三條卿御奏聞ニハ薩州之儀未タ罪人御吟味茂不相濟內御召登被遊候事如何敷有之候間被召止候樣强願出らゑ候付御免ニハ相成候へ共主上ニも餘程被　遊逆鱗被仰候ニハ是迄　勅定追々差返候事有之是ハ以之外之事ニ而以來屹度左樣之儀無之樣可相心得若向後右樣之事有之候ハヽ　朕も位を避ケ可申共方共ニ茂辭職之覺悟可致と被仰候由

右會津松坂三內密話之由

三郎殿御召ハ長州樣抔尤御不平ニて種々周旋有之作州津山之藩士鞍掛虎次郎へ相談致し御差止ニ相成候樣述白致せ候由

八月十六日幕府閣老板倉勝靜に海陸御備向御用を命す

〔文久三年
御同席觸寫大目付樣御廻狀並御書扣〕

（八月十六日板倉周防守渡大目付廻狀）

覺

周防守事海陸御備向御用和泉守申談可取扱被仰出候此段爲心得向々ニ可被達候事

文久三年

八　月

八月十七日天忠組大和五條の代官鈴木源内等を掩殺す

〔文久三癸亥年尊攘錄探索書〕

（八月廿八日余田三右衛門首藤敬助寺尾大門大里八左衛門草野平藏聞取書抄）

一去ル十七日申ノ下刻五條御代官所に浮浪共百三拾人計押太鼓を打皆々甲冑ニ而押寄候由御代官鈴木源内ハ例年之大山詣と心得元ゟ何之備も無之處直ニ亂入いたし源内始メ番頭手代都合五人及殺害外八人搦取衣類器財等盡く村民へ與へ遣し武器ハ奪取陣屋燒拂一先櫻井寺と申所迄引退其後サンザイ村と申所へ富民住居いたし居候を亂妨ニおよび衣類器財ハ前條同樣取計金子ハ軍用金と唱掠取米五百石有之候ハ共儘封印致追而五條へ相運候樣申付尙又カタキノ辻と申所之富民へ亂妨いたし器財等前條同樣取計家ハ解崩シ五條へ持越陣屋築立居候由尤右村民へハ追付當所へ　行幸有之都を遷シ候間今日ゟ年貢半高ニ減し遣し候と申聞候由

一十津川郡合貳拾ケ鄕有之候處當時六七ケ鄕ハ不服共餘ハ皆々歸服いたし候由

一當時千三百計之人數ニ罷成稲藏居候由

一當時大工桶屋を寄せ木筒製造最中之由

右和州郡山ゟ往進之趣を聞取候由ニ而土藩寺田典膳ゟ聞取候事

一十津川之浪士貳拾人計當時滯京いたし居右之者ハ正義を唱昨夜之出火ニ茂守衛ニ罷出候由是ハ先日　朝廷ゟ米を賜り候節長州ゟ献上米之由ニ付米拜領ハ難有仕合ニ御座候得共長州ゟ献上米ハ一粒も拜領不仕抔と正議を押立居候由右之内ニハ大將分之者も有之共名を借五條一擦内ニも差圖いたし居候ものも有之候程ニ付右之者共被差越候ハヽ多くハ改心可致見込ニ而追々差越も可有之との由

右會藩松坂三内より聞取

〔文久三年ゟ元治元年マテ江戸返達御用狀扣〕

御留守居書上

去十八日何方之者とも不知多人數大和御代官所ニ罷越明ケ渡候樣懸合候由之處御沙汰無之候而之相對ニて難相渡旨申張候處左之通及殺害生捕等ニ而燒拂立退候由風聞仕候

大和
御代官
手附　鈴木源内
殺害
手附　長谷川岱助
木村祐次郎
用人壹人
被生捕
梅田平三郎
近藤榮太郎
外五人

逃去

右之通ニ而委細之儀ハ相分兼申候尤多人數と申内百五拾人程と茂相倡京地一變之同日ニ而右之逃道之所業とも風說仕區々ニ而事實不分明ニ御座候事

八月廿七日

文久三年

八月十八日朝廷の形勢一變し薩會力を合せて長の勢力を驅逐す　尋て三條實美等七卿長州に下る

〔文久三年〕京都返達御用狀控〕

八月十八日　　同廿五日着

青地河口より

早打屈飛脚立候間内啓候今度攘夷御祈願として大和國　行幸　神武帝山陵を初　御拜御親征軍議去十三日被仰出候儀者同十四日之早打飛脚ニ言上仕置候右行幸並御親征軍議御用途十萬金此方様御初より御献金之儀一昨十六日被仰出候間段々心配仕世間取沙汰ニ而ハ行幸旨下旬ニ茂可被爲在御模様ニ付而御用金差上方之儀茂御一列御懸合等前日約置候儀有之今早朝藤本兎三郎儀長州様ニ罷越候處大混雜ニ而御固御人數被差出又九條様御出ニ相成居候ふとゝ唱上を下へと返し候様子ニ而御留守居面會も相斷候付早々引取何さま寺町御門御固御人數等茂可被差出と咄合源右衛門儀兩三日風氣ニ而引入居初而右混雜之儀致承知脇様より御人數被差出候ハ、後ゟ候而者宜間敷早々用意ニ相成候様南禪寺ニ申遣候何分不安心ニ付押而致出勤段々申談外聞等茂差出候處寺町御門者早會津様御人數來御人少と見受候付相固候段申候而御門を鎖一切通行差止候由其外堺町御門等茂會津様御人數より相固候由其外所々御人數夥敷被差出申冐着込相聞候も有之不只事様子ニ候得共何たる事歟一向相分兼候處御所ニ怪敷者入込候と申沙汰有之又因州様御屋敷ニ而混雜之儀有之四五人損候との唱茂有之夫より之事とも申候得共是以不慥ニ御座候處猶出役之御出入與力等ニも精々聞合候處何も相辨居不申候得共昨夜四時過ニも有之候歟松平若狹守様御差圖ニ而御固出役いたし候由其向ニ而之咄ニ　御所中大御混雜太子様之方ニ御混雜有之候とも申中川宮様御參　内會津様因州様御參内ニ相成居中川宮様御差圖ニ而傳奏様議奏様とも一切御參内御差留之御様子ニ而　禁闕と會津様因州様ふとゝ之御固鍄刀都而鞘を迦し一切人を寄せ付不申誠嚴敷事之由勿論寺町御門にゝ追々ニ御人數繰出し大小炮を嚴重之御固出來仕候三條様ニゝ御親兵之面々馳集り强而御參　内を奉促甲冑を帶大炮を持懸凡千人餘茂參り候由内通者被出來兼候間先外通より右之御人數を被引卒關白様に御出表より御入六ケ敷候ハ、裏御門より御入之筈ゝ而候處御固より寄せ付不申を宮部鼎藏抔差えまり御入出來兼候ハ、大炮ニ而打崩し奉入候勢ひを顯しよふ〳〵裏より御入ニ相成候由夫より三條様御傳言之由ニ而内膳殿に御人數被引連被罷出候様御傳言茂有之候得共第一　朝廷之御模様不相分　天機をも不被奉伺候而者何分卒爾ニ出馬茂被致兼候間專用意ニ而被相扣弟直人方に御人數少々差添遣しニ相成候事ニ御座候何様　朝命之程不相分候而者治定被致兼候儀ハ尤之事ニ御座候堺町御門者是迄長州様より御固之處今日より御所司代様御人數と引代と申沙汰も有之虚實慥ニ者相分不申候得共何様大變眼前ニ起來如何成行可申との見亘素より無御座候猶又只今七時分外聞罷歸申候ニゝ關白様ハ召ニ而御參　内飛鳥井様も御供廻ニ而御參内と申事之由阿州御世子ニも疾御出馬御供廻り着込ふとゝて嚴敷事之由御所邊座候事件前後彼是ハ宜御心得御推覽可被下候以上

〔仝　書〕

八月廿日

河口より

青地源右衛門書上二通差上申候以上

昨十九日之夕六條侍從様に今般非常御見廻之御使者相勤御口上相濟候上御逢相願候處折節御參　内御留守中ニ而宰相中將様御逢可被成段鬼頭掃部より申聞昨今混雜ニ付御間所取散有之候間御居間に罷通候様との事ニ而致案内候間罷通候處當前一ト通之御挨拶被仰聞相濟近く參候様との旨ニ付御側に相進此節勤搖之源御内意相伺申候處行幸並親征軍議被仰出候通ニ候處右者未其機會ニいたり不申候處長州ゟ右一件强而相望候様子夫レと申を先般同國ニおゐて攘夷炮發之儀將軍より察討之趣爲有之共ゝ而者無之哉之處ゟゝといたし候答出來兼候處より行幸并親征軍議差圖左候而行幸向

より直ニ長州表之樣ニ御供申上候仝共ニ而ハ無之哉之由其儀會津以下段々在京之諸家且中川宮ゟと承込追々至密申合置たるニ而可有之昨曉會津押懸致參內中川宮も同樣ニ而議奏傳奏三政國事等之役々參內御差留之達書認せ候內薩州家來之內御門入者六ケ敷候間近衛家裏門より入込空炮相放候由其音合圖ニも可有之段々詰合之國主茂追々ニ參　內有之其人數之凡十七八人だと承候然ニ　行幸御延引無之候而ハ一人も引不申との勢ニ爲有之由扨又三條中納言ゟとハ參內御差留ニ付而者相慎在宅之處數十人引連關白に相越此一儀ニ而も違　勅之形ニ候處其儘大佛に罷越今朝四時比迄ハ彼方に相滯居候趣ニ相聞其後之樣子御存知無之尤中納言一人ニ無之大佛に六七人程同道いたしたる樣子との御事ニ付相伺候處御机より紙墨御取出之上別楮之通右掃部に御認せ丸輪懸り居候分者相違無之候得共無印之兩人ハ違有之間敷候得共丈夫ニ者難被仰聞由且又傳奏等之役々都而一旦參　內御差留ニ相成候得共一時ニ退役御取扱有之候而者御爲ニ不宜趣會津ゟと申上たる共ニ而ハ無之哉御差留者暫ニ而如元參　內いたし候尤傳奏者此節之樣ゟ事ニ深ク相携無之些筋違ニ有之候段も被仰聞候將又其方之人數三條に差出候分夫レニ不及段御沙汰有た筈だがと御尋被成候間屋敷罷出候迄其儀不奉承知候尤御同方樣より御賴ニよつて日々差出來候人數者壬州寺町御門等警衛仕候人數之內繰合差出申候處昨曉より之騷動承候而者名代長岡內膳寺町御門に人數引連出張仕候程之事ニ付御門御堅太切之儀ニ付何仝茂同所之方に相詰申候尤御親兵として差上置候人數之儀者如何程ニ可有御座哉　朝廷御差圖次第之事ニ付此方樣ゟ進退御取扱者無之段申上候處近邊淨花院に相詰候人數御尋ニ付則御親兵之者ニ御座候段申上候處昨早天鐵炮ゟとぐわらノ〳〵取扱其餘仰山ニ相聞候段被仰聞御自身ニ者國事懸蒙仰被置候得共下地御屆兼之上此時勢御勘續之御見耳無之處より先日御辭職御願書御差出被成置候內之由右段々之趣外々にと御咄無之候得共此方樣ニと格別之譯を以極御內々ニ而御咄被成候段被仰聞候事

八月廿日

○三條西中納言殿　○三條中納言殿　○東久世少將殿　○四條侍從殿　青地源右衛門

豐岡大藏卿殿　○錦小路右馬頭殿　澤主水正殿

昨十九日三條樣に此節非常御見廻且御方々樣御伺之御使者相勤候處丹羽豐前守應對仕候付前段御口上之趣申述慈性院殿事も相伺候處三條樣外御方々樣御異狀無之慈性院殿ニ茂同然之由畢而中納言樣御儀昨十八日夜明ケ方御參內御差留之御達致出來誠火急之變事ニ而有之候就而者御慎可被成儀勿論ニ候處諸藩御親兵數十人追々ニ參上御門出入相成兼候ハヽ打破御通被成度抔强而申上種々論評茂有之何分不穩勢ニ付同日已ノ刻比右面々并御家來之內被召連御親兵御引卒之譯を以御門御入込關白殿に御出御參內御願有之候得共夕景ニ臨候而も如何樣とも御差圖無之依之被仰付置候御親兵引卒御斷御願捨御立御屋敷に御立戻ゟく直ニ此方樣長州樣土州樣之御親兵并御家來ニ而者丹羽出雲守森寺大和守村上右衛門尉三宅左近太田司馬外ニ阿州產之由劍術達者之聞ニよつて被召寄置候露木恒之進と申もの被召連大佛之樣御越ニ相成候處御物音聞付諸藩之御親兵等追懸々々隨從仕候付御同勢最早數百人ニ相成爲申樣子ニ相聞申候左候而此機會を暫御避ケ被成候思召ニ而西國に御志今日伏見迄御越之儀者相分り候得共其末陸地御旅行被成候哉航路ニ而候哉共境者相知不申候處西國と申は長州御目當之由右之通不慮之大變差發縱相殘候御家來別而行當候得共大勢隨從申上候一段者御氣遣申上候內ニも少シ者安心仕候由尤いまた表向朝廷之方御屆之埒ニ者至り兼居候由然ニ右之趣諸家樣にと打明相咄不申候得共御聞拵之儀ニ付不包內々相咄候段返答仕候夫より御方々樣并慈性院殿御立除有無承申候處御方々樣にと昨十八日岡崎村ニおゐて前中納言樣御住居被成候向に御女中并御家來之內少々御召連左候而同所爲御用心土州樣に御人數之內御借受被仰向御同方樣ゟ御人數被差出候由申候付其人數問合申候處是と彼方御差支無之丈御借被成候事ニ付何人計と申所豐前守卽答出來兼候由又慈性院殿ニ者御裏方立除諸道具取ゟしめ等ニ付混亂之事承知ニと相成居候得共變化之次第逐一相咄候而ハ最早老年ニ茂候間心遣ニ付昨十八日迄之所と一同立除せ不申今夕迄も矢張當裏方ニ殘置此末自然炮發等之埒ニ至候得と是又早々岡崎村之樣立退之手都合者夫々手當仕置申候由

右段々之通御座候事

八月廿日　　青地源右衛門

〔仝　書〕

八月廿日　　八月廿七日夜着

青地河口より

内啓一昨十八日曉ゟ御所方角騷動付而同日暮比迄之模様見聞之趣之同日之雇飛脚ニ大略得御意候通御座候共後も段々致心配候得共寸斗聚様子聞留出來不申候

一内膳殿出馬　天機伺之儀無之而之難相濟儀ゝ見込候得共此方様御人數寺町御門通行を會津様御人數ゟ相拒候との趣ニ候得之混雜中被參懸不都合ニ至候而之難相濟段々申談藤本兎三郎を差越會津衆に及懸合候處御同所様御留守居御所に り肥後守様に相伺候得共御一分之御差圖難被成御様子ニ而御伺ニも相成候歟不指支由夜更候而相分來候付夫ゟ被致出參馬夜九時過ニも有之候歟　寺町御門迄被相越候得共傳奏様方も混雜ニ而即夜伺之都合も出來兼明朝被相越候様との趣ニ付共夜之寺町御門ニ被相詰何角之差圖有之出役之御番頭御物頭をしめ大ニ力を得候との様子ニ承申候右之次第ニ付翌日　天機伺相濟申候

一三條様御守衛ニ被指出置候大筒手之前以含ニ相成候趣有之寺町御門に相詰申候尤歩御使番歩御小姓之御屋敷に相詰御親兵等奉促候付而右之人數等御引連關白様裏御門ゟ御入夫ゟ猶右人數御速ニ而大佛之方に御出ニ相成候途中御供之面々ニハ實ニ致心配何時鬪爭ニ可相成歟ゝ必死之覺悟ニ而罷越候由之處幸にして無何事御出着ニ相成其内御供之歩御使番歩御小姓抔ゟ何方迄も御供可仕心得方伺として天授庵に追々來申出候ニゝとふも御供を下り候場合無之又他藩之御供ゟ如何成危難を可生も難量御役々も大ニ心配ハゝ敷し歩御番角田儀左衛門を御使者之振合ニいたし騎馬ニ而爲奉追懸伏見御下宿罷越御下宿一向不相分叮家御止宿漸尋出候由是迄ハ爲御守衛御人數被指添候へ共右之　禁闕御警衛之者共ニ付何處迄も御隨從申上候譯ニ無御座趣申上候處御附添之内ゟ段々異論も有之候由ニ候得共約り大義ニ落込御納得ニ而孰も儀左衛門に御引渡ニ相成連歸申候御親兵之面々ハ何方ゟ御供を下り候歟淨華院ニ居候由右之内宮部鼎藏ハ御供ニ而罷下候由又前廉致亡命候村上某御供ニ而罷越候様子ニ相聞右外之面々事ハ未一向相分不申候其外公卿方五六方様御同道陸路ゟ長州に御下ゝ申御様子ニ御座候委細ハ別紙源右衛門書上ニ而御承知可被下候御間柄之御方様ニ候得之御模様變御逸　勅之形ニ被爲成候而之何分御人數被指添候取計も難致御役々ニも心配之程万般御汲察可被下候雲上明覽を見候得之御初代公季卿以來當實美卿迄三十三代を被爲經候御名家此節之御浮沈如何哉ゝ奉存候得之實ニ胸を寒申候

一禁闕九門之御固等勿論不相變嚴重ニ而于今中川宮様近衛様關白様其外無御差障御役々ハ追而御模様替御參内之由會津様備前様因州様土州之御舌弟様も御詰歟　共外小諸侯方御詰ニ相成候歟ニ御座候得共とり〳〵之評判計ニ而突留候儀之分り不申候間定而相違不分明之儀茂可有之候間宜御勘辨御承知可被下候以上

八月廿日河邊鐵之助見聞口達

日野御門　仙臺　　朔平御門　筑前御家老　　公家御門　會津　　御臺所御門　所司代

准后御臺所御門　會津　　近衛様前通　薩州　　南門向　因州

右いつゝも切火繩ニ而相固居候由

〔轟木武兵衛引取書〕

八月十八日之朝差急御吟味場所蛸藥師通大宮西ニ入候所ニ罷出候筈ニ而寺町御門前罷通候節者夜之薄々明ニ而御門ヲ閉堅内ニ大勢之人聲致候様子ニ者候得共何之氣付モ無之罷通境町御門ニ至候節者夜モ明離レ御門内ニ者大勢之物音致シ御門外ヨリ町人躰之者十四五人差覗居候得共其比者色々之變事多御門内ニ何事歟致出來候ニ而モ可有之ト是亦何之氣付モ不仕罷通御吟味所ニ罷出調ニ取懸居候處同掛河合惣兵衛ヨリ早打之紙面參何事乎者相分不申候得共大變差起候間御吟味取形付罷歸様申遣候間早々取形付罷歸候處途中迄惣兵衛迎ニ參候ニ行逢候間様子相尋候得共爲何譯ト儀申者

相分不申段申聞夫ヨリ兩人同道ニ而寺町近相成候處各甲冑ヲ帶シ致往來境町御門邊者込合通リモ成兼候程ニ而丁度前夜者因州御屋敷ニモ變事致出來有志輩上ハ役之者四人切殺知音院之樣ニ立除居候由承候間右ニ關係致候事柄ニ而者有之間敷哉ト同所ニ罷越相尋申候得共樣子相分不申候間惣兵衛ニ相別淨華院ニ罷歸候處一人モ居不申漸留守番之僕一兩人見出候得共素リ何事共相分不申三條樣先刻　鷹司關白樣エ被爲入候ト申事迄相分候間何樣御同所エ罷出可申と肩衣之儘罷越候處御同所之混雜無申計鼎藏初何方ニ居候哉相分不申誰ニ樣子相尋可申樣無之右往左往之体ニ付三條樣エ召出相願御模樣相伺可申ト心組罷出候處唯今直ニ大佛之樣ニ御開ニ付彼方ニ而被召出可申旨ニ付無致方共儘猶下宿ニ罷歸割羽織等致着用鎗ヲ提ケ罷越候處其節者早御先供押出居候處ニ而夜四時過ニ方廣寺エ御着ニ相成候得共同寺ニ而モ上ヲ下ヘト致混雜鼎藏モ遙ニ見懸ハ致候得共暇ヲ懸候透無之漸三條樣拜謁相願初而御樣子致承知此上ハ如何御處置被爲在候哉會薩ニ先ヲ被懸候者以之外ノ御大事ト相成可申今夜中ニ如何樣卒　朝廷エ御歎願被爲在度段申上候處眞木和泉守列長州之者共ト相謀居候間武兵衛見込之趣者彼者共エ申聞兎モ角モ相計候樣被仰聞候間御前ヲ下リ和泉守鼎藏列相尋候得共居向相分不申漸大佛之後ニ離家有之候所ニ居候ヲ見出人拂ニ而致密談居候由之處武兵衛儀者相拒不申長州之者共和泉守鼎藏五六輩打寄話合居申候間押而相加候處間狹ニ而膝ヲ容候透モ無之始ハ立聞致居候得共始末之都合分兼申候間漸半身計差容承候處一旦大和之樣ニ御開可然ト申事計聞ヘ前後者貫通不仕何樣大和ニ相決候ト相見孰モ七卿ヘ申上候段申出召出相願候間武兵衛モ押而付參候處於御前一先大和ニ而モ御開可然段申上候處御側ニ居候長州人之内ヨリ大和モ可然候得共同國ニ而者向後不辨理ニ而御自由成兼可申一先長州之樣ニ御出ニ而如何樣共御賢慮可有之段申上候處七卿ニモ長州之方御同意之御模樣ニ而此方ニ致決着候樣子ニ付武兵衛存寄ニ而者何方ニ而モ御開不可然矢張此寺ニ御蹈締ニ而今夜中ニ御歎願之御上表被差出候樣有之度段申上候得共七卿御耳之端ニモ入不申其外之者共ハ猶更打合セ候者モ無之獨吉川監物御側ニ罷在申候處同人者武兵衛同意之貞付計ニ而默居申候間無致方外之樣ニ罷出　親兵之儀者長々此所ニ被爲留置候譯ニ無之一刻モ御解放可然トノ事ニ付武兵衛共者　親兵之事ニ付三條樣長州之樣ニ御出之儀相決候而者何時迄モ此所ニ居候而者無用之事ニ付一刻モ引拂可申ト申談居候處鼎藏眼ニ血ヲ揉込候樣ニ相成馳來自身ニ者三條樣長州之樣ニ御出ニ相成候間何分ニモ御見放難申長州之樣ニ御供致シ罷下候段申聞候間　親兵之内ヨリ親兵ニ被差出候身分　禁闕ヲ後ロニ致シ長州ニ罷下候儀者聞エ不申段申聞候者有之候得共耳ニモ寄付不申其儘立去申候武兵衛儀者小坂大八同道ニ而三條樣エ御暇乞ニ罷出可申ト申談召出相願何方迄モ御供申上度情願ニ御座候得共　親兵ニ被差出候身分ニ御座候得者是ヨリ御暇奉申上萬一京都ヨリ討手差向ヒ候者死力ヲ盡シ押留可申段申上御前引取大八同道大佛門前之樣ニ參御發輿之節御暇乞可申上ト相待居候處御輿者皆空輿ニ而七卿共ニ御歩行ニ而長州勢引包御落去ニ相成武兵衛列者夫より引返シ淨華院之樣ニ罷歸候

〔仝　書〕

先年宮部鼎藏儀長州藩吉田虎次郎同道尾州ニ遷都之地形見繕ニ參候事有之尾州者四神相應之地ニ而用武候ニ者今之京都之地形ニ勝候事萬々ト之唱ニ而今之京者夷狄日本ニ參候樣相成候而者浪華之海港ニ切近シ要害不宜敷抔申居候事有之癸丑甲寅以來關東御窓政ニ而　勅意御遵奉不被爲出來奸臣當路忠臣就戮候樣相成迚モ此儘ニ而ハ攘夷之儀被行不申依之只今之内急々　幕府ヲ被成御潰兵馬之權悉歸于　朝廷候樣致シ候而　王政致復古土臺ヨリ建直不申候而者攘夷之鎖口之ト申儀被行候事者存懸モ無之段鼎藏儀兼而同志中寄合論談仕居申候處右之通　王政復古抔トロニ者唱候得共中々一代ニ共被行候大變格ニ無之只今急ニ幕府ヲ被成御潰兵馬之權俄ニ歸于　朝廷候樣致候者忽天下大亂之基ト相成可申者必然ニ而是又夷狄之術中ニ陷可申武兵衛相考候ニ者　東照宮御遺澤猶未被爲盡天下悉ク　德川之御家ヲ擁居候處亞墨利加渡來以後　叡慮ニ被爲遂候儀者奸臣之所爲ニ付櫻田之變ヲ始種々之變差起今日ニ至候得共　御功罪致計較候得者猶未タ被成御潰　王政御萬復被爲在候論者被從不申武兵衛存念者當時切迫之形勢ニ相成　將軍樣御年若ニ而奸臣權ヲ專ニ致候處ヨリ天下之人心歸服不仕下犯上紀綱相亂迚モ　御駕馭被爲出來間敷候間　將軍樣御位之儘被遊御退申サハ古河公方之樣ニ十万石ト歟百万石ト歟其節天下之公論ニ任セ家祿ヲ奉附置天下之人心歸居候御三家御三卿之御内

差寄一橋公之樣成御方樣副將軍ト歟御後見職ト歟申御名目ニ而天下兵馬之權ヲ被成御握於　朝廷者筒樣之時節ニ相成
公家武家之無差別當時賢才之聞有之候乍恐　御二タ方樣薩州大隅守樣土州豹之助樣方者是非御國ニ不被爲入共被成御
濟候御方々樣ヲ　朝廷之御相談衆ト被成御定其上ニ一大國賢君之聞有之候御方共御上聞ニ被爲立日々　朝廷エ御出仕
ニ而天下之事都而此御方々之御聞ヲ經候而御施行ニ相成前文之副將軍ト始終御合体ニ而御政道ヲ被爲行以テ諸侯ニ被
爲令候者所調土地不改開民不改聚而皇威洪張可仕ト兼々愚考仕居於御國　朝廷之御模樣奉察候處ニ而者諸國エ
御內勅等被差下候體之事其外幕府ニ追々之　勅諚等被差遣候樣之事都而朝廷之御基本屹度相立居武兵衛式之者致上京
候而モ中々時勢之事抔ニ聊嘴ヲ入候樣成儀出來候御模樣ニ而者有之間敷假令諸侯方たり共容易ニ御上言等有之候御內
輪ニ而者有之間敷ト不怪高買致シ罷登候處案ニ致相違何一御根本相立候ト申事無之上等之堂上方ニ者左モ無之候得共
末々之堂上方ニ至候而者金錢サへ御座候得者何事モ被行候樣成惡風ニ而萬事見落候事迄ニ而是位ニ而者迎モ　王政復
古之皇威洪張之ト申事者存懸モ無之儀ニ而長州人抔モ相疎ミ居候位ニ而有之候得共此身此儘ニ而可成丈　御根本相立
候樣致盡力候處再度之上京ニ者見込モ猶又打替將軍樣久敷被爲絶候　御上洛モ被爲在御名分モ正敷相成是迄一夜御滯
留モ不相成諸侯方依　召夥敷御登京有之以前之　朝廷ニ比候得者思過半候御模樣ニ付早ク此所ニ御止り不被爲成候而
者下ニ禍心ヲ致抱藏如何成變動差起可申哉ト氣遣候處ヨリ三條樣エモ申上長州之者共エモ申聞候得共相用不申遂ニ八
月十八日之變動ニ及ヒ右者全ク會薩之奸計ニ出候事ト而已一圖ニ存込居申候處前段大和　行幸之儀次第ニ被差迫候ニ
付表向　後宮エ御達御座候處　皇后樣御附八尾局ト申御方武家ニ而者老女ト申場ニ被爲居候御方之由ニ而此御方右
行幸之一條一切御請不被仰上此御時節柄　主上京都ヲ被　遊御難候者　皇后樣ニ御歲十二之　皇太子迄ニ而女更同前
之事ニ候得者如何致シ　御留守之番出來可申哉此節　主上是非ニ不被遊　行幸候而不被爲叶御儀ニ候者三種之　神器
者大殿ニ御安置之儘　皇太子エ御讓位之御禮ヲ被爲行其上ニ而　行幸被爲在候者假令三年　御歸京不被爲在共聊御存
寄申上候儀無之若右之願不被爲叶候者　鸞輿一步モ京地被　遊御難候儀於局更ニ御受不被爲出來旨被申出當日ニ者奥

ト表ト頻ニ御使致往返候得共局承引不被致候間　主上殊之外御困りニ相成三條樣方ニ者御先番御發途ニ差逼居候間遂
ニ十七日ニ雅陽宮樣肥後守樣エ　行幸之儀ヲ差止呉長州ヲ退候樣ト之　御內勅被差下候處十八日之變動差發爲申由只
今御沙汰ヲ以テ初而奉敬承候左候得者全ク薩會之奸計ニ而無之從　宸衷被爲濫出候　御儀ニ候得者癸丑甲寅以來此儘
ニ而者迎モ攘夷之運ニ至兼可申ト時世之變ヲ窺ヒ鼎藏上京以後者全相違無之儀ト相信大機會ヲ得候ト一圖存込兼而之
憤懣慷慨之心一度ニ相發一之決之字ヲ以テ倒行逆施遂ニ　叡旨ヲモ矯候埒ニ立到第一御國議之旨ニ戻候者畢竟一己之
功名臆識ニ溺候處ヨリ只計成功ニ目懸ケ上京之節我意ニ任セ種々不都合之振舞致シ其內ニ者鷹司殿下エ及建白急攘夷
之儀者於幕府無御餘儀筋モ被爲在候處　朝命被　仰出候樣及言上全ク　幕府ヲ奉困蹙候事ニ而　公武御一和之御主意
ニ戻リ屢矯　叡旨候次第深恐入奉存候段申出候

〔南海日記〕（宮部鼎藏日記）（維新史料編纂會藏）

文久三癸亥年八月十八日晴　朝高木元右衛門肥後藩士來テ曰今曉世間靜カナラサル由ヲ聞シニヨリ清和院御門ヘ行テ見ル
ニ門ヲ閉出入ヲ禁セリ外八門皆然ルヨシ人馬大ニ奔走スト因テ三條殿ヘ馳參ル殿實美　ハ今曉　朝廷ヨリ御沙汰アリテ
參內ヲ差止メラレ他人面會等ヲ禁セラレタリ久坂義助佐々木男也二人共長州藩士　坐ニアリ執レモ其所以ヲ知ラス外人來リ曰
ク中川宮昨夜參內アリ近衛前關白殿モ同參內アリ其後九門ニハ會津薩州ノ兵ヲ以テ增堅メノ命アリト想フニ姦賊狂妄
奸計ヲ逞シ朝廷ヲ奉劫正義ノ諸卿ヲ讒誣離間シ行幸御大擧ヲ留メ奉リ挾朝廷令天下セント去レハ由々敷大事ナル可シ
ト因テ先吾藩肥後ノ御親兵ヲ呼來ラシム條公ニ伺テ諸藩親兵ヲ集メント乞許下ス木原彦四郎其他數人ヲ各藩親兵屯所
ニ早馬ヲ以テ急ヲ告馳集ル者三十二藩門ノ內外ニ充滿ス條公ニ請テ親兵ヲ帥テ參內シ玉ヒ事由ヲ窺ヒ玉ヘト願フ許サ
レス鷹司殿ニ就テ寃ヲ訴玉ヘト請フ不被許屢乞稍ク許下シ玉ヘリ乃チ條公馬上ニテ諸親兵ヲ帥テ已刻頃殿下ヘ行向ヒ
玉フ殿下昨夜ヨリ參內ナリ又長藩邸ニハ今朝ヨリ集會アリシ由ニテ楊梅殿鷹司殿ニテ御會合ナリ尤毛利讃岐守元純長州清末一萬石

吉川監物（親施毛利家老）　益田彈正（親施毛利家老）　人數引卒參集ス先條公ニ請テ親兵ヲ中門内ニ操入ル下僕ヲ退ケ各槍一條ヲ携シム又中廊門内ニ操入前中後ノ三隊ニ部分ス（一隊十隊長等ト謀テ條公ニ就テ今日ノ起源又何ノ故ニ親衛宿直ノ兵九門ニ入ルヲ禁セラレシト訴フ折節坐ニ　勅使アリ條公右訴書ヲ　勅使ニ依テ　廷ニ奏セラル申後諸卿退散スヘシトノ　朝命アリ條公歸館待命ノ旨下知セラル參集ノ者不奉肯先大佛境内ニ引取後謀ヲ成玉ヘトテ申下ヨリ條公及三條西東久世壬生四條錦小路澤殿ノ七卿（本書ニハ七郷共ニ官名ヲ載ス略此）諸勢ヲ帥玉ヒ大佛ヘ開カセラル退散ノ　朝命ヲ重ンシ九門内ニテ戰鬪ニ及フニ於テハ奉憫　宸襟事ヲ恐レテナリ田城子ハ吾藩ノ親兵長沼英之助等ト大砲數挺ヲ指揮シテ殿ノ堺町御門ヲ開カセ（鷹司家表ナリ）徐々トシテ出ツ會津ノ賊兵追躡ノ勢アリシカ止テ不動酉中刻ニ至大佛五門ノ守兵ヲ議ス乃チ毛利讃州吉川益田十津川勢長州銃隊五手ニテ五ケ所ノ外門ヲ固ム諸卿親兵ヲ帥テ大佛ノ宮ニアリ夜半諸親兵九門出入ヲ免サヽル命アリ乃チ條公親兵ヲ解去ラシメ玉フ又長州行ノ議定マル

同十九日雨　向曉大佛ヲ出伏水ニ至ル余軍費ノ策アリ條公ニ乞テ京ニ歸ル薄暮難波傳二郎田代五郎ニ三條繩手近江屋ニテ會面戌中刻京ヲ出夜半伏見肥後清船宿ニ投宿ス

二十日雨晴　后時發船（ヤカマヽ）淀河ヲ下ル申中刻大坂ニ達シ佐野亥一郎ニ逢薄暮大坂ヲ發シ西宮ヲ過テ天明

二十一日晴　調補公慕々前七卿ニ逢宿兵庫

〔男爵山田家文書〕（山田十郎（信道）手記）

癸亥八月十八日變動之發端

癸亥八月上旬大和　行幸之御布令有之學習院ニ於テ右御用懸等を長州（益田右衛門尉久坂義助中村太郎等）の頭立ツ人々土州ニテハ土方久元抔被命候得共是ハ故有て辭ス肥後ニテハ宮部鼎藏（轟木武兵衛信道等也久留米ニテ牧泉守水野丹後等也被命其次第ニ松本落賊）相運居候中中山侍從公ヲ推シ吉村寅太郎藤本鉄石。健三郎池藏太等　行幸ヲ目的ニ山和（ヤマヽ）暴舉アリ同十六日平野次郎を學習院ニ被召山和（ヤマヽ）鎮撫ノ命ヲ蒙リ同日發足ス一躰事情之切迫姉小路殿御變事ヨリ以降漸氷の思ヲ爲シ候處遂ニ八月之變動を釀せり

一八月十八日曉天寺町靜華院ニ屯集致シ居ル肥後親衛兵之中小坂小四郎外四人諸用有リ清和院御門通リ懸ル處門ヲ鎖シ内ニ嚴備アル趣キ見屆走セ歸リ靜華院ニ報知ス隊長小坂大八且宮部鼎藏轟木武兵衛信道等急速梨木丁ノ御殿ニ走付諸大夫出雲守丹羽氏ヲ以テ拜謁相願候處同氏ヲ以テ被仰付候樣ハ今早朝敕諚ヲ以テ參内他人面會御差留ニ相成ニ付拜鼎難被爲叶トノ命ナリ御親兵頭ノ儀モ被免有之候哉相伺候處此儀ハ何ノ御沙汰も無之由被仰聞候間一同推而拜謁相願上申致候處御親兵之儀ハ兼而如是非常ヲ守備致候職制ニ候得ハ速ニ御守衛兵ヲ被召守禦之御手當被爲在可然御諫メ申上候處御尤ニ被思召其次第一同に被命候付直樣諸屯所ゝ報知長州邸にも打合候處同所ゟハ最前界町應司殿に出兵致候趣キニ付午時前參集之御守衛兵七百余御馬上ニテ御引卒寺町通御押陣ニ而同殿エ御着ニ相成ル然ニ同殿ニゟ七卿ヲ初堂上十輩余も參集有之從而吉川益田茂參着談議專ラ之由出雲守丹羽氏宮部鼎藏信道に御親兵懸リ被命候間隊ヲ四ツニ割ケ戰具ヲ整に御指令ヲ相待居ル中殿内義論區々ニ相成吉川因衛退テ順ヲ守ラント云益田始メ有志ノ徒ハ進擊ヲ主張シ牧泉宮部鼎藏等初信道等如キ者ハ進擊ノ論ヲ相輔ケ河上彦齊高木元右衛門等ヲシテ火攻ノ策ヲ設ケ風上相國寺内エ燒草ヲ蓄エ薩邸ヲ燒キ其勢ゝ乘シ寺町ヨリ仙洞御所ニ倚リ從而禁内ハ乘落サント決策シ進擊ノ御指揮ヲ相待チ居ル處退散ヲ催スノ勅使櫛の齒ヲ引く如く既ニ八度ニ及ヒ然も變動之次第ハ中川宮主ニ成德大寺内大臣會津宗保等ノ所爲ニ出テ候樣子聊相分リ實美公にゝ何方迄茂御恭順御待罪ノ御覺悟被爲在候上恃ム處之長州之兵ハ義論兩端ニ相成御親兵ハ八百余之中戈ヲ倒スル者十の七ニテ進擊ノ目的更無之出雲守ヲ以テ内々情ヲ公ニ上申ス依テ各卿御評議之上大佛に一旦御引拂ゝ相成其上猶御評議モ可有之被仰七卿初吉川益田同勢五千計リ御隨從大佛に御移轉ニ相成長兵ヲ以テ惣門ヲ相固メ同所大廣間ニ於ゝ御親兵中頭立候者共に公ヨリ進退之策評議可致旨被仰付候間牧泉等之年長ゟ信道等ニ至迄一同集議候處或ハ大和ノ義擧ニ合シ事ヲ擧ルトノ議アリ或ハ夜襲敵ノ不意ニ出テ生死ヲ一戰ゝ決ス可シトノ議アリ七卿

ニ之御別席之御談議ニ有之處是も御見込區々之御樣子ニテ黙而之承知不致特リ公之御議ハ何方迄も御歸館被爲在恭順御待罪ニ相成聊ニテモ御不臣樣之御振舞被爲在候而之是迄之御赤心御貫キ不爲遊間是非御歸殿被遊トノ御議ニ漏聞仕候然ニ猶一同評議致スニハ公之御誠實實ニ感泣ニ不耐然ニ今日公之御一身ハ皇國之浮沈ニ相係ル間是非トモ其儀ハ御諫止申上如何トゾ決策致シ可申談議中益田右衛門介久坂義助等曰何分幣國ニ七卿引受防長ヲ以テ千早金剛柵トナシ徐ロニ後擧ヲ謀ル可シ今日ノ勢ニ及フモ皆我藩ノ爲ニ出レハ外ニ七卿ヲ付詑シ傍觀スルノ義ナシ是非長州ニ御隨從可仕頻ニ主張シケレハ其議同人共ゟ公ニ御進申上候得ハ不被爲得已御承諾有之依而七卿ヲ初メ衆議一決直樣夜ニ乘シ大佛御引拂ゝ相成タリ相從フ人々ニゝ吉川益田牧宮部當りの人々頭立隨從イタシタリ轟木信道等ハ御親兵中同志之者三百計モ申合一同隨從致候ゟ無益之事也會兵必ス七卿ヲ尾擊セン我等ハ殘りて是ゝ當り七卿ヲ慫ナク落シ奉リ余生ゟハ迹ヨリ追懸ケ申ス可シト其次第公ニ茂申上御暇ヲ賜リ大佛ゝ居殘ル者モゟり寺町邊ニ備ル者アリテ追兵ヲ相待候處豈人モ無之其儘歸來八月中京師ゝ殘居兩人中川宮會津ノ樣子且聖上之御起居ヲ奉伺候處是も御寢所ニ會津中川宮德大寺內大臣殿初突入有之乍恐束縛罪囚ノ如く致居候由ニ候得共全ク御慫ナク被爲在候由承屆ケ候間直ニ長州ゟ御迹ヲ追奉リ下向候處公ヲ初メ奉リ七卿共ニ同所三田尻之浦津毛利家之別莊ニ御寓居被爲在諸方隨從之人々も御邸內ニ在之候樣子ニ付直と拜謁京地之景況上申致シ候處　聖上之御慫ナキ御樣子ヲ御聞被遊大ニ御喜悅被爲在候然處長州之事情俗論沸騰既ニ七卿ニ迫ランースルノ勢有之隨從之人々大ニ危ミ公ゝ茂土藩ゟ御移住之御內議中須布政之助中村久坂等有志之人々京師より歸り來り政府の俗論ヲ打破り漸ク國議一決七卿ヲ引受ケ毛利家ヨリ其寃ヲ相解ノ儀ニ決セリ於于茲同所御滯留之儀ニ相決シ依而ハ隨從之兵千三百余も有之無規則ニ而之相治り不申且諸方ゟ拜謁等を願ふ者も有之旁御邸內ニ會議所ヲ被爲置同藩政府より壹人隨兵中ヨリ五六輩右懸被命隨兵之事務ヲ辨理シ且回復反正之謀議ヲ主ル實美公ニハ六卿ヲ初奉リ隨從之士ニ至迄御統轄ッ被爲在常ゝ順道ヲ被爲守候御主意ニ被爲在候中或ハ長防ノ兵ヲ六千人相スクリ是ヲ三隊ニナシ一ッハ天王山ニ倚リ一ッハ男山ニヨリ一ッ佐賀天就寺ゟ倚リ三方犄角シテ京中ニ間ヲ放チ人心ヲ疑懼セシメ其虛ニ乘シ京師ヲ乘落サン事ハ防長の兵ヲ九千相スクリ三千ハ麻耶山ニ倚中國ノ通路ヲ斷チ三千ハ和州高野山ニ倚リ一時ニ和歌山城ヲ落シ一隊三千ハ大坂城ヲ落シ是ニ倚リ諸藩之糧米ヲ絕チ楠公尊氏西上□□□ノ策ノ如クシテ京敵ヲ拂ントノ策アリ實美公ハ斷然御動キ不被爲在何迄も順路ヲ被爲蹈度思召ニテ御詠ゝ「月と日ゟ清き鏡ゝく ちせぬは丹き心のまことふりけり」また御陳情之御上書も有之其御主意ハ大塔宮獄中之御上書ヲ辨奉るよりも一入御誠意相貫キ讀人愈而感泣せり將義論紛々ノ中兵ヲ擧クルノ議ハ時未タ早シ何分防長ヲ以テ千早金剛柵トナシ能ク二州之內ヲ協和シ山陰山落賊○陽ヲ初メ九國四國之地エ說客ヲ遣シ同志之諸侯ヲ誘ヒ大內義弘上京之期の如く堂々上京縱令鳳輦者何所エ遷シ奉ルトモ楠公千早城ニ居テ隱岐ノ出テマシヲ願ミサル如ク唯勢形ヲ張リ名分ヲ以テ天下ノ諸侯ヲ正サハ皇運挽回ノ期不期シテ至ルベシト云衆議一決シ公ニモ右ニ御同意被遊候間久シク御滯留之御覺悟ニテ居ヲ山口ニ被爲移持久之御策ニ決シ候間信道轟木武兵衛兩人儀ハ國許ニ立歸リ肥後之國ゝ公の御緣も有之候ニ付死ヲ以盡力可仕公も亦其思召ニ被爲在候間十月廿五日御暇ヲ賜歸國候事

〔山田十郎引取書〕

同月十八日ニ至リ變動差起當朝小坂小四郎其外一兩人何方ヘカ罷越候筈ニテ清和御門前ヲ罷通候處御門ヲ堅メ內ニ大勢之聲致シ其節迄ハ未タ日之出前ニテ早朝ヨリ右之通御門ヲ差塞キ大勢相集候儀何樣不穩模樣ニ付一刻モ罷歸淨華院エ爲相知可申ト引返右之趣兄小坂大八エ爲相知候間夫ヨリ一統エ申遣先鼎藏一人三條樣エ罷出樣子相伺若變事致出來候者早速可申遣候間孰モ致在宿候樣申聞急罷越暫致シ變動差起候間罷越候樣申遣候間壯年之者ハ暫殘置年立候者迄罷越候節ハ日モ早立揚居候比ニテ直ニ參殿拜謁相願候處不被爲叶旨ニ付諸大夫丹波長門守ト申者エ逢樣子相尋候處三條樣已上マヽ　朝參并他人面會等被差留候ト之旨ニテ如何之御趣意ニテ右之通被仰付候ト申儀ハ相分不申鼎藏儀モ十郎列ヨリ以前ニ拜謁願出候得共同樣ニ候得者何共樣子不相分何樣殘置候壯年之面々モ不殘呼出可申ト使差立候處孰モ馳參口々ニ趣意相尋候間何事ヲモ不相分段申聞候處若年之面々ヨリ申出候者何樣今日之儀　朝廷ニ變差起候ニハ相違無之左

候得者三條様ニハ既ニ被爲蒙　勅勘候得者致方無之何時迄モ此所ニ悠々トシテ罷在候譯ハ有之間敷兼而變差起候者御所中詰所ニ駈付候様被仰付置候間九門差堅入候事相叶不申候者打破候而罷通可申抔論起或ハ右之通打破候者無謀ニテ又被行候事ニモ無之三條様未タ御惣督之儀ハ御免ニ相成不申候間御差圖ニ隨可申抔申候者モ有之何様長門守ヲ以テ奉伺其上ニテ處分之筋可有之ト同人エ其趣噺聞御様子伺呉候様誰ヨリカ申入候處其儀ハ既ニ議奏衆迄先刻伺ニ相成居候間暫相待候様申聞其比ハ五六藩之親兵駈付釜混雜甚師右往左往ニテ押移居候内三條様鷹司關白様之様ニ御出候而朝廷之御模様御直ニ御伺取ニ相成候段被仰出候間左候者諸方之親兵不殘馳集候様可申遣ト處々エ相觸候處或提鎗又ハ甲冑ヲ着シ馳釜候者モ有之三條様ニハ御馬ニ被召大炮抔御先ニ備ラレ親兵悉ク御供申上鷹司様之様ニ御出ニ相成候處境町御門モ閉有之鷹司様表御門ヘハ通シ不申候間裏御門ヨリ御入之筈ニ候處是又明キ不申候間鼎藏列差圖ニテ御門明ケ不申候者大炮ニテ打破可申ト大炮繰出候處漸ク明ケ候間被爲入候得共關白様エハ　御釜内ニテ御下り無之旨ニ付御待合可有之トノ御事ニ付十郎列年立候者ハ大方御門内ニ上り居候處度々　勅使之由ニテ六七輩御同道ニテ被爲入候御模様ニハ候得共御噺御都合等ハ何共承不申其内阿州世子御出ニ相成候得共是以御面會者御斷ニ相成候趣ニ付十郎列其外諸藩之者共ヨリ拜謁相願今日之儀未タ如何之御模様ニテ如此變動仕候ト申儀ハ不奉存候得共何様奸臣之所爲ト被考候間是非曲直急ニ相分候様御盡力相願候段申上候處勿論今日之儀御身力之被爲續候丈ハ可被爲成御心配旨被仰聞御立之節三條様ヨリモ御逢ニテ宜敷賴被思召候位之御挨拶有之居候哉ニ奉見受候其前後之内長岡直人殿内膳殿爲名代參殿ニ相成三條様エ拜謁願出ニ相成候間十郎取次其旨申上候處直ニ被成御逢御緣者之譯ニテ被成御賴候ニテハ無之候得共今日之是非曲直御家ヨリモ御周旋御賴ニ相成候ト歟御沙汰有之哉ニ承左候處　勅使被爲入一刻モ關白様ヨリ御引拂ニ相成候様被仰達候由ニテ一先大佛之様ニ御動座可有之旨ニ付又々混雜甚敷無程御同所御出立ニテ漸ク夜四ツ時比方廣寺大佛堂アリヘ御着ニ相成候處同寺ニテモ右往左往ニテ此末如何御處置ニ相成候共相分不申前文九坂義助ニ逢候處同人ヨリ如何御處置ニ相成候而可宜敷哉相尋候間此場ニ至候而者處置モ所分モ付不申候此所ニ御踏留ニテ御歎願ニ相成候歟又ハ會藩ヲ相手ニ致防戰候歟ニテ無之候而者外ニ見込モ付兼候段申向却說七輩之御模様ハ如何ニ候哉相尋候處未タ如何共御決議被出來兼此所ニ御踏留ト申而モ差寄兵粮サヘ無之一先長州之様ニ御供致候ヨリ外ハ有之間舗段申聞候迄ニテ外ニ御様子モ承知不仕親兵中ニハ色々論說有之若三條様奉始其餘之六輩長州之様ニ御開ニモ相成候者親兵之儀者此儘相別罷歸候テハ餘リ無詮事ニ付此所ニ居殘リ　朝廷之御趣意今日之是非曲直伺取候上ニテ引拂可申抔申合候得共論說迄ニテ諸藩之集勢ニ候得者可被行様モ無之其内ニ七輩長州之様ニ御下りニ相決候段致承知候間十郎儀者御別ニ拜謁相願其外思々ニ拜謁相願御暇迄申上親兵一同同寺引拂淨華院之様罷歸居候處會津ヨリ武兵衛十郎列エ討手差向候抔風聞有之仍而同人列初覺悟ヲ究各甲冑等ニテ罷在候次第是又武兵衛引取書之通ニ候處其後御名代内膳殿武兵衛十郎儀殊之外氣遣被申候由ニテ木原彦四郎ヲ被差越兩人儀於御國御用之筋有之候間被差下候ニ付其序三條様御落着所彌長州ト申事モ相分不申候間奉見屆罷歸候儀者如何ニ可有之哉其旨致承知候者共通可被仰付トノ旨内意御含メニ相成候段相傳候間兩人共御請申上候處追而於南禪寺御本陣前條之通被仰付三條様御落着向奉見屆候者御國下着之上其段筋々申出候様左候者御前様ニモ可被遊御安心候段被仰渡候間十郎ヨリ長州エ罷越候者トウデ暫ハ暇取可申段申出候處其儀者致方無之候得共願曰差急罷歸候様被仰付候間次エ下り家司愛敬左次馬エ長州之様ニ罷越候者暫ハ是非隙取可申段申聞候處左次馬ヨリモ夫ハ致方無之併可成丈ハ差急候方諸事都合可宜段申聞候事ニテ内膳殿内々ヨリ金子ヲ兩人エ贈賜ニ相成即日京都致發足大坂エ着シ長州便船相尋候得共一切無之彼是心配致居候内姫路藩河合惣兵衛ト申者エ致出會武兵衛儀ト種々及談合候次第是又同人引取書之通ニテ右便船一切無之候ニ付再上京仕長州留守居村田次郎三郎ト申者ヲ賴ミ大坂之長州藏屋敷ヨリノ世話ヲ以テ船相調出船致シ防州之港エ致上陸三田尻エ着仕早速三條様エ奉拜謁御名代衆ヨリノ内命等委細申上候處不怪御滿足之旨ニテ其後追々被召出或夜被召出候節十郎見込之趣御尋ニ相成候處其比迄ハ大佛御引拂御途中ヨリ義兵ヲ被成御募候檄文致出來鼎藏ハ四國路土州土方楠左衛門ハ藝州之様ニ被差越候事爲有之由ニ候處未タ孰モ罷歸不申内ニテ矢張右等之御見識ニテ猶御義舉之御氣取ト奉見受不憚言上可仕ト存十郎見込ハ大略三等ニテ

第一策ハ只臣之節ヲ被成御守此儘直ニ被遊御上京　朝廷エ御歎願被爲成候者御上策ニテ可有之夫ニテハ餘リ策盡謀窮丸之無謀之樣ニ被思召候者第二等ハ此所ニ被成御踏締御陳情之表ニテモ御差上ニ相成候而者何程ニ可有之哉之段申上候處陳情之表トハ如何之儀ニ候哉御尋ニ付大塔宮獄中ヨリ被爲奉候體ニ被成御做　朝廷之御裏手之樣ニ御差廻ニ相成候者　主上ニモ能々可被遊御聞屆何樣此所ニテ御義舉等之思召ニ被爲在被遊御妄動候者第三等之下策ニテ可有之奉存候其子細者無恙會薩カマヽヲ御討誤有之候者御誠忠相顯レ天下ニ劣ヲ入候者有之間敷候得共萬一御討損ニ相成候節ハ如何評可申哉彼等者挾　天子居候事ニ付彼ト相抗セハ我却而不臣之名ヲ取可申山是願曰第二等ニ被爲有御處置度段申上候處尤ニ被思召候御樣子ニテ其後御書附致出來十郎エ拜見被仰付武兵衛ニモ爲御見被爲成候處御情實相貫居候樣ニ拜見仕其後　朝廷エ御差出ニ相成候哉否ハ存不申其砌於長州者種々論說差起居又久留米水天宮神主ニテ致脫藩候眞木和泉守者於京都表長州之本陣嶢峩天龍寺エ一備天王山エ一備人數押出　朝廷エ及歎願若御取揚無之節ハ兩所ヨリ致應援薩會ヲ挫可申抔論シ長州高杉晋作ト申者抔ハ會薩之奸ハ顯然タル儀ニ候得者歎願等之儀相用候ニ及不申直ニ打潰シ可申抔申出鼎藏儀ハ手前ヨリ手ヲ出候儀ハ不宜敷長防ニ被成御踏締此所ヲ千鍬金剛ト被成御定内ヨリ動不申時ハ必外ヨリ變動致可申其時變ニ應シ策ヲ施シ可申トノ論ニテ長州人多此說ニ同シ居候事ニ御座候

〔小坂文書〕

丹羽出雲守方聞取書

八月十八日曉八ツ半時比　禁中俄ニ騷然タル事ニ相成夜中何事ニカト驚居候内關白殿下ヲ除外傳奏議奏衆ヲ始御國事懸り參政諸卿達ニ至迄都テ朝參御差留之御沙汰ニ相成其他　禁中宿直之公卿衆方御守衛御人數ニ至迄　禁門出入一切御差留ニ相成如何之御模樣ニ候哉一圓相分不申不審無申計候所猶夜明候テ右傳奏參政之諸卿達都テ人應對他出等遠慮有之候樣トノ　御沙汰有之猶々疑念難晴三條卿御初前夜四ツ半比御退朝之時分迄ハ專ラ大和　行幸之御調等有之叡慮聊モ御變動不被爲在不怪御勇鋭之御樣子ニ被爲在候處唯一時ノ間ニ變換仕候儀ハ必定姦邪　主上ヲ要シ　朝議ヲ傾ケ　叡慮ヲ惑シ不軌ヲ圖ノ亂賊之所作ナルヘク何樣徒ナラヌ有樣ニテ　禁中ノ御大事此時ト段々事情探索之所中川宮樣御初會津侯抔夜中不時ノ　御參内有之候ヨリ事起候トノ風聞ニテ兎角ノ事ハ一切相分リ不申其内諸藩御守衛之兵士追々馳集何故ニ御守衛ノ兵士九門内之出入被禁候哉抔尋來三條殿ヘ會シ候者六百人餘ニ及ヒ皆々　禁闕ノ御模樣相伺候ヘトモ三條卿ヘモ一圓御承知無之何分不容易形勢ニテ　主上ノ御身ノ上モ如何被爲在候半ト御懸念ノ餘リ何分安座シ給フニ得忍ヒタマワス　禁闕ノ御事情御窺トシテ關白應司殿迄御參殿ニ相成候所殿下ニハ最早　御參内後ニテ自余ノ諸卿達モ跡先ニ御參殿ニ相成一同御窺ニ相成候ヘ共殿下ニモ一切御承知無之トノ事ニ而何モ相分不申兎哉アラン角ヤセマシト種々御討論被爲在候中柳原樣　勅使トシテ關白殿ヘ御入來參集ノ諸卿達ヘ命を傳ヘ給ふ趣ニハ既ニ今朝他出人應對等御差留之御沙汰ヲ蒙リナカラ犯シテ他出有之候儀違　勅ノ姿ニ相成重々不可然候ニ付一刻モ退散有之屹ト愼罷在候樣トノ御事ニ付爲方無之右御守衛御人數　禁門出入之所ハ平常通被仰付度トノ儀御願置ニ相成其夕七ツ半比關白殿御退出御守衛ノ御人數關白殿ヘ其儘被差置候テハ如何ナル大事差起候哉モ難計勢ニ有之候間一ト先三條卿右御人數御引連大佛迄被成御越同所ヨリ御守衛ノ御人數御歸ニ相成申候右畢テ大佛ニテ御評議有之部下ノ勢ヲ察スルニ三條卿洛中ニ御座被爲成候テハ忽爭亂ニ及可申氣色ニ有之萬一鞏殼ノ下ニ於テ騷擾ニ及候テハ何分難被爲忍御譯柄ニ付一ト先長州迄御開被遊洛中靜謐ノ上緩々寃抂ノ由ヲ御嘆訴被遊其上ニテ御上洛可有之トノ評決ニテ不得止事長州迄御開ニ相成候由中ニモ三條卿ハ無二ノ御寵命ヲ蒙リ給イ　叡慮ノ所被爲向飽迄モ御汲察ニ相成居候ニ付今度一時ノ變亂ニヨリ譬ヒ御身ハ江山萬里之外ニ在ストモ一日片時モ九重ノ御事ヲ忘レ給フ事不能慨慣ノ御涙無乾時御心中ノ御苦酸不可測實傷間敷御有樣ニ有之由然ニ長州御寄寓ニ付テハ是モ非モ長州御同意ノ樣ニモ有之由ニ候得トモ決テ左樣ノ義ニ無之三條卿ハ前條ノ通不得止長州ヘ御寄寓ノ事故三條卿ハ三條卿ノ御定見長州ハ長州ノ國是有之一般ノ御所置ニハ難被爲至トノ事

一仙洞御所邊り夜半頃頻ニ鉄聲相響是ヲ相圖ニ會津侯多人數引率參内有之中川宮樣モ御同樣其他五攝家ノ内ハ近衛樣御

父子二條様一條様議奏衆ニハ德大寺様諸侯ニハ因州阿州抔御參内ニ相成候トノ事

一七月末頃ノ事ニヤ中川宮様九州鎭撫ノ命ヲ被爲蒙候處更角御受遲緩ニ及ヒ候ニ付　主上ニハ深御苦腦ニ思召給フ折柄有栖川宮様　御參内被爲在候ニ付　主上宮ノ御手ヲ被爲執九州鎭撫ノ事偏ニ卿ヲ勞度一日モ早ク下向有テ　朕カ憂鬱ヲ慰セトノ　勅命ヲ被爲蒙候ニ付宮様ニハ深御感激被遊誓テ成功を遂給イ奉安　宸襟可申上トノ御決心ニテ被爲受命候即日ヨリ婦女玩好抔一切御遠ニ相成專ラ御下向ノ御用意最中ノ所右ノ變亂ニ付宮様ニモ何事ニカト急テ　御參内被爲在候處　禁門を鎖シ一切入レ不申一時計待セ奉御供ノ面々ハ推テ不入宮様御一人小ク〻リヨリ奉入候由漸　御參内被爲在候處左右悉皆壅蔽致候テ　主上ヲシテ不奉爲遇ノミナラス剩此已後ハ御召ナシノ　御參内ハ御用捨被爲在候様トノ事ニ付空敷御退出被爲在候由然ルニ此日可怪ハ宮様議奏衆詰問ニ被爲入候處是迄御役儀等モ被免置候中山殿正親町殿三條殿大原殿抔出仕ニ相成居候由宮様ニモ大ニ御驚愕被遊候テ如何ノ譯ニテ出仕被致哉ト被仰候處右三卿モ如何ノ譯ト申儀ハ存不申召ニヨツテ出仕致候段御答ニ相成候由

一鷹司様　御召ニ付　御參内被爲在候處前條之通左右前後悉皆壅蔽致一切拜謁モ不相叶漸間隙ヲ窺イ拜謁被爲在候由ノ處長クモ　主上ニハ薄氷ヲ踏ミ針ノ莚ニ座シ給フ　御心地ニテ深　御憂慮被遊候御様子ニ被爲在此砌　玉體ヲ不離心ヲ盡シ候様トノ密旨ヲ蒙ラセラレ候由誠ニ累卵ノ　御危急トハ此時ニテ臣子タル者此密旨ノ趣ヲ拜承シ悲泣セサル者無之トノ事

一阿州世子淡路守様ニモ召ニヨツテ　御參内有之候處　禁門警衛等被　仰付候ニ付御勤ニ相成其日ノ御模様段々御伺ニ相成候處多偏執之儀有之其事柄ハ先第一長州堺町御門警衛御免ニテ其跡薩州ヘ被仰付候ニ付御議論ノ趣ニハ長州ハ去年來尊攘ノ大義ニ於テハ國ヲ擧テ勤勞ヲ盡シ功多シテ罪少シ薩州ハ近比御疑ノ筋有之候ニ付　御築地内出入モ被禁置候位ノ事ナルニ長州ヲ退ラレ候テ疑アルノ薩州ヲ被進候ハ如何ナル御趣意ニ有之哉トノ儀會津侯ヘ御察討有之候由ノ處御返答ニハ長州暴發ノ間ヘ有之候ニ付右ノ次第トノ事ニ有之然ラハ何ソ確證ニ而モ有之候哉トノ御尋ニ相成候處慥ナル證據迚ハ無之トノ趣ニ付確證モ無之儀ヲ右様被　仰付候テハ公平正大ノ朝議ニハ如何可有御座哉トノ儀猶御問詰ニ相成候處會津侯一言ノ反答無之閉口被致候由依之淡路守様ハ御不同意之趣ニテ半途ヨリ御引取ニ相成候由

右ハ三條様諸太夫丹羽出雲守口上之趣ニテ此外ニ密命も有之候ニ付　御直對被仰付候ハヽ段々言上ノ筋モ有之候ヘ共其儀不被爲叶候ニ付　密命ノ稜ハ左し省キ一應ノ處及話頭候トノ事ニ付聞取ノ趣記錄仕候事

〔仝　書〕

宸翰寫

一此頃世上騷擾由甚心痛之事ニ候昨年八月十八日一件關白始予之所存を矯候ニ而之決而無之且其後申出候件々各眞實ニ候僞勅之風說有之由候得共必々心得違有之間輔事

一親征行幸之儀甚不好候得共段々差迫言上ニ付實ニ無據大和行幸申出候得共實ニ意外之事ニ候得之延引申出候事

一十八日一件守護職之儀故肥後守に申付候同人忠誠之周旋彌令感悅候決而私情を以致候儀ニ而之無之候共旨無間違可心得候事

一長州人入京之決而不宜事と存候此儀茂各疑惑ふ幾様之事

〔採　標　錄〕

一殿下之御内之者（雅田伊豆）へ直ニ承申候得之八月十八日關白様御參　内被遊候處平日殿下之御詰被遊候八景之御間ニ之机抔引ならへ中川宮之御詰所と相成居候ニ付麝香之御間トゟ申候而宮様方之御詰被遊候御間ゝ御扣被遊候處書頃方七ツ頃迄何之御沙汰もなく撫たなさへ御一方も御打合不被成茫然として被爲入候處七ツ頃中川宮様御出被遊候而被仰候ニ之只今主上御召被爲在候委細之儀ハ　御上方御直ニ可被　仰候得共前以爲御心得申含置候是迄之儀を以色々と被申立候ハヽ必御怪我可被成存候右御含ミ致候委細ハ　御上方拜聞ニ相成候様と申捨ニして別間へ御入被遊候由夫方　御前に御通

り被遊候處　詔ニも春來種々苦身大儀ニ存ル然處今日之形勢ニ相成乍此上萬々精勤之程頼と被　仰候ニ付殿下之御受ニも今日之形勢とも格別之　勅ニ奉存上候如何之御模様ニ被爲在候哉平時頃　參内仕一向何之御様子も不奉拜聞只今迄空敷差扣居申候間委敷被　仰付度と被仰上候由之處事柄ハ何共不被　仰候而何分此様子も不容易深御頼被遊候とのミニ而別ニ　勅も不被爲在候間　御前御引取被遊候ゝし關白様ニも中川宮様方虚喝を以御泊被成候而様々と奏聞ニ相成候よりとも直ニ御推察被遊たる御様子ゝ候得共滿　朝御意外之御方計ニ而強而被仰建候而も勢不能ル處ト御見切被遊默然として御退キ被遊候由

一殿下ニも御辭職御願被遊候由之處御免無之御差扣　被仰付候由惣躰之御格ニ殿下之御差扣と申も更ニ無之由今度初而御座候ト承中候右新規ニ殿下之御差扣ト申格之出處ハ全中川宮方ゝ噂致申候

一前條咄申候ものゝ噂ニハ此節之事種々深探索仕候得共薩ハ格別手出し不申由あまねく宮二條殿會津ト申候薩ハ十八日之日ハ宮方御警衛ニ罷出候様被仰候故人數差出たると申候様子ニ而格別會議ニ預り候様ニハ少も不見由勿論謀申候も難計とゝ余程深探り申候上之咄之由

前川太宰大疑

一有栖川宮御内之ものニ承り候人方傳聞仕候得ゝ十九日朝有栖川若宮之御咄ニ昨夕方　御所ニ而見狎ゑぬ堂上之不怪色々ト世話致候ニ付能々見候處白爾てゐりしと被仰候由右ハ傳聞ニ候得共咄之出處無相違候事

一主上共日ハ御身くるハしき御模様ニ關白様御伺被遊候ゝし

一關白様ニも今暫之處ハ御引入被遊候而世之動靜を御覽被遊候御模様之由

〔文久三癸亥年〕

〔尊攘錄探索書〕

係密

八月十七日十八日

京都動靜一變聞込書取

京都動靜一變

當月十七日夜九ツ時頃　中川宮様方御使者ヲ以宮并一條殿初攝家方御參　内儀奏加勢葉室方御使者曾津侯稲葉侯俄ニ參　内中山正親町同三條阿野殿等參　内兩役并參政國事掛寄人共參　内被差留長州界町御門警衛被　仰付置候處引拂候様被　仰出跡代り警衛所司代ニ被　仰付候由然ル處長州彼是申引拂不申餘程六ケ敷候處種々談判遂に引取候由其内何歟騒立關白殿御參　内御留守館へ例之浪士共列集會議此集會之節參　内被差留候議奏傳奏參政國事掛寄人等之内も參られたるの勢此處如何謀有之たる哉忘候事　論有之候由之處是も公卿方行向示談先ツ退散候由其内段々例之列共騒立小具足甲冑ニ而大炮抔も引出し妄りニ徘徊仕候ニ付上杉家等警衛被　仰付其外警衛之諸侯方も武器抔取寄候由薩州者元之通警衛被　仰付候様相成候由餘程之騒ニも可相成躰ニ候處先ツハ鎮り候由在京之國持諸侯方不殘參　内被　仰付翌十八日夕刻迄ゝ皆出揃ニ相成候由右ニ付會津并所司代兩侯心配筆紙ニ難盡由此度之大和國　行幸軍議　御親征之御沙汰ハ止ニ相成候由右等之御書附類跡方可差出先ツ右迄申越との事ニ而有之候

右者當月十八日出昨廿二日着京都守護職松平肥後守所司代稲葉長門守兩侯御連名ニ而此表惣關老方御連名ニ參り候由之御書面今夜於板倉邸内々友人方一寸一覽候處何分未タ爲取度儀も難申出依而覺居候處退而不取敢書取大略右之通聊ハ相違も可有之いつゝ四五日内ニハ爲取儀も可叶歟尤會津留守居石澤方も今書内々此咄有之同人も同邸へ申來たるニハ無之板倉邸へ被呼出承知仕候議之由右ニ付會藩京師方下り居候留守居外島小室兩人今日　御城ニ出居候との事ニ御座候（中略）

一此度京師之一條天下人心大抵皆喜び可申薩州方之盡力ならん抔と申居候事

右之通聞込候儘を書取ニ〆差出申候以上

亥ノ八月廿三日夜三更認

所司代稲葉侯俄ニ

〔江戸返達御用狀扣〕（文久三年ゟ元治元年迄）

亥八月京都より來狀寫

一此程當地混雜之初ゑ中川宮様初其外國事掛公家衆と長州様謀叛ニ而　天子様奈良より伊勢行幸被遊御留守中御所不殘燒拂跡ニ大内裏御造營致し候得ゑ年數相掛候故其節ゑ　天子様長州ニ引取後ロ立ニ致關東と合戰致し候心組を如何之譯ニ候哉當十七日夜中川宮様御返心ニ相成俄ニ長州之御警衛御免被仰出候境町御門之長州固メ會津様と所司代様詰替ニ御出被遊候處いろ〳〵取合埒明不申　御所より　御勅使參り長州も無據引取申候右國事掛之公家衆之内ニも三條西様四辻様外ニ三人計長州人數浪士守護いたし出奔被致候右之内ゑ諸道具無之加之明ニ御座候國事掛之内ニも廣橋様ゑ參内御差留ニ相州候計ニ御座候右ハ長州之人數山崎西之岡道ニ屯いたし兩度押寄可參も難計候付　御所ゑ其用心ニ御固メ嚴敷御座候近國大名衆不殘御用御召ニ相成夫々人數大筒鐵炮持參ニ而上京被致候紀州ニ壹萬人之勢ニ而上京之旨被仰進候藤堂ゑ昨夕も三千人計着致候二條御城ゑ彦根一手持ニ御座候并清水付之役人五百人計城内ニ引越相成申候昨年よりいろ〳〵亂妨致し候長州抱之浪人共不殘逃去候様ニ御座候間先々市中之亂妨ゑ無之と安心致居候依之奈良伊勢行幸も御延ニ相成申候（中略）

一加州ニ茂御用御召ニ御座候

一近國大名御固場所付

逢坂口　笹山様　亀山様　牧方并諸逢　高槻永井様　伏見街道　九鬼大隅守様　下鴨口　水口加藤様
山崎ゑ　松平甲斐守様　橋本　福山阿部様　洞峠　淀稲葉様　戸田采女正様　仙石讃岐守様　木多主膳正様　分部若狭守様
右之外ロ々御固メ御座候荒増申上候

一薩州様もそろ〳〵關東方ニ相成候風聞ニ御座候土州因州備前とも御同斷此姿ニ而ゑ不遠内江戸方ニ相成可申哉と奉存候（下略）

〔探索書〕（文久三）

一十八日之曉八時分中川宮様前關白様御參　内火急ニ薩會二藩之人數御呼集相成九門之固等皆引替被仰付御沙汰相成候事尤長州ゑ禁中執次島山三保介と申者御沙汰書持參堺町御門ニ來候事

一十七日之夜半頻りゑ炮發いたし何國ゑ何方共終不相分大方會藩ゟ成るゟしと人々言あへり

一十八日之未明より何とゟら世間騷敷相成候異躰之武士共馳廻り且九門ゑさし往來差留たるよし風說いたし候付錦小路様東久世様殿下ニ御出ゑて其當り之事御聞合相成候處殿下ニも何之御承知も無之御疑相成候迄之事いつを長州ニ罷越様子聞繕候へゑ相分ゟゟとの事故御二方長州屋敷ニ御出ニ相成候得とも様子可相分様も無之内堺町門御預り之御免御沙汰有之たる由告來候ゑ付彌姦徒蜂起　叡慮をくらまし奉り中興之業終ニ妨をゟし正義之徒を押潰姦俗入替りたるゟらんと評議をゟしつゝ且御歸りニ相成候衆此程禁中よゟ文箱來り候付大事ゟそ出來早々參　内申來賊と御披見有之候處御存之外參　内并他行人面會等も思召ニよつて被差留候との御事故彌姦俗之仕方ニ相違無之との御事ゑて其書直々三條家ニ御出之處御同様之儀故長州ニ而會議之上關白様ニ御出ニ相成候處殿下ニも更御存も無之色々御評議有之由其時分御親兵并吉川監物益田彈正其外人數等凡四千人計家ニ集り　御所御警衛可申と致候得共堺町とし有之候故關白様表御門を出　御所ニ馳付候途中ニ薩會之人數差留御沙汰之趣有之壹人も通路不相成とて最早鉄炮ニ火繩を懸差向鑓太刀抜身ニ而中々可通とも思ハゟす故空敷關白様ニ引取候由其中　勅使ニ而御親征之儀御延引攘夷者　叡慮何方迄も御替り不被遊長州ニゑ益々忠勤を盡し尊王攘夷專可仕との御沙汰關白様御殿ニ而御申渡被遊三條様を被始三條西様錦小路様東久世様四條様壬生様澤様御方　勅使柳原様御出ニ而今朝參　内他行人面會被差留置候處猥ニ他出逹　勅之段御役御免早々退散屹と慎ミ可有之との　勅諚故被長今朝程之參　内他行人面會被差留候御譯ゑ如何御事ニ而候哉と柳原

樣に御尋之處其通更ニ御存無之由ニ付又色々御評議有之阿州世子御扣ニ而御咄合有之候處湊路守樣にハ毛頭姦徒ニ御組し可有之樣も無之正義一偏ニ御盡力被致候との事ニ而既ニ先時參　内之儀會津より申來每傳奏衆より申來候處此邊も可疑事迚無程參　内ニ相成候處其歸りゑ御待なく大佛に御引退初メ四十餘之人數御警衛致候付御親兵之儀私ニ御取扱可有之儀ゑ御斷ニ而其中御親兵丈ケハ九門通し候由申來候付皆々夜半ニ大佛ゟ引取候事

一十九日之曉大佛より伏見に出山崎に宿夫ゟ直ニ長國に七人同道肥土米三藩より少々人數差添長之人數と共ゑ同廿二日兵庫より御上船被致候兵庫ニて承り候得ゑ九門之御預ケ彦根越前柳川岡膳所薩會因備成ル由是ハ聞留メタル咄ニ而ふく候へとも何ゑ左も有ゑしとの御噂其上越前御召且大原樣裏辻樣御免ニ而御出勤之由是も兵庫ニ而風說御聞被成候御咄なゑハ篤斗不相分候ふり

一益田彈正佐々木男也久坂玄瑞抔ハ少々樣子有之潛ニ亦々上京兵庫より引返し候由との御噂

一御兩役皆々參內他行而會等御差留之處傳奏衆ハ廿日ニ歟參　內御免有之候由是ハ武家之正邪且取扱振懸合等極不辨利ニ付被免姦清取計たるゑしとの御咄ふり

一殿下を共儘置たる處ハ御役人皆々押込候而ゑ彌直儀手を失候付兵を發し夫ゑては難儀ニおよひ候故暫にゑまな所を見付出し候迚差扣たるニて有之ゑし殿下にも定而正義之堂上ゝ御組し色々御計會も有之由姦等察を扣居候得共其邊ゑ御察有之能樣ニ御所置被成候故未タ其術中ニゑ御入不被成候然ゑとも十八日之朝ゟ參內ニ而十九日之何時歟御下り有之候故御家來何某頻りニ御諫申上早々御辭職不被成候而ハ如何ニ御身之上も可相成歟と大ニ御氣遣申上たる由申上候得ゑ殿下に茂暫も御側を不去樣との詔有之故夫ニ而ゑ身上如何相成候とも打ねらゑ候迚ハ相勤ゑしとの御意有之候由之事

（此ノ邊本ノマヽ）

九月

秋吉久左衛門
高山秋藏

〔佐々文書〕

○十七日迚ハ關白殿下ハ勿論三條樣初其餘之議奏傳奏衆其外國事懸り之御方々迚も御盛ニ　叡慮ヲ被奉大和行幸御手配等有之候處十七日之夜半ニ何方歟頻ニ炮聲太鼓ノ聲抔致シ候由

○十八日ノ朝丑ノ刻比ニ中川宮樣近衛關白樣御同道ニ而御參　內ニ相成候由未タ未明前澤樣歟壬生樣歟右一件御聞出被遊候而直ニ關白樣に御出如何成譯ニ而御座候哉と御尋ニ相成候處關白樣にも一向ニ御存無之不怪御仰天ニ而直樣御參內被遊候

○十八日ノ早朝三條樣初、、、之御方々御參　內御差留メ御他行御差留メ又人應對迚御差留被遊旨被　仰付候由之處是は筋々ゟも參り不申由然處其內御門堅も長州初何方も御門御堅御免之御沙汰書下り候へ共是も筋々ゟは不參候ニ付請取不申候處御門內ハ勿論宮門內薩州ト會津ノ人數夥敷入込甲冑兵杖等ヲ持運或ハ甲冑致候者抔多分有之不容易形勢ニ有之たる由三條樣にゑ前條之通りニ付不怪御仰天ニ而御身ニ疊り不爲在候付何樣姦賊之仕形ト被思召關白樣に御出之御積ニ而清和院御門ニ御立向被成候へ共御入込出來させられす直樣鷹司樣御裏門ニ御出（此時ハ諸方々之御加勢人數ハ勿論禁闕御守衛之御人數も三條樣に參殿直ニ御供也）被遊候へ共內ゟ一向ニ明ケ不申故三條中納言罷出候御門明候へと申明ケ不申候ハヽ打崩可申抔大筒ニ玉ヲ込差向ケ候へハ內ゟ門ヲ明ケ候ニ付御供之多人數もドロノヽト推入候由之處關白樣にハ最早御參內之御留守ニ而候事故暫此處ニ御滯座（此の御加勢人數ニハ甲冑ハ勿論鉢巻サヘ御免無之甲冑ハ御守衛人數迚也）之處猶朝廷ゟ御書下り其趣ハ參內他行等御差留ニ相成候處流勅被致不屆之至ニ付御役被差除慎被仰付との御事也

右之次第三條殿初七人之御方々朝庭ニ姦邪ノ者入込　主上ニ奉迫或ハ　叡慮ト號シ御沙汰ト申候而筋も無之處より公卿并諸侯ニ被仰渡等有之此上ハ無仕方此儘賊手ニカヽリ而ゑ昨日迚毫頭不被爲變　叡慮之趣も水ノ泡トナリ　朝廷之御爲ニ不相成候間當座假名ノ　朝命ニゑヨシ背クハ眞ノ　叡慮ヲ奉ズルニシカジト　思召サレ大佛殿迚御立退被遊候

由御親兵ハ勿論諸方より夥敷御供也

○同十九日伏見ニ御出長州ニ一先御下りニ御決定被遊候由　伏見迄肥後よりも御親兵并三條殿ニ御加勢人數之外ニ南禪寺出張ノ人數十九人御送申上様被命歩御使番并歩御小姓也

〔魚住文書尊攘雜録〕

京師來書抄　九月九日到來

方今形勢之荒増

一十七日三條様以下堂上方御役御免三十六卿と歟申候由

一同夜會津ゟ炮發薩ゟ螺を吹立中川宮様を擁し參　内之由夫ゟ直ニ九口御門悉ク閉切會人ゟ相固候由

一同十八日列藩御人數出張野生も寺町御門へ駈付申候然處殊外騒動ニ而皆々甲冑ニ而手ニ槍を提不容易様子併一向ニ御模様ハ相分不申其内三條様御親兵を御引連ニ而御參　内ニ相成候筈ニ候得共其儀ハ難叶趣ニ而御門一切閉切ニ付應司殿下之御裏門ゟ强而御入ニ相成申候併御參　内之無御座候其日長州堺町御門御守衛御免被仰出灘稲葉へ被仰付候處長州ゟ再應相願決而引取不申依之自然ハ異變も出來可致哉と一入動揺仕候得共再應之　勅命と申儀ニ付不得止静ニ引取申候其夜三條様以下之大佛へ御退候様被仰出候間三條様以下御七人直ニ大佛へ御引取相成候間諸藩御親兵も附添十津川郷士（先達而ゟ寺町へ出張居候）余計ニ馳加長州勢共ニ余程大勢之由吉川監物嚴重ニ防禦手配致相待居候得共其夜ハ異變も無之翌日堂上方ハ凡而長州ニ御下向毛利讃岐守吉川監物益田彈正以下奉警固山崎越ニ懸り御下向有之候由

一會ゟ追手を遣候筈ニ候得共阿州公子（年十七八）ゟ御支ニ相成余計御人數御主張（本ノマヽ）相成候間其儀ハ相止候由又兩傳奏様も御參　内被差止置候處是も阿州侯上杉侯御周旋ニ而稍々御出方ニ相成申候依之段々　御所内之儀ハ右阿世子ニ御委任ニ相成候由其後因州侯備前侯阿州侯ニ御内意專御周旋ニ相成三條様方御召返之御議論有之候間已ニ昨日御迎被差立候由

一阿因備上杉四侯御周旋ニ而御建白ニ相成筈ニ御座候由其事ゝ一昨廿二日之事ニ候得ゝ最早御建白ニ相成たるものと被相考申候其御趣意ハ此節昨日迄正議を被唱候御方々御退役ニ相成其他段々不安意之筋有之候間可奉献言　叡慮ニ而不同意ニ　被思召候ハヽ乍恐直ニ奉　奏聞度自然堂上方ニ而も中途ニ而御支ニ相成候面々ハ其向々ニ屹度御論談ニ相成此節之儀條理明白ニ奉伺度との御趣意之由ニ御座候一方之風説ニゝ此度之儀一圓　叡慮ニ不被爲在薩會之姦計ニ而中川宮様近衛様方取立　聖体を奉幽閉候抔とも評判仕候旁ニ付右四侯も屹度御伺茂有之候儀ニ可有御座阿州侯ハ十八日ゟ因州侯廿日ゟ歟備上杉ハ得斗承不申御參　内相成今以御下り無之由ニ御座候野生抔一向何共御達も無之得斗御趣意も分兼甚疑惑仕南禪寺之方へも懸合候へ共果敢々々敷事ハ無御座併右之如く諸藩之英君御周旋ニ相成居候事ニ候へハ先少ハ安心仕候事ニ御座候近來ハ彦根不怪張込ニ而此節も周旋致居候由

一御親兵ハ大佛ゟ引取申候處會津ゟ討手を懸候抔評判仕候間野生少々周旋仕候處其儀ニハ至り不申内膳殿懇厚之存念ニ而無事ニ取計ニ相成大安心仕候（下略）

先概略右之通位些少之儀ハ雖盡候

八月廿四日付

〔仝　書〕　　名無氏仕出

今夕早御飛脚被差立候ニ付一書致啓達候被相揃彌無事之由珍重之儀存候手前も相替儀無之候條安心可有之候然ゝ一昨十八日朝妙傳寺御門御出入御免近江屋甚兵衛參り御所中大騒動之由申候ニ付直様手前加人古庄儀右衛門を爲聞繕寺町御門ニ遣候處御門内出入出來不申外ゟ同加人小堀三右衛門ニ咄合申候處一切御門出入相成不申依而注進も出來不申との事前晩寅刻會津公御參内一旦御下り早速御人數出張九門ともニ御固御人數被差出寺町御門ゝ同様御番席ニゝ何之御達も無之御門番所ゝ同心被差出會津御人數御門ニ詰懸足輕ニゝ鉄炮を構上分ゝ下ゲ鑓ニ而今ゑ〳〵と相待候程ニ付此方様御人數も譯ハ相分不申候へ共直様出火御人數之節出張之通御番方十五人組貳拾五人手前ともの内壹人被差出申候尚様子次第二番手繰出候覺悟ニ心配致し居候内尚急ゞ御人數差出候様寺町ゟ申來候間七ツ時分大筒手初殘り御人數一

同出張大筒ハボヲト一挺行軍五挺御門ニ備置會津ト相固ニ而股立たすき合印合言葉迄究置何時ニも押破來候者ハ打拂可申覺悟ニ居申候處其後ハ相替儀無之次第ニ穩ニ相成申候へ共いつ何時大變出來も難計苦心遣ニ居申候前文三條様ゟたハ昨十九日早朝大佛之様ニ御發足ニ而長州御越ニ相成候趣歩御小姓伏見迄御供ニ參り御暇申受罷歸咄申候段々風説御座候へ共區々ニ而難定別紙御立退之御名前遣申候且又行幸之書付寫遣申候事

轉法西　三條様　廣幡様　東久世様　澤　様

右御方々様國事懸御役都而長州御立退之由候事

八月廿日　吉之允　一之助（野田一之助歟）殿

〔京都諸扣〕文久三年

八月十八日

一今曉七時比ゟ御所に混亂有之中川宮様近衛様二條様薩州因州備前會津ゟ御所之四方相固御親征ふと不宜段御陳奏ニ相成是迄右之説を御主張ニ相成候三條様を初御奏議國事掛等之面々ハ一切九門内出入不被爲叶候付三條様ニハ押而參内茂有之筈之處中々嚴重ゝ固メ有之候付其儀も出來兼一先ッ大佛に御立退ニ相成翌曉御出立長州に御閑ニ相成候事

右之儀ニ付御國許に中國路四日限之やとひ飛脚差立候事

右大佛に御立退之人々左之通

轉法輪三條様　東久世様　澤主水正様　西三條様　錦小路右馬頭様　四條侍從様　豐岡大藏卿様　追而之御沙汰書ニハ壬生修理權大夫と有之候事

〔仝書〕

八月十八日之曉ゟ御所内騒動ニ付而九口門出入不苦御方々左之通

膳所　分部　京極　會津　因州　米澤　土州　阿州　備前　所司代　二條殿家來

〔尊攘錄探索書〕文久三癸亥年

京都從ゟえや嘉兵衛之來翰

急便を以一筆啓上仕候秋冷御座候處先以其御家内様益御機嫌克已略下然ゝ當月十八日朝より武家方早馬或ゝ歩行立ニ而銘々手鎗引さげ鎧下等之着込ニ而追々通行有之往來何となく騒ケ敷事ニ御座候然ル處御築地内昨十七日夜八ッ時頃より之騒動ニ而諸家様方追々ゝ御固ニ相成候山風聞有之河原町邊ゝ土州御屋敷長州御屋舗より御人數差出ニ相成寺町邊之混雜大方ゟらす右何等之御事とも不相分候得とも越前様三万人之御同勢ニ而大津表迄出陣有之御上　京ニ相成候ゝ付御築地御警固之上尚以昨十七日夜ゟ銘々持口に相詰候様御申達在之洛中洛外之離散之諸御家中様かた集勢有之候付今朝之御混雜之由

堺御門御固毛利大膳大夫様御一手ニ而御門外とも御固有之セイヨウ鉄炮切火繩ニ而御嚴重之御備有之御築地外に御用ニ付御他出之公卿方様たりとも通門不相成右大變ニ付駈付御見舞等ニ罷出候もの迄も御差留相成御固御人數御入込之節ゝ其持口より通門其外いつゝたりとも通門不相成是迄御固無御座諸家様方ゝ其最寄御差圖之上其手之外通門不相成事ニ御座候蛤御門御固松平陸奥守様下立賣御門松平肥後守様松平相模守様中立賣御門御警固松平加賀守様乾御門御固松平隱岐守様今出川御門松平備前守様石藥師御門松平阿波守様清和院御門御固松平土佐守様御門外井伊掃部頭様戸田采女正様寺町御門御固細川越中守様此邊格別群集致し候由勿論大筒等不殘御門内に運入廣き御築地内ニ御人數滿チ明地も無御座御事ニ御座候同御門内ゝ薩州様一手ニ而御固有之候由午ノ半刻頃從五位候裝束ゝて騎兵本多主膳正様凡御人數三百人計鉄炮切火繩ニ而御通行有之申剋頃筑後久留米御人數凡貳百人計着込陣羽織等ニ而御通行在之同半刻頃右

同斷吉川監物様凡三百人計御守衛方大和十津川郷士百人計緋服連之陣羽織之出立ニ而立派ふる事ニ御座候毛利讃岐守様此内長州様御抱ニ相成候昨年來より木屋町邊ニ在宿在之候諸浪士組凡八十人計入込同勢凡五百人計通行有之右之大津表ニ出張在之山專風評有之候酉ノ刻頃寺町通り南公卿方様六方御具足騎馬ニ而御通行有之松平備前守様松平土佐守様長州様御家老様益田彈正様其外大和十津川郷士共外諸家様方勤兵之方々等之一手ニ而右御人數之内ニ加り何ゟも御紋附提灯を照し御先供大佛智積院ニ御着之頃之跡押阿部主計頭様御人數寺町三條邊ニ在之誠以きらひやゝ成る御事ニ有之候

右大變ニ付洛中之騒動大方ふらゝ御築地近邊之町方之老人小供なと遠方親類ニ退遣し諸道具等を持出候もの夥敷在之市中人氣不穩成此末如何可相成哉と薄氷を蹈候心地ニ御座處當廿一日頃ゟ追々ニ相鎖り只今之てハ平日同様穩ニ相成候事ニ在之候先之急便を以奉申上度如此御座候尚追々可申上候恐惶謹言

八月廿四日　認　　かめや　嘉　兵　衛

小　與　兵　衛　様

〔京都美耶解〕

秋草巻之八

爰ニ不慮之一大變動差起其事件形勢見聞大略左ニ錄上奉備閲不候扨關東攫夷御因循之綾ゟ追々　御嚴詔之趣ハ御承知之通亦復天幕之御間水臭く被爲成候事以前之比類ニ無之　朝威ハ追日御震盛關東之御衰威ハ月下之營火共譬可申歎說區々之折柄九州大名御談合ニて尙　皇武御合躰御周旋之國議差起居候様子ニ御座候へ共　叡慮ハ御如才ハ被爲在間敷奉存候へ共雲下ニ蟻集仕候勤王之徒ゟ自然ハ妨障之程も難計左候へハ意外難　勅も稜々有之御再熟神速ニハ參り申間敷抔と愁眉沙汰ニ一統暮候處去ル十七日夜ゟ私共非番ニ而在宿仕寅刻過　鳳闕之方ニ中り大炮之響キ數發相聞相宿ゟ起出　御方角見渡候へ共格別相變候様子ハ無之候へ共時ふらぬ炮聲只事ふらずと怪みふゝら皆々再ヒ寢所ニ就キ翌朝宿中取沙汰ニハ夜半之炮聲ハ囚州邸ニ大炮打懸大勢打殺敵ハ智恩院之方へ引取候と申左ゟゟハ相手ハ薩ニ而も爲有之哉抔と申ゟへり何様世上何とふく騒然只事ふらずと少々心掛ニ居候處外用之小者歸來諸藩之人々竪横ニ奔走事柄ハ相分不申候へ共餘程之騒動と相話り居候内堀内組脇駈來譯柄ハ承知不仕候へ共自然ハ御人數出候程も難計先貳番手迄御用意有之候様申捨寺町御門へ駈行無程歸來會津之同心出張居御門を鎖て一向ニ明ケ不申何分貳番之御方々一刻も御駈付可有之と此人數同道ニ而堀内ハ再度寺町御門へ馳參り肥藩之出張之人數と申入候間御門を明ケ申候由私共ハ前日當番致し殿り之處ニ而模様相待居野田一之助參り彌惣出之山ニ付卒度御心組ニ申上候と相知せ候間何レも共沙汰待兼居候處堀内書比歸來此儘南禪寺へ行彼方様子次第ニ惣押立と云々駈出無程南禪寺ゟ駈歸各鉄炮御持參ニ而一刻も此門内ニ御揃候へと觸流候間兼而銘々へ御渡ニ相成居候鉄炮ハ僕ニ持せ自身へハ鎗之留紐を解キ手ノ〳〵ニかるノ〳〵と提ケ身を堅メ立出候處四五人打寄居候前を通候處出陣之御神酒也と茶碗差付候間此時節ニ下戸之酒ハと打笑候處酒迦レハ運カ弱ヒ是非ノ〳〵と太キ茶碗差出候間左候ハヽ運之强メ申さんと居所ニ立戻十五日氏神へ備へ餘り之ハ美林酒經節之丸ゝぶりニ而小キ茶碗少々宛一二杯引懸門内ニ立出直ニ頭衆も打立出來門外ゟハ眞先キニ騎馬を早メ被急候ニ付皆々木氣ニ相成揉ゝもんて駈行申候共以前兩度ゟ寺町御門ゟ小者來催促仕候節道々之景氣ハ甲冑之上拔身之鎗或ハ大炮又小筒を持竪横ニ入違共人數ハ何百人彼所之連ハ何十人やう〳〵此處迄來候と色を失噂ニ及果して二條橋を打渡り寺町へ打出候處人馬東西へ駈違所々之御人數我不後レと互ニ押分推除往來之混雜見物人之込合も有之不一方騒動ニ付向キへハ戰爭最中といつゝも相心得誰一人必死ニ不成者ハ無之鎗を押直し〳〵騎馬ニ附添彼是十丁余小走致候間一統汗ニ染就中私事ハ醉が一時ニ打揚乾渴難忍去迎水を加茂川へ下り呑候半と存候へ共後レを恐レ夫も出來兼大ニ臍を嚙申たる事ニ御座候無程頭衆引次キ野田一之助松村十之允寺町御門ニ駈付潛戸扣キ候間同心ゟ相改メ皆々込入候而御番所を見渡候處御門内南手へハ會津之御人數鎗炮を揃へ必至度隊列五六十黑ノ〳〵と白鉢卷錦襷懸頭分之者左右ニ床机ニ掛り一人ハ小池帶刀一人ハ六十余之老武者也北手ハ御人數ニ而御門之中央ニ突懸車臺ボウト壹挺左右ニ合一三挺大筒手引添西

手ニ列を北手歩卒小銃を振向ケ一行ニ列ス東御門際ニハ河方半四郎側ニハ嫡子同苗文吾、河方、文吾ニ申付候ニハ其方ハ鎗ニ而突キ懸レ我等ハ鉄炮ニ而打散さんと鉄炮を擣ユ西ニ寄志水亀之允是ハ十八日書前之事ニ而金森兵左衛門八木田小右衛門ハ前夜當朝ゟ之詰方ニ而四時過交代右河方後に引添番士鎗を伏セ錦襖掛テ脂を締高股立多分素足也其時會士俄ニ色めき立歩卒ハ門際ニ必多ノ〳〵と筒先下ケ進寄ル重士ハ藁を押揉鎗ニ掘り添跡を詰ルを見て河方聲を懸何そ變たる儀も哉と問會士之内ゟ樣子打變候間覺悟を仕候と答フ河方ゟ敵ハ何方ニ而候哉と問長州之兵卒當所ニ押寄候由只今注進有之候と答へ息を詰成りを鎖メ門戸白眼て今哉ノ〳〵と待懸たり其砌會之歩卒小銃之筒を此方へ向置候者有之候故河方より小頭を以込筒を此方へ向被置候儀ハ御用捨被下度段申向候處會士一人來り不調法之段斷申候河方組之者共へ高聲ニて臍を白眼て打て筒先ハ上りたがるものぞと目ニ角立鞭を以大地を扣キ彼是武者振能く見へ候由頭衆着到ハタ七ツ前ニ而夫ゟ子弟共二ツニ引分ニ相成番所ゟ御門際ニ交代致候而終夜細雨を凌キ身粧を不崩銘々鎗を携イ居申候翌十九日廿日迄晝夜惣詰切り尤妙連宿中ハ相明居申候廿日ゟ人數二ツニ割妙連寺一晝夜之交代ニ相成十八日夜半御焚出竹ノ革飯梅干菜諸藩同樣ニ而路頭ニ喰棄候竹ノ皮　禁裡四方之大路いつ方も道巾四五十間も有之候處竹皮之爲ニ地面を埋メ九門之近所も同樣ニ而僅カ六七日之間ニ候へ共二三萬之人數晝夜四度充之食事ニ付左も可有之と跡ニてハ思當申候先此儀ハ扨置十七日來之事件尙跡々ニ返り言上仕候當時青連院之宮ハ粟田口ゟ中川宮へ御轉住一旦御束髪之處叡山ゟ御故障申出近頃尙御剃髪ニ被爲成攘夷寛速之綸ゟ朝議ニ不被爲容久々閑寛ニ被爲渡候へ共薩之三郎殿とハ國論都而御同腹ニ而懇切格別也此方十七日八ツ比會藩及薩士打混多勢之御行列ニ而俄ニ御參内有之時刻經而會津侯御同斷堂上方へハ近衛關白應司三傳奏當時遠政之御方々ニハ中山大納言大原三位閑散之諸卿段々不時參内有之同夕

行幸之儀ニ付麁暴之取計等稜々有之重疊不屆之至ニ付當役被差除蟄居被仰付候事

本書ハ未タ手ニ入不申大略右之趣此外議奏方國事懸都而三十六人悉御反覆輕重品々有之

三條中納言

右御達御座候迄御模樣存候卿ハ御一人も無御座大ニ不意ニ出候由共日因州邸ニハ御用人庫部權之允始重役之勤番士同藩士ゟ討取尋常ニ縄目を受候由其徒貳拾人余事情ハ攘夷家之面々ゟ當君侯へ長々追々建言等仕候へ共十ニ六七ハ庫部列中途ニ抑へ兎角攘夷を支へ候意恨ゟ差起候由併庫部も專攘夷說を拒と申譯ニハ無之元來因州侯ハ無二之攘夷家故側ニ侍候致候庫部ニ候へハ何レ是も寛急之筋ゟ珍事とハ相成可爲申被考申候前件ニ相記ス其夜半炮聲之事柄ハ間違ニ而會津ゟ同盟之先キへ相圖之鐵炮ニ而薩人ハ兼々何地ニ陰伏仕候哉鳳闕之四方ゟ會人と手を分出來り　御所之内外を取堅メ日來王生浪人とて襟ニ報國盡忠と記シ三百人浮浪と打交凡勁王と自稱致し信通致候間互ニ密事を語而此節會士と共ニ力を合セ此時初而會ゟ拘之浪人たる事世間へも相知レ申候翌十八日發曉會人四十余人炮鎗打混寺町御門内南屏下ニ不斗押來備を立申候御番所へハ金森兵左衛門松村十之允番士ニハ平井五左衛門高橋九左衛門隈部彦四郎貴田權内夜番ニ而詰合何事ふるぞと咄合候内向屏下ゟ番士一人來此所ニ御堅メ被仰付候間宜敷御賴申候定而御許へも御達可有御座と申向候處未タ左樣之御達ハ無之承知致候段相答何事ふる哉と相恠ミ最早七ツ比より同心ハ御門ニ詰會士ハ同刻ゟ大勢徘徊致候間何樣珍事也と早く此事を妙連寺へ注進致し候半と人を立んと致候へ共御門を明不申何事ニ而御座候哉と會へ懸合候處主人迄之　勅命ニ而事之譯ハ一向存知不申御問柄之事ニ付秘申たると跡ニ而覺候由是も明ケ方之事ニ而長人境町之御門ゟ兩人鎗を提ケ駈來尤白鉢巻ニ而有之只今會藩之御人數大勢風斗來主人大膳大夫預之御門ニ來相堅メ申候御當所へハ譯合御承知ニ哉と懸合申候間御見分之通會津ゟハ只今向ニ出張致居候へ共事柄ハ一圖存知不申と答候へハ其儘引取申候爰ニ一ツ之危キ事ハ其日辰刻過キ所司代稻葉丹後守之御人數境町御門長州之御番所ニ不圖致參向　勅命ニ而候御警衛御引替之爲罷越申候無異義御引渡早々御引拂可然旨申入候間當番之士卒無存懸事ニ而大ニ驚キ且怒近頃無存懸御申分ニ御座候左樣之儀ニ候ハヽ於此方も其御汰沙可有之其儀無之　勅宣とハ甚難心得假令　勅命ニ致候而も大膳大夫父子ニおるてハ奉　對王室功忠ニつて聊不忠不敬之稜ハ未々ニ至迄曾て一人も無之段ハ世上見聞之處也左樣奇怪之　勅宣ハ一圓御請ハ難申此上ニも無聞分强而被申募

候ハヽ是非ニ不及弓矢を以て被請取可被申と兼而狂國と指ス長藩士國家一代之大瑕瑾之境ニ臨候へと歩卒ニ至迄血眼ニ相成中ノ〳〵引渡候勢ニ無之此事早くも長邸ニ注進致し候間我もノ〳〵と追取刀ニ鎗を提ケ鐵炮携へ暫時之間ニ黒々と駈付淀士之前後を取圍ム亦稲葉家ゟも聞付ノ〳〵駈集ル現在全　勅命を戴キふから互之理非ハ扨置空敷引返ス法哉爭フ既ニ事よと見候間今曉ゟ左右ニ差扣へ候會藩之諸士どつと中ニ分入各方之御爭論御双方ニ一理ゟり未タ貴方へハ候と詰懸ノ〳〵相御振廻無之儀と被察御場所柄之事柄故何分我ノ〳〵共へ御任せ被下度可然取計可申と扱候處長士壹人進出我等共奉公筋之儀ハ主人へも相懸リ夫を他國之御方へ任せ候抔とハ近比心外之御相談ふり其所除候と鎗鞘ニ手を懸候處ニ吉川監物棄鞭打て駈來　勅命ニ而候皆々鎮リ候へと大音ニ叫ヒ候間一統差扣へ居候處同人ゟケ樣ノ〳〵ニ付一先御番所引渡可申追而君侯之御内存も有之候と無殘引連歸候道もから今見給へ此恥辱を三日之内ニ晴し申さんと商を鳴し皆々引取候由

十七日三條一同ニ

豐岡大藏卿　滋野井中將
橋本少將　萬里小路辨
烏丸侍從

右春來毎度相追言上之條々有之且今度　行幸之儀遮而矯　叡慮候段如何ニ被思召候哉依之差扣被仰付候事

東園中將

右同斷

右之段議奏加勢衆被申聞候

八月十七日

廣幡大納言　德大寺中納言

右依願議奏御役被免自分遠慮他人へ被止面會候

長谷三位

正親町大納言　柳原中納言

廣橋右衛門督

右議奏役被仰付候事

扨境御門之爭論ゟ彌洛中之騒動相湊ヒ轉法輪三條卿へハ前夕之御模樣ゟ惣師之御身之上候ケ樣ノ〳〵ニ付一刻も御館ニ參向候樣頭取之親兵ゟ觸流候ニ付所々ニ屯致居候親兵浮浪之徒も聞き傳へ取物も不取敢駈付候間十八日之未明迄ニ親兵千四五百居所を得兼邸内門前ニ押懸候泉河和攝熊野十津川楠家ヲ慕フ古風之郷士ニ至候而ハ其數何程と難見分爲有之由同日辰刻後高木求右衛門御門内隊伍之内ニ來所々見廻り如何之御用心ニ而かゝる非常之御結構ニ候哉と問如何成譯ハ存不申與力同心來御門之締會津ゟも見分之通也御門御警固之事ニ候へハ會津ニ應し如是次第也と答其以前朝交代として駈來候面々ハ大槻才右衛門村川作左衛門吉海準助轟万雄御物頭ニハ河方半四郎八木田小右衛門一番手として致同道候御物頭ニハ志水亀之允組脇堀内源之丞平士ニハ戸澤熊之允父子松浦清右衛門小橋恒藏小川次郎右衛門小林半右衛門養子共砌河方計ヒニ而車臺ボウト一挺合一五挺押來ル右高木引取後住江庄太郎川上玄齋柄三尺穂三尺野太刀之如キ逞キ大長刀を杖キ兩人御番所ニ罷上り住江申入候ニハ三條中納言樣追而當御門ゟ御參内之處御門之光景以之外之御容体如何成ル譯柄ニ候へハ斯ハ嚴重ニ候哉承度存候と申御趣意ハ未タ承知不致候へ共會藩之沙汰も有之如是さらバ三條朝臣之御通行ハ不苦哉何卒會津之方へ懸合被給と申其時一人參り會人へ打合候處小池帶刀手帳を繰三條卿ハ御通行不被爲叶と答其段申向候處さらハ卿の御行列ニ大炮ハ壹挺ニ而是而已不足ニ及兵具携是非御參内ニ候間車臺今一ッ拜借仕度と之事河方列ゟ既ニ先日ボート二三挺御國へ差下し漸同器ハ一挺也此儀ハ御斷申と答川上玄齋側ゟ會津今日之振舞扨々怪キ事沙汰之限りニ候と會津之物々敷形勢を白眼て申け

ゟハ原田次郎右衛門傍ゟ申候ニハ會津　勅命ニ寄り右之次第也何そ會津を可恠事哉候我ノ〳〵共も同斷也と申たゟハ兩人共流れ候汗ハ如瀧押拭ノ〳〵引取候處御門際ニ而小坂小次郎駈來右之三人何ゟ咽合無程小坂取て返し候而一人亦御門内ニ來三條卿ハ此御門ゟハ通行無之と屆引取申候後車豪之普取交どう〳〵夥敷足音大地ニ轟キ候間小池帶刀老武者坂本角兵衛を始會之士卒えた〳〵と鎗を取延筒先を揃へ門扉ニ進ミ力足を蹈鳴らし候間をかさず此方之御人數も不相劣込寄を見て御番所ニ居殘候面々も飛下り〳〵鎗引提ケ駈付俄ニ手拭を引裂キ〳〵錦襌ニ掛ケて待懸たり幸ヒふる哉轉法輪ハ寺町を南へ御打過ニ相成御隨身之人數幾ゟと申限無之夫より丸太丁へト横切レ被成應司卿之御裏門へ御馬御乘付候迄ハ後陣ハ未タ同卿之御門前へ相支へ申候由其間七丁計り從士之爲ニ往來塞かり申候由傍觀之噂ニ御座候大筒手彼所ニ相詰候節見上候ニ卿之御爲人柔順ニしてケ樣之節ハ御ゟるびゟ御乘馬如何と見上候處每と違ひ威風凛々として流石ハ日本之親兵手打間ニ今般之際ニ輻輳致候も理り也と感歎致候と物語申候然處應司卿へハ同卿ゟ不遠御緣娶之御約束ゟり旁以御當家を指て御出と相見當御内ゟ直ニ御參内之御含ニ被變裏門ゟ三條樣御入來疾ク〳〵御門明候へと聲々ニ呼り候へハ御勝手へハ相達候樣子ニ御座候へ共何之物音茂無之故宮部鼎藏進出て發而之御懇切を被思召是程迄ニ最前ゟ音内仕候ニ御返事さへ無キハ是非もなし好シ〳〵乍恐御門打破て鼎藏御案内仕候半と眞先ニ相構へたる五十ボンド之車豪グワ〻〻〳〵と差向放スぞ〳〵と聲を限りニ火繩を打振り叫ヒ候へハ折節關白樣ハ御參内留守居之靑侍共大ニ周章て迷ひ跡ハ兎もゟゟゟ早ク明ケずハ御館忽焦土と成ハ眼前也と忽扉を左右ニ押開候間三條樣初腹心之面々迄推參を遂ケ人を以早速御赤情を切ニ　天廷へ被仰通候へ共融通礙と寒り稍〳〵ゟばし御待合ニ相成候へ共何たる御模樣も無之其紛ニ乘し夫迄隨從仕候大筒手之面々ハ寺町御堅メ右之形勢本職之儀ニ候へハ一刻も馳加り申度是ゟ御暇奉願候と相屆ケ足早ニ駈來御人數ニ相加り申候時ニ三條卿ハ暮近ク迄右之成行ニ付段々御進御當所ゟ大佛之樣ニ御出被成其跡を御慕被成一所ニ御打寄之御方々ニハ西三條卿、廣幡卿、東久世卿、澤卿、壬生卿夫ハ切置寺町御門へハ會士共ニ覺悟を不亂用心堅固ニ皆々必死と相成何ニ而も攻寄來レかしと若殿原え勇んて待懸たり此時上杉家之藩士兩人鎗を引提急キ來り此御無勢之樣ニ奉見候日ノ御門前ニ出張仕居候同藩之面々ゟ物數ふらす候へ共御加勢仕申度と云共時河方列ゟ御深切千万忝候へ共殿を持候人數追々ニ駈集居候間人數ニ不足ハ有之間敷萬一之節ハ御志を願申儀も可有之事も候半歟左候ハヽ御一人御通路可被下早速ニ駈參シ申候半と申置亦會津之方へも申向直ニ元來ル路へ引返申候後殿ニハ

頭取　野田一之助　松村十之允　水野傳左衛門父子　甲野左二右衛門　戸田儀兵衛兄弟　兄弟乃美仙之助

大野要助　芝田左助　隈部彦四郎　城十郎右衛門　貴田權内　宗村左七郎　草野長之進　平井五左衛門

高橋九左衛門　岩崎直衛

當日猪狩ニ行同日暮比駈付候面々

上野惣右衛門　兄弟　手島惣右衛門　下林庄左衛門

宇治遠足右同刻駈付候

宮本傳右衛門　宮本ハ當時御留守居助勤也　松岡久左衛門　御物頭六人　足輕百人　番士組脇子弟共四十貳人　大筒手

暮昏之比會士ゟ長州も大分穩之聞ニも相成御人數も相增候間一手之人數引揚候へと屆候へ共如何成樣子ニ爲有之哉漸ク夜ニ入六ツ過ニ引取申候右之模樣ニ付御人數二手ニ引分ケ貳拾壹人宛御門際ニ出帳居殘りハ御番所ゟ時を計終夜甘日迄惣出ニ而詰切申候前日ハ暮過ゟ暴雨時を作て降候處陣笠ニ而ハ凌難有之候故出張之節ハ御門ニ建添居候長屋之軒下ニ這入折敷甚難澁仕候間御留守居之方へ懸合俄ニ御仮屋取建候へ共三所ニ而ハ三拾間計之小屋懸故漸ク明ケ方ニ出來仕候老若共綿襌を迦し候事翌朝飯ニ及申候前夜八ツ時比内膳殿直人殿騎馬ゟ惣勢無殘被召連御番所ニ出方有之噂之趣ニハ大佛ゟ歸來候步小姓申候ニハ彼所ニ集居候人數千四五百有之未タ列を不崩彼是不穩形勢之由ニ付出張致候と車豪貳挺を前後ニ押出陣之仕度ニて被參候間兩勢合て雲霞之如相成候間此人數を會津ニ見せ申度皆々噂致候處會津之士貳拾人計夜廻り中押分通行致候間若手之面々是ニ而よしと云無勢ニハ餘程肩ゟすぼりたるゟと笑申候同夜四ツ半比探索役寺尾大里濡ゟぶたゟ不斗來宗村私出張之側ニ近寄候間兩人立寄今朝來之模樣今の今迄何たる譯ニ候哉探出候哉と

申けゞハ今朝ゟ出懸餘程駈廻り候へ共一向ニ精敷事情突留不申會津上杉因州阿州方申合せ　朝廷御一洗と申處迄漸聞出申候と云成程思當り候といらへ嘸々空腹ならん御番所ニ被參御焚出之殘り有之候被給候へと勸遣申候内膳殿被參候而も譯ハ存無之同人噂被致候ニハ何ニもせよ兵亂差起候而ハ大切也西園寺殿へ人遣吳々强氣之御沙汰無之樣申入置度序ニ此節之濫觴をも内々尋見申さんと愛敬左二馬ニ何か細ノ〳〵と被申含遣ニ相成候處折節此御方も御參内留守ニ而事情ハ分兼申候處八半比左之通（尊攘錄探索書に「十八日晝後堂上方へ御廻章ヲ以御達」との前文あり）

一夷狄　御親征之儀未タ共機會ニ無之　叡慮候處御沙汰之趣施行ニ相成候段全思召ニ不被爲在候何レ　御親征者被爲在候得共先此旨更ニ被仰下候尤於攘夷　叡慮ハ少も不被爲替候　行幸暫御延引被仰出候事　八月十八日

右之通被仰出候仍而爲御心得可申入旨被申付候此之如ニ御座候以上

八月十八日

松平加賀守様
松平大膳大夫様
宗對島守様
松平土佐守様
細川越中守様
御留守居中

松平土佐守様御内
山本鐵之助持參

御番所へ

兩傳奏
雜掌

追而御廻覽之上飛鳥井家へ御返可被成候

方今形勢ニ付大藩不及申小藩之向々在京之人々早々九門外へ可相詰旨御沙汰候事

八月十八日

同夕禁裡御使番議奏衆ゟ之使茨木左兵衛督持參

（中略八月廿一日の條に出つ）

大佛ニ而十八日之夜光景三條卿ハ狩衣其外之卿方ハ皆着込之由御追從之徒大略甲冑大篝火を五ヶ所ニ焚ク牧和泉宮部鼎藏軍師と成て烏合之徒を扱事五指を動か如し忽一隊之堅陣と相成千萬人攻來候共難當見候と段々見物ニ參候他藩士大ニ感賞致し候由牧和泉ハ久留米之社人近年御直參と相成宮部と肩を並へ親兵其ノ右ニ出ル者無之鼎藏へハ親兵ゟ先生ノ〳〵と唱一統敬服致居候由濱翁咄ハ先日來御人數調方引除と相成役も親兵ニ而ハ幕之内之由翌日七卿中國下向之節ハ附從居候徒兵七合通御暇を告ケ方々へ退散皆々樣藁草履を被召竹之皮包之御飯を被召手ニ水を受て呑給位ニ而憐成御景色伏見ニ而ハ御傍ゟ干菓子共求獻候長門守樣ゟ御案内之爲吉川監物急キ被差立騎馬ゟ駈行候へ共伏見迄ハ追付不申候由親兵ニハ久留米長州藝州備前之者共隨身御國ゟハ宮部一人附添參候由

一三條殿此外亡命之堂上方之内ニハ其中途悔悟ニ有之候へ共在擁之向も有之たる由

一長州引上候節土藩肥藩久留米等も入交罷在候由且中途ゟ姿を替再度都ニ立戻候由

一都下ニ集候浮浪之徒和州へ立越五條之代官鈴木源内陣屋を乘取候由ニ而猶險地ニ楯籠可申勢も有之人數之内ニも藩士も入交罷在候由

但本文虛實探索筋差出申候事

右之通ニ御座候以上

八月廿日

文久三年

東西御組　　定御修理詰

會津藩内　　松坂三内持參

御番所ニ持參

九門御固左之通

清和院御門　土州
寺町　仝　此方様
境町　仝　所司代
蛤御門　會津　廿四日雲州ニ被仰付候
下立賣　仝　仙臺
中立賣　仝　加州

乾　仝
今出川　仝　久留米
石藥師　仝　阿州

御所内御固左之通

南門　因州
日ノ御門　大垣
申ノ辻　中川
中ノ辻　小田原
近衛様前　薩州
臺所御門　（會津所司代）
公家門前　會津
新在家　藤堂

小藩在京之諸士兼而御請持場無之向キノ〳〵も前條之御達ニ而九門外廻廿〳〵ニ十人二十人三十人計宛相固メ他藩士ハ大分甲冑ニて有之火事羽織腹巻之面々ハ六七日之内外共ニ後鉢巻徒來共ニ自身鎗を引提ケ阿州ハ小者休ニ至迄甲冑ニ而市中ニ物買ニ出申候誠ニ南北朝之御代之都もかくやらんと被思申候　市中抔ハ家財をからげ申候由

一會津勤番惣替りと唱へ先日夥敷人數登込申候處　行幸前之由ニ而交代も止候間前後之人數ニてハ三千も有之由之處此節一同用ニ立候ハ深計略と今思當申候

一薩州士ハいつ地ニ潜ミ居候哉此節天ゟ降候様ニ方々ゟ群集仕候事若干員

一親兵浮浪ニ至間者を能く遣イ耳目自在ニ候處此節ハ飽迄不意を被襲一旦ハ周章仕候由

一小橋恒藏弟某ハ御親兵之内ニ而常見院と申精舎ニ五十四人客宿此節之動揺ニ付兄恒藏大ニ心遣組脇ニ斷頭衆ゟも噂有之暫南禪寺之様ニ避候様恒藏參内々咄合候處弟申分ニハ會津ゟ此人數も捕押へニ參候由忍之内ゟ注進仕候洛中ニ居候千三百人之親兵忽盟約を立五ニ助合皆々切り死之覺悟ニ而待懸たり今更迦候而ハ逆義ニ陥候間此場を動不申と一向ニ聞入不申とて恒藏ハ詮方無ク立歸申候會津ヘハ阿州侯ゟ段々手ヲ入親兵今分ニ候ヘハ無事と相聞ヘ阿州侯ハ十八歳甚令利之聞有之殊ニ老臣蜂須賀駿河利器量者ニ而補佐致し御評判宜く内膳殿も餘程心配有之たる由（中略）

此外見聞之稜々多端ニ候ヘ共御飛脚立ニ差懸り虚實も定かたく後便ニ讓置申候右之ケ條ハ御物頭始相組中ヘ精々打合記録仕候間間違ハ有之間敷現實相組中決死ニ差入書夜六七日之苦勞都下之露と消ふん事を殘り多く存し聊腐毫ニ留御異聞ニ奉備候ゑかし急遽之際々御門立交代之寸暇ニ認早筆誤字被是ハ御推覽を偏ニ奉仰候事

于時文久三仲秋念寺町（浩字アラン モトノマヽ）於御番所錄

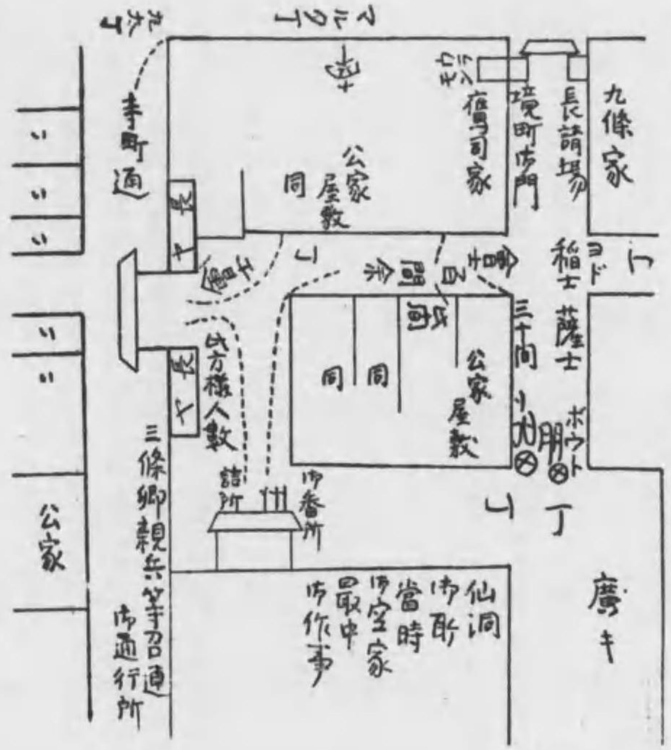
碧雲堂　奉呈　　蟻穴亭（岩崎昌直）

〔仝書〕

一先便脱漏之ケ條二三ケ條左ニ記ス八月十八日珍變無之迄ハ九門御堅メニ御築地外廻丁割ニ而請場々々之物頭ゟ輪番ニ而書夜廻方有之候處十八日後左之通有之洛中入口ノ〳〵ニ張番有之至て嚴重ニ相成申候九門之外二拾二ケ所九門御預無之諸藩不足之ケ所ハ九門御預之上外ニ一ケ所宛新町口と申タ所内膳殿請持其跡ニハ大筒手ゟ請持筈内膳殿ハ御二方様御着之上差引願ニ而早々下之覺悟ニ被及候處　朝廷ゟ御止ニ相成程見合再願之由ニ御座候

一會津ゟ御番所へ長州之模様變り候と返答ニ及白鉢巻等致候節ハ長士鎗鞘を迦し請取ニ參候淀士ニ詰懸候事萬一之爲蓙上隊列中央ニボウト六挺其間〳〵ニ合一等混シ備へ有之候自然長士ゟ戰闘ニ及候ハヽ淀士藩士ハ左右ニ開キ中央ニ備置長賊會士候大砲を一同ニ放懸ケ長士を壓ニ成さんと之工ミニ御座候由

鎗之穂先ヲ並詰懸候節淀士半丁余跡シザリ申候誠ニ危キ事無限



〔長州事情彦齋申出覺書〕

七卿脱走長州人京地引拂之事

長州並諸國激烈之徒申立ニテ　鸞輿親征之儀被仰出候末如何之譯ニテ候哉文久三年八月十八日轉法輪三條卿初都合七卿參　内御差留ニ相成長州モ境町御門守衛被免候ニ付諸國親兵激烈之徒三條卿エハ御總督之事ニ付東西奔走挽回之道ヲ付候得共雜叶三條卿エハ押而御參　内之筈ニテ鷹司殿下迄御出ニ相成候得共表御門閉有之御入込出來兼裏御門モ閉有之候得共押而御入込ニ相成候得共鷹司殿下者御參　内御留守ニテ何之御話合モ難成其内ニ長州人並諸國親兵激烈之徒同所ニ詰懸候處從　御所追々同所御引取ニ相成候樣ト之旨御達有之候ニ付一ト先大佛之樣ニ御引拂ニ相成可申迚同所御立ニ相成候ニ付長州人並諸國親兵激烈之徒隨從致シ大佛迄罷越孰モ打寄評議ニ及ヒ長州人ハ七卿ヲ國許エ致誘引可申ト申シ諸國親兵之内ヨリハ此所ニ御踏留ニテ御歎願ニ相成候樣ニト申シ彼是異論有之候處終ニ長州御出ニ相決候間御國親兵中ハ孰モ歎願ト申論ニテ有之候處右之通相決候ニ付テハ親兵之身分京地ヲ出候筋者無之ト申孰モ引返候内宮部鼎藏一人其儘七卿ニ隨從致脱走候右七卿者轉法輪三條樣西三條樣四條侍從樣壬生左衛門佐樣錦小路右馬頭樣東久世樣澤主水正樣ニテ右七卿ヲ長州エ致誘引候譯ハ根元攘夷等之儀者三條卿等ヨリ直ト　叡慮伺取ニ相成居候ニ付長州ヨリハ眞之　勅諚ト存居候ニ付七卿ヲ取放候而者　勅諚之眞僞難辨相成候哉モ難測其上七卿蟄居之身トシテ推而參内之筈ニテ鷹司殿下御推參之罪モ有之候得者京地エ御引返ニ相成候者自然者御切腹被仰付候哉モ難測此卿ヲ攘夷勅諚眞僞ヲ辨候爲證佐人長州エ誘引致候山ニ御座候其後右七卿之内錦小路右馬頭樣ハ長州ニテ病死ニ相成澤主水正樣ハ同國脱走有之五卿ニ相成居候處長州御初征之前右卿存念ニテ筑前エ不殘渡海ニ相成申候右八月十八日變動之儀者長州並激烈之徒見込ニハ會薩ヨリ　朝廷エ讒致シ候者ト孰モ致考察眞實之譯ハ如何ト申儀者今以相知レ申不候事

〔文久三年京都返達御用狀控〕

八月廿七日　九月四日着

青地河口より

（前略）

一京地騒亂之趣施藥院　會津様御留守居相詰居候由　に右同日（八月廿一日）兎三郎罷越御留守居に面會聞取之書付一通（中略）

施藥院に罷出松平肥後守様留守居鈴木多門に逢對一ト通及挨拶御用多中心配に存候得共去ル十八日未明ゟ京地之騒動不一方候處此方様にゑ寺町御門御警衛ゑ付下地人數茂差出置候得共尊藩より同所に御人數も被差出候に付猶増詰之取計ゐゐし相堅居申候右ゑ一向に子細相分不申如何様之御起□ゑ而ケ様に人數茂騒動仕候哉定而肥後守様にゑ御承知被爲成候に而茂可有御座左候得ゑ御重役御以下御承知に相成居可申其次第極々御機密之御事柄に茂可有御座候得共御内々に拝聞仕國許に申遣度段申述候處申談致返答可申由に而追而逢候處去ル十八日曉中川宮様ゟ人數召連參　内仕候様との御達有之勿論御所司代も同様に有之肥後守參内之上薩藩に之通達者主人より取計候様被仰付候間共旨取計其外阿州備前因州米澤山内兵之助殿にゑ議奏加勢棄室殿より御達に相成候付追々駈付御所相堅候處より夫を聞付諸藩も追々罷出仰山之次第相成申候由右まてに而内輪如何様之事柄に而ケ様に人數集り及騒動候哉役人段一切承知不仕との返答に付猶相尋候にゑ右中川宮様より被仰越候次第に付相考候處ケ様〳〵之次第に付御召に相成候との趣ゑ被仰聞候様に存候間其處今一應御重役方に御聞取も可有之御尋被下候様及示談候處猶聞合返答可仕との事に而引取猶又逢右之境ゑ重役共一向に承不申此儀者相察候處　朝廷ゟ中川宮様御胸中之御計共に而ゑ有之間敷哉との返答に御座候扨去十八日時分尊藩ゟ寺町御門に御詰之御方々たもきを懸鑓をもごき今茂爭戰之様に相見右者如何之譯柄に而御座候哉尋候處夫ゑ長州家堺町御門御堅被仰付候處被成御免候段御達御座候得共中々引拂候様子にゑ相見不申度々　御所より御使茂被差出候得共同様之事ゑ付受取に參候藩中ゟ爭戰に相成候哉も難計處より右之通たもきを懸覺悟仕候儀に御座候段返答候事

八月十八日勅使長藩邸に臨み其禁衛を解き退京を命ず尋て長藩三條實美等の復職を請願す

〔尊攘錄探索書〕（文久三癸亥年）

十八日柳原殿長州屋敷へ勅使長州人數不殘今日中引拂候様被仰出候

右に付異變之儀出來も難計依之嚴重之御固被仰出候事

〔採薪錄〕

長門家より被差出書付之事　二篇

勅書之趣奉畏候然處御取調之儀ハ如何に御座候哉不奉承知候得共　行幸等之儀既に御決定に相成正議忠勤之人望も有之候三條殿御始有志之公卿方不殘御譴責之御様子且又堺町御門御固被差除脇方に御預通路をも被差留之由其外御門々々通路留之御沙汰に相成殊に人數も多分御引入諸所警衛被仰付候付彼是之御模様不尋常　朝廷御一大事と奉存候に付關白殿下迄參殿仕候　九重内之御様子不奉伺候得共萬一難心得儀も御座候ハヽ　御座所近に御警衛仕度寸誠に而家來一統疎暴之所業無之此段深御慮察被成下三條殿始速に御復職被爲在其外諸事如常之　御沙汰被仰付被下候様奉願候以上

八月十八日

勅書被仰下候付歎願之次第乍恐委細　勅使に過刻奉申上候如何御評決被仰付被下候哉幾回にも願筋相叶候様謹而御命奉待上候處堺町御門御固御免被仰付候に就而は國許海防盡力仕度奉存候間毛利讃岐守吉川監物を始詰居候者唯今より歸國仕候尤攘夷之儀彌御依賴に被　思召候段被仰聞難有奉存候就而は此上擧國必死に盡力可仕候猶又歎願仕候通三條殿御始積年之精忠人望に屬候御方今度攘夷之先鋒御懇願も被爲在候に付國許迄御供仕候何分御復職等之　御沙汰奉待上候以上

八月十八日

八月十八日本藩各所警備の概況を幕府に申告す

〔尊攘錄御建白御國議、文久三年ヨリ元治元年マテ江戸返達御用狀扣〕

（幕府監察の示達により申告す）

京都江戸大阪並其外國々海岸等之御固當時相心得候儀可申上旨御達御座候越中守儀左之通被仰付置候

一京都御警衛且火之番茂被仰付置候付人數炮器等差登置申候

一御達之趣ニ付　禁裏爲御守衛家來並乘馬大小炮等差出置申候

一肥後國天草郡之儀越中守に御警衛相心得西國御郡代屋代增之助樣より御達次第人數差出候樣被仰付候

右之通御座候此段申上候以上

細川越中守内
清田新兵衛

八月十八日

八月十八日本藩政府は越前使者の行動を在京重役に通報す

〔自筆狀控〕文久三年元治元年

委細御申越之趣致承知八右衛門儀着之上得斗樣子承り大ニ咄合之都合相成申候御使者同晦日三人共御花畑に被召出席中茂罷出御直書直ニ差上御傳言之趣上に申上ニ相成去ル二日監物宅ニ招同席中御奉行中得斗咄合別紙之趣上より御返答之御直書去ル七日御渡八日迄ニ三人共罷立薩州に參り夫ゟ直ニ歸國之由御座候越前にも此方樣ゟ御使者被差越委細之樣子承樣方に申上ニ相成候樣ゟの儀右御使者ゟ頼談ニ茂相成居候間同席中之内又ゟ御奉行之内ニ而茂被指越管ニ候得共近來御地之事躰等を以段々勘考いたし候へハ當時越前に御使者往來いたし候而ハ他之傍觀ニ係り御地ニ而之御事業ニ差障候樣之儀共ニハ成行申間敷哉ゟ付御直書御仕出之方ニ茂相成可申哉其儀ハ未決着ハ仕不申候間右左樣御聞置候樣右候以上（六月廿四日沼田勘解由より藩政府への書翰を參照せよ）

八月十八日

沼田勘解由殿　御中老
鎌田軍之助殿　御家老

八月十八日本藩政府は本月二日附沼田勘解由よりの情報及び自己西下の通議に答ふ

〔自筆狀控〕文久三年元治元年

去ル二日御地仕出之早打御飛脚同十日着先月廿五日被差立候御飛脚去ル十四日着勘解由殿ゟ之自筆狀夫々致拜披候薩州異船取合一件付而御地之御守衛御斷茂可被仰上哉之旨粗評議之趣得御意候付而御地之事情委曲御申越無圖斗之御斷ハ迚茂可被出來兼との御見込之趣茂夫々致承知此元ニ而茂東西之事情等種々評議坂崎組殘り片手ハ被指登方ニ相決近被指立管之段ハ別紙申達候通御座候良之助殿御上京御猶豫被仰出候御請延引付而不一方御心配之段巨細御申越之趣致承知右御請之儀ハ早ク御仕出ニ不相成候而ハ不相濟次第ニ而外ニ早打御飛脚差立申達御用有之共御便ニ仕出可然ゝ申談置終ニ右早打指立候埒ニ至兼申談相決不申彼是ニ而大ニ延引ニ相成先月十三日差立候御飛脚ニ御書方ゟ申越良之助殿ゟ之御直書茂右之御便ニ仕出申候由最早疾ク着いたし居可申候此元茂不容易事件迄ニ而決兼候事而已有之必多物延引三條樣に被對殊之外御不都合ニ茂相成候由嘸々御心配被下たるゝ心外千萬ニ存申候事ニ御座候右之趣内膳殿に茂宜被仰達被下候樣御賴申候

一御地之形勢朝夕ニ相替彌以及切迫書面ゝ而貫通いたし兼候付古小路嘉右衛門に委細御申含先月廿五日中之急ニ而被指立候段被仰越同人儀茂去ル六日此元着委細之樣子致承知候其後去ル廿七日之曉四條南御旅所ニ板札之寫を茂被指越右

之次第ニ付公武御合躰之事抔只今被仰立場合ニ無之依而勘解由殿引返御下國之儀三條様ニ御相談之處御存寄無之内膳殿右段々之次第委細御申越之趣具ニ致承知候御出立跡兼勤等之儀付而茂被仰越趣致承知奉達尊聽ニ茂置候事ニ御座候此元惣躰之事情ハ別帋申達候通何茂勘解由殿御着を相待諸事御相談及可申定而御出立跡と相考軍之助殿連名ニ而右貴答荒々申達候以上

八月十八日

沼田勘解由殿　　御中老
鎌田軍之助殿　　御家老

猶々勘解由殿ゟ内狀を以委細御申越候趣致承知候宮部轟木事又林藤次永鳥三平至急被指登候様との事抔誠以埒茂無御事何様御着之上得斗御相談ニ（以下切れて無し）

追啓申達候澄之助殿御上京之儀ハ今日被仰進茂被爲濟候付一ト通別紙申達候通候處國友半右衛門小篠熊雄今晝着兩人ニ被託候御内狀之趣且沼田勘解由茂明夕内牧ゟ之内着之段申來同人咄之趣茂委細承候上猶參談之次第茂可有之哉乍然薩筑ゟとへ御使者茂致往返候末ゝ而土臺之御議定ハ迚茂御動ニ可相成様無御座候得共追而申達候迄之成丈御内分ニゝ ゑし被置候様存候以上

同日　　右同

鎌田軍之助殿

右二通ハ封印之自筆ニ而沼田鎌田茂京地出立跡ニ相達長鹽ハ勿論代役等不被仰付置候得ハ何分封印物ハ同封いたし得不申尤封印物ニ印を付置候分ハ開封いたし候由ゝ而右二通ニ御國へ返し候處最早跡事ニ候得共其節矢張此元へ相達候振ニ而扣等いたし置不申候而ハ迫而手續分兼候儀も可有之と御國ニ而開封いたし候を下廻ニ而猶差登候付キ六いたし置候事

八月十八日在京本藩奉行鎌田軍之助は時局の急變に關し藩政府に通報す

〔自筆狀控〕（文久三年元治元年）

以別紙申達候今曉七時頃より　御所内混亂之様子ニ付承合候處中川宮様近衛關白様薩州因州會津ニ而　御所之四方を固メ御親征なとハ宜しからさる段御諫奏ニ相成　叡慮之旨を以九門内ニ者議奏傳奏を初一切出入被禁止候就而者三條様に者親兵等千人餘相集守護いたし長州土州之人數より押而御　參内を奉勸其通ニ相成筈と申候左候得ハ只今ニ茂干戈ニおよひ可申薩州抔ハ三郎殿上京被仰出候處猶差止ニ相成候主木ハ三條様之山ニ而其外ニも右之取扱ニ相成候面々ハ一々首を切掛ケ可申との息込之山ニ而中々只ハ治り可申様も無之今晩迄ニハ炮聲相轟劍鎗相交り可申儀者眼前之事ニ御座候右様混亂之起りハ一朝一夕之事ニ無之儀と相聞申候中川宮様を初右之面々ハ三條様方之派と逆居三條様方ハ浮浪士之說を御主張ニ相成攘夷　御親征抔專ら御主本と相見申候處右之面々ハ其等之事御不服ニ而攘夷之儀者將軍家に御任せニ相成旁可然哉之御存念に而御周旋も有之たる哉之處此節　行幸親征ハよろしかる間敷候段御建言ニ相成候處右之說を主張いたし候因州家老何之權之助と歟申人を同家中勤王家二十人計ニ而打果候由よつて右之二十人者即刻被召捕當時者いつ方之寺ニか牢舍被仰付候處右之二十人召捕之節　御所に駈込可申抔之手段も有之旁事情切迫ニおよひ申候由九門御固之諸藩之御人數者都而甲冑拔身之節に而洛中之騷動不一方注進騎馬駈逃之有様誠ニ櫛之齒を引クか如ク中々紙筆ニハ難盡此方様も惣御人數御繰出ニ相成申候へとも近來者御人少ニ而中々他藩ニ對し而ハ恥敷次第之由御座候御一門衆も惣勢二百計ニ而切火繩ニ而いつ何時ニ而も出張支へ無之様御備ニ相成追付　御所天機伺旁寺町御門ニ出張ニ相成手續ニ御座候右之通ニ御座候へ共實情ハ突留たる儀相分兼畢竟ハ九門内一切往來不相成事ニ而　御所之様

子等實ニ聞兼共上三條樣ニハ右之混亂ニ而伺等も出來兼申候間只々騷々敷迄ニ而御座候其外樣々之風說も御座候得共前文之趣實說と相聞申候間先ッ不取敢御注進仕候以上

八月十八日　　鎌田軍之助

御家老
御中老　殿

尙々本文混雜之內薩長ハ眼ミ合大筒等向合居候由只今阿州御世子御參內ニ相成居いつれ程能御取計ニ可相成御覺悟と相見へ候へ共中々御成功之埒ニ相成候儀如何哉と見込申候以上

八月十八日本藩政府は時局切迫につき長岡護久藩主に代り上京すべきの命を受たる旨を達し且つ之を京師に報す

〔文久三年元治元年自筆狀控〕

今十八日態ト早打飛脚差立申達候追々及御取遣候坂崎忠左衛門ニ殘り組共炮術手來ル廿二三日頃ゟ追々出立之筈付而ハ別紙他筆を以申達候通御座候御地ニ而住居所等之儀都合宜敷樣御取計候樣存候彼是混雜出立延引ニ相成大ニ御心配相成申候

一薩肥筑御使者往來越前ゟ之御使者も此間參着先いつ方も御同樣之御事ニ而被仰談も不遠相堅可申候當時不穩樣子ニ付而ハ兼而御守衛も被蒙仰候御事も有之且被仰立之筋も被爲在此節も太守樣可被遊御上京處御藩屛之御任被爲在候付爲御名代澄之助殿御差登被仰立之筋共外共被遊御委任旨今日被仰出直樣御供ゟらへ等も被仰付前條御堅も付候ハヽ不遠御發途ニ相成可申共以前先公武ニ御建白被遊御差出ト申御運ニ相成居申候ゟるし御地之事躰勘解由殿ゟ委細御申越之通ニ付御着之上得斗御相談万般之儀取堅メ申筈御座候此節ハ御供も餘計ニ相增可申見込ニ御座候間東福寺如き之大寺院を御見立成丈ケ御一所ニつほミ申樣之所柄吟味之儀御留守居抔ニ得斗御示談被置候樣尤此元御發駕已前ニ右樣之事柄申含誰そ差登可申候得共一刻も右之御手配相成居候樣御配意可被下候猶後便委細可申達候得共先不取敢右之段迄申達候以上

八月十八日　　御家老
沼田勘解由殿　　御中老　連名
鎌田軍之助殿

〔文久三年四月より元治元年四月迄御記錄〕

一左之書付朽木內匠より被相渡　　御右筆頭

方今事體益切迫ニおよひ候付而ハ　公武ニ被仰立候筋被爲在候付　太守樣早々可被遊御上京處藩屛之御任ニ被爲在御近國外寇之儀茂有之候間　御名代として　澄之助樣御差登右被仰立筋共外共被遊御委任旨被　仰出候事

八月十八日

本文之通ニ候處去十八日帝都非常之聞之有八月廿五日言上有之候付澄之助樣良之助樣御花畑ニ被爲入　太守樣御一同御評議之旨被爲在左之通被仰出候由ニ而御次より書付相達候　八月廿七日

今度　御名代として　澄之助樣御上京之節良之助樣ニ茂　御一同被成御出京候樣被仰出候事

八月十八日本藩政府は坂崎忠左衛門組上京に關する出發日限及び人數割を定め在京の奉行に通

牒す

〔文久三年機密間日記〕

拙者組共今度出京被仰付置候付最早用意相仕舞申候此段相達申候以上

八月十八日　坂崎忠左衛門

御奉行衆中

猶々本行之通ニ付別番三通都合四日ニ被差立候樣有御座度此段及御内意申候以上

來ル廿四日　津田三十郎組共　御昇之者ハ御手當方より達ニ成候也

同廿五日　兼坂五郎右衛門組共　同廿六日　上野堅五

安藤十左衛門組共　貝太鼓役ハ御手當方より達なり　坂崎忠左衛門

藪田八郎左衛門　貝太鼓役十二人

寺本八郎助　同廿七日　藤崎喜八郎

岩崎隣之允　御昇之者共　出田作左衛門

以上

拙者組津田三十郎組山川岩之助儀去ル八日方鶴亂相煩其後胸痛差起今以快無之候付此節出立之砌引殘申候尤全快次第出立いたし候筈ニ御座候此段相達申候以上　八月十九日

〔文久四年御國江戸往來狀扣〕

以別紙申達候坂崎忠左衛門組共出京被仰付置候付爰許出立日限之内定并上下人數等別紙之通候條此段爲御存申達候

以上

八月十八日

鎌田軍之助殿　御家老

大筒手　志賀何右衛門　御中老　連名

門弟上下七拾人

右者八月廿二三日比出立之筈

御番頭組共　坂崎忠左衛門

上下百四拾二人　上下六拾貳人

外ニ御醫師兩人

右者同廿四日出立之筈

御物頭并副頭　右者同廿五日出立之筈

御物奉行大組附　右者同廿六日出立之筈

外樣足輕御昇組ども上下百七拾一人位　無役着座上下

貳拾五人

右者同廿七日出立之筈

右之通候事

八月

八月十八日京都の變に當り西岡鄉士澁谷時太郎等十餘人馳せて本藩親兵宿所淨華院に來り藩兵と共に忠節を盡さんことを請ふ

〔文久三年京都諸扣〕

澁谷時太郎　仁木兵部　宇田雅輔　小倉松壽。服部養元　澁谷小源太　宇田郁太郎　平井次郎

小倉助作　津田小十郎　上羽歌之助　中路伊之助。上野太兵衛

八月廿日

右者西岡郷士ニ而自然之節者此方様御人數ニ加り御忠節申上候覺悟ニ而十八日之動搖ニよつて御親兵之宿所淨華院駈付候山尤丸輪之兩人ハ未タ參着不致由ニ而小坂大八ゟ鎌田ニ書付見せ候付記置候事

八月十九日朝廷更に長岡護美召喚の勅諚を下さる

〔京都返達御用狀控、文久三年京都諸扣〕

長岡良之助

毎々苦勞ニ者　思召候得共追々切迫不容易時節ニ付急速御用被爲在候間上京有之候様　御沙汰事

八月十九日

八月十九日朝廷攘夷の勵行を幕府に促さる

〔京都ミやけ〕

八月十九日被　仰出候事

去六月廿九日攘夷期限等之儀不都合之次第非一候ニ付小栗長門守御沙汰之處數日否之御答不申上ニ付幸七月廿四日松平式部大輔出府之便伺　天氣登京之砌前件御催促被　仰付候處今以因循打過候段如何之儀被思召候迅速可奏攘夷之成功嚴御沙汰之事

右關東被　仰出候事

八月十九日立花飛驒守は書を我藩主慶順に贈り相互協商國事に盡す所あらんと欲する意を陳ぶ尋て慶順同意の旨を答ふ

〔尊攘錄御建白御國議〕

細越中守様　立飛驒守

御直披

一翰啓呈仕候秋冷之候御座候處愈御安康可被成御起居珍重奉存候其後者打絶久々御無音罷過何共不本意之至御仁免可被成下候陳者方今天下之光景一變仕不容易秋ニ相成如何御處置被爲在候哉何分御存之通不如意小子駑と見留附兼苦配心痛而已御座候今度改而申上候迄も無之候得共乍此上萬事御察情被成下度附而者何も御同意之筋ニ仕度以來以紙上御打合申上候義も可有御座奉存候全體最前より呈書可仕候處久々不快ニ而引入罷在漸昨今少々宛快方ニ赴乍存御遠々敷其段者猶又御仁恕可被成下候當冬ハ小子茂京詰被仰付候付不遠押而も出立之含ニ罷在彼是用意中ニ御座候伺候得者貴兄にも御上京被爲在候哉旨追々貴臣之方々被參咄も御座候由何分之御治定ニ被爲在候哉差附恐入候得共御同席之御中不顧憚相伺候條何卒御教示奉希候且亦御一國之御處置振も不苦被思召候者委細御教示奉希候追々諸方よりも諸生等參色々世評申立疑惑仕候事も多ク有之華國も御同様と奉察候何れニ不容易世間と相成乍不及心痛而已は罷在候扨又如何なから越前之方御近親ニ被爲在候得者定而彼方之國議御聞及も可被爲在是又乍御面倒御教示奉希度候此餘色々伺度義も御座候得共何分紙上にて者書碎兼實殘懐此事ニ御座候併御模様ニより追々申上候義も可有御座乍御面倒御教示之程呉々も奉希置候先々御無音之御詫時下伺旁如是御座候頓首拜

中秋中九

二白時下御自愛專一奉祈候薩長者已ニ開兵端候由併其後爲差事も傳承不仕薩州者御隣國にも有之候間其後之模様御聞及可被爲在伺度候扨乍前後若御發駕被爲在候者御趣意之所伺度且御供連等も何分之御模様ニ御取究相成居候哉何卒々々伺度奉希候先々本文之義迄書中彼是失禮之筋も可有御座唯々兼而御察情ニ任せ伺候事ニ付何も御用捨奉希候且又御他見等者御斷申上候御披見之後直ニ御火中可被成下候將又取紛茜亂書御高免之程奉希申候不具

越中守様　　飛驒守

内用

〔仝　書〕

薫墨拜閲仕候累日秋冷移候彌御清祥之段雀躍仕候從是こそ御疎情ニ打過候中却而預御訊問縷々御眖念之御書中萬々忝
内汗顔之至御海量可被成下候久々御逸例之處近日御甘快ニ被趣候由乍此上御自養專一ニ祈申候當冬は御出京被蒙仰候
付不遠御出立之御含ニ而御用意中之由彼是之御心配御事と想像仕候然は方今天下之光景不容易秋ニ相成如何處置いた
し候哉御問合之趣具ニ致承知實ニ切迫之事躰ニ相成慨歎之至御座候就而ハ上京　叡慮之深旨奉窺時宜ニより候而者關
東へも罷下兎角公武御一和之御基本相立候樣乍不肖周旋之覺悟ニ罷在條處此砌滿屏萬般之手當筋一時ニ差湊在國不仕
候而ハ如何躰ニも整兼候間名代として弟長岡澄之助登京致せ候筈ニ而專及其手賦居候内近日京地動搖不穩樣子相聞兼
而御警衛も被仰付候事ニ付用意濟次第弟長岡良之助も澄之助一同近々差立候筈御座候將又越前之國議承及も有之候ハ
ゝ被成御承知度由既ニ彼地よりは先般使者參着申越候趣所詮皇國之御爲盡力何れ共　宸襟を奉安ニ歸し小子所存も大
略相替不申候儀ニ御座候右之趣貴報爲可得御意早々如是御座候頓首

中秋　日　　越中守

飛驒守様

二白御端書之趣忝々是よりも隨時御自重懇祈仕候薩州者先度戰爭之後差たる異聞も無之當時先平穩之樣子御座候且又
前文之通京師之動搖も聞候事ニ付弟兩人共相應之人數は差添候心得ニ罷在申候近日繁忙之餘暇執毫麁漏不少可有御座
御用捨希申候以上

八月十九日在府本藩田中彦右衛門は三港拒絶に對する幕議の内情を報告す

〔文久三癸亥年　尊攘鉤探索書〕

廟堂中内評議之由未タ外ニ相聞へ不申趣獨窃ニ聞取去ル十五日口上ニ而申出置候得共猶他日爲御參考書取ニ〆差出
候左之通

廟議横濱鎮港ニ御一決近々御取掛りニ相成候筈ニ御座候趣者去ル十一日書取差出置候通之處同十三日廟堂御評議ニ而
澤勘七郎ニ（七月廿六日外　匿奉行ニ再勤）此度之應接被仰付候筈ニ而（初御評議は應接役三四人も被仰付候歟之筈ニ有之たる由之處立會等ハ何ニ程有之候共應接ハ始終只壹人ニ而不仕而ゝ談判行違等出來不都合ニも可相
成との事而壹人ト相決候歟之由）未タ被仰付ゝ無之御内意之節（澤ハ既ニ當五月五日小笠原ニ被差添應接ニ參り候筈ニ而其節彼之始末ニ而出し拔ニ逢殘念がり被居候仁ニ而其後も自分應接いたし候て斯々ト容易ニ論し被居候仁也）
澤勘七郎被申立候由ニゝ勅命通り三港拒絶之儀應接可仕候得共横濱一港鎮之儀應接ハ迷惑ニ付一港之儀ニ候ハゝ御斷
申上候ゝ申出候由板倉侯所存ニゝ廟堂有司いづゝも因循ニ成行勝當節之切迫外ニ活路無之場合ゟ責てハ一ケ港なり共
言語應接ヲ盡し斷然歸攘不仕而ゝ天朝にゝ勿論諸々侯にも不相濟是ヲ以信義相立て左候勅命其御趣ヲ奉立候計りと申譯ニ
相銷し跡二ケ港條約改正不仕而は（ゝ無之御港ハ大城近邊ゆへ兎ニ角）
不相成御見込之由右家臣〆承候事上ニ而二ケ港之處不容易形勢ニ可成行ヲ以何分御猶豫被下候樣ニと跡二ケ港直に勅命通
り遵奉難仕罪ゝ御自身御荷ひ天朝にゝ罷出御歎願之儀ゝ被相考候由（板倉侯所存之趣ゝ然ル處勘七郎右之通申出ニ付板倉侯
右藩近臣〆承候事）
之身として勅命通り三港拒絶せんと申候者を不相成申譯ニも難參去とて又三港拒絶ゝ相成候而ゝ前條之通責てハ一ケ
港と申處ヲ以廟堂漸々振興し折角一決ニ相成候ものヲ今更三港ゝ相成候而ゝ皆々ゟきれゝて出來ぬ相談ゝ相成可申名
ゝ美なゝども廟議崩ゝ候ニ至り而ゝ因循ゟ崩候茂同樣之儀ニ而御心中殆ト當惑有返答御心配ニ有之たる由之處翌十四
日澤勘七郎一橋殿にゝ罷出（一橋殿〆被呼たるとも云）右三港之儀申出候處一橋殿ハ（相考見候ニ一橋殿ハ板倉申出之處ニ而も初御不決
斷ニ而京師に御上りの筈等ニも相成居候處漸く一港銷之處ニ御決斷ニ御成被成候儀之由然ルヲ三港之儀は可然とて直ニ澤勘七郎申出
之通即座ニ御承知ニ御成被成候ハ不思議之事ニ有之候尤深〆推考いたし候ものゝ說ニ一橋殿ニは平岡圓四郎なる才子附添申上候而〆
兎角獨り身逃れ構への御形ニ相見候東之有司壹人も攘夷する同志之者無之ニ付抔と申御書付も有之小笠原侯之事を御内訴被爲在候　依
儀等圓四郎輩之爲メニ賊輕俊之氣味ニ被爲成出來ぬ相談ニなる之御見込ヲ美名故直ニ御承知被爲成候事ならん（一說ニ是邪推かハ不知候得共澤勘七郎平素之大言今日大任
而澤勘七郎板倉侯ニ右之通一橋殿ゟ可然ゝ被仰たるとて申出候由ヲ蒙る之場合ニ至り翻其處〆出來ぬ相談と相成候事を知り

つゝ態ト三港拒絶と申出候事共ニは無之哉三港を鎖し得ル之力有之候ニ一港ハ容易ニ可有之筈也　勅命通り一時ニ三港鎖し不申共夫等之處ハ大樹公水戸公閣老身ニ荷可申との事なれハ大樹公之命ニ隨而可然事跡二ヶ港も手易く鎖し得らるゝ勢ならハ全鎖し候而可然誰る是を咎むへけんや今座上ニ而此論ニ及候ハ不審と申設御座候事板倉侯之意ハ横濱鎖港甚難し應接破候日ニは不謂して三港拒絶也依而無接ニ及候日々戰ト決し什難り萬一彼相服し首尾能不及干戈一港ヲ鎖し得バあつらい通也と申事ニ而此意も澤ハ承知いたし居候事之由誠ニ大器量有之實ニ三港ヲ斷り得るの鵬略有之候者ならハ委任之事故いつれニも受候而宜筈と申設も御座候事　右ニ付板倉侯御心配翌十五日御登城ニ而猶此評議有之諸有司ゟ一橋殿ニ御議論申上候歟之由ニ而又候元之如く一港相鎖し二港ハ延期御願立ニ相成候樣ニ御一決ニ相成候由澤勘七郎ハ矢張一港なるバ御斷申度との事之由就而ゑ無據不被仰付方ニ可相成歟之由然し退ケ候譯ゑ元ゟ無之外之事ニ相用應接ハ被見合ニ可相成歟との事然し未タ此儀ハ不決評議中之由承り申候

右之通ニ御座候以上

亥八月十九日

田中彦右衛門

八月廿日在京本藩奉行鎌田軍之助は行幸延期の勅諚及ひ三條實美等の動止等を藩政府に報告す

〔自筆狀控〕（文久三年元治元年）

以別紙申達候　御所向動揺之儀付而一昨十八日之夜五頃迄之處ハ同夜申達候通ニ御座候處其後茂不相替騒々敷委細別紙書取の通ニ而御役々晝夜詰切大ニ心配仕候然處昨曉頃より段々と相鎮候由ニ而御名代衆ハ同明頃御堅場所被引拂御備手ハ于今出張有之候三條樣を初外御五方之公家衆御同道ニ而長州之樣ニ被成御越筈之御樣子ニ而昨朝四頃迄ニ伏見付札本文長州ニ御越之御趣意いか樣卒仕急ニ御實情承糺可申と專ら御役々心配仕居候得共何方もノ〳〵大混雜ニ而未タ突留候儀分兼申候御模樣次第御途中迄御使者且爰許御警衛も少し寛ニ相成候間追懸け隨從も被差越御留守ニ茂御見廻御附人等之儀茂御不都合之儀無之樣御名代衆初周旋最中ニ御座候

ニ被成御着候由如何之御子細ニ而右之通と申儀ハ相分不申候得共いつれ　行幸御親征軍議被仰立之御方々樣ニ而御所向御警衛甚敷中々押而之御　參内可被爲出來勢ニ無之大小炮を初鎗之運送等一統之騒動不一方何分御心元なく思召候所より之御事ニ而も可有之哉御婦人樣方ハ聖護院或八瀬又は伏見街道之樣ニ御越と申迄ニ而委儀は未タ相分不申候得共御道中袖を被浸被成御出候を奉見請候向茂有之御痛ハ敷笑止千萬之御事共ニ而御間柄と申太守樣奉初嘸かし可被遊御配慮哉と誠以奉恐入候

一一昨十八日之夜半混雜中夷狄　御親征之儀未タ其機會ニ無之行幸暫御延引被　仰出候段御達ニ相成則別紙之通ニ而右付札本文いつ方も御警衛之御人數餘計と申内會津侯ハ七千計之御人數之由ニ御座候

之御主本ハ會津因州薩州なと國家ニ被換而之周旋と相聞夫と申茂關東之御策略共ニ而ハ有之間敷哉共被考申候右之動搖ニ而いつ吹出可申哉難計　御所之御警衛愈以嚴重之御堅ニ相成居諸藩茂同樣ニ而寸分茂難安寢食御座候内此節之儀ハ先ツ公武御一和之緒相顯候歟と被考内心ハ愉快之事ニ御座候一昨夜之御便後於御地嘸々可被成御懸念哉と幸交代之獨禮御右筆笠繁之助並外樣足輕ニ上々早打を以得貴慮申候事ニ御座候於御地茂御心配可被成と深察仕候此段爲可申達如是御座候以上

八月廿日

御家老
御中老殿

鎌田軍之助

尚々本文之通ニ而長州領ハ通行甚以難澁之稜有之候付海上差越申候事ニ御座候且又難盡筆頭儀茂御座候間直と御聞取可被下と奉存候以上

八月廿日本藩重臣郡夷則公武一和に對する藩主周旋の覺悟を在府の藩士に達す

〔申筆繼〕（文久二年壬戌）

八月廿日雨